

---

## Precious Melody -2nd Stories-

七海くれは

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Precious Melody - 2nd Stories -

### 【Nコード】

N14740

### 【作者名】

七海くれは

### 【あらすじ】

新たな年を雪景色が彩り、季節はまさに冬本番。

森野翔司はひとりぼっちの新年を迎えていた。そこに現れた彼の友人、秋野圭輔。

彼に誘われ行き着く先は、喫茶店『Hexagram』。

そこで出会ったたくさんの友人と、かつて愛した女の子。

誰もが夢見る『Precious Melody』を捜し求める青  
春ストーリー！。  
新たな物語が、幕を開ける。

## 序章：Howl Of Underdog

「……クリスマスなんて……。ざけんなああああ……。！」

街中で慟哭する青年に、道行く誰もが奇異の目を向ける。

と思つたら、不意にその青年は逃げるようにその場から走り去ってしまった。

彼の名は……森野翔司。単途一途の男。

吹きすさぶ寒風、周囲の冷たい視線、そして冷え切った自らの精神が、彼を『絶望』という名の氷の中に閉ざしてしまった。

絶望の淵に瀕した彼を救ったのは……友人の秋野圭輔。翔司のバイト先では先輩に当たる人物だが、年齢は翔司と同じ。

そのためすぐに意気投合し、『モテないギルド』なる組合まで結成してしまう始末。

この日は、人ごみの中を疾走する翔司と正面からぶつかったことで、彼のただならぬ様子を察したのだ。

「はは〜ん、読めたぞ？ おおかた、音遠ちゃんと灯夜のラブラブっぷりをこれでもかかってくらいに見ちまったから、やりきれなくなつて走つて逃げてきたんだろ」

「う……そ、そうだよ。そのものズバリだよ」

まるで心の中を見透かされたかのように言い当てられてしまった。だが、翔司に関してはそれを言い当てられた所で何かが変わるわけでもないのです、こう返すしかなかった。

「……もういいよオレ。クリスマスもいつもと同じように独りで過ごすよ……」

しかし、目の前の親友は意外な返事をするのだった。

「……バカ、2人だ。ついでだからオレも付き合つてやる。……ヤケ酒行くぞー！」

こうして彼らは、聖なる夜を酒に溺れながら過ごした。

月日は流れ……新たなる年が幕を開ける。だが部屋の中には自分が一人いるだけ。

「あーあ、またひとりぼっちの新年だあ……」

ため息混じりにそう呟いた翔司。両親は正月三日は母方の実家に帰省しているので、この家には彼しかいなかった。そして、時間はすでに正午をまわっていた。

「正月つつたつてなんもする事ねーからなあ……。眠いしまた寝るか」

再び布団に潜り込もうとした……が、それは直後に聞こえてきたインターホンの音によって阻まれる。

「ったく何だよ……正月早々……。寝かせろつての……」

悪態をつきながらもしぶしぶ玄関へと向かう。寝起きで重い体を引きずるように。

そしてドアをゆっくりと開けると……そこには見慣れた顔の親友が居た。

「よっ、あけおめ！」

「け、圭輔……？ ああ、あけおめ。いったいどーしたんだ？」

「年始周りに決まってんだろ？ お前んところが最後だ」

「ふ〜ん……。わざわざご苦労なこつたね」

「で、だ。お前さ、今日これから何か予定とかある？」

「いんや別に。これからまた寝ようと思ってた所だし」

「それじゃあ、ないって事でいいな。実はな、ちよつと来て欲しい所があるんだ。いいか？」

「いいよ。……ちよつと待っていてくれ、着替えてくる」

「オツケー。あ、チャリキーも準備しといてくれ、チャリで行くから」

翔司は2階の自分の部屋に戻り、身だしなみを整える。

（正月早々なんだと思ったけど、どっか遊びに行くんならいいかな

……)

待たせては悪いと思い、手早く着替えを終える翔司。そして、玄関で待つ親友の元に戻る。

「早かったな。んじゃ行くか。オレの後ろについてきてくれ」

言うのが早い、自転車で飛び乗ってスピードを出す圭輔。翔司も負けじとペダルをこぐ足に力を込める。

走り始めてから15分後、2人はシックな造りのカフェの前に居た。どうやら圭輔の行きたい所というのはここのようなのだ。

入り口の前の立て看板には六芒星が描かれており、その中に『Hexagram』と文字が書かれている。どうやらこれが店名らしい。

そしてドアには正月にも関わらず『営業中』との文字が躍っていた。

「着いたぞ。ここだ」

「ここ？ 前を通った事はあるけど入ったことはないなあ。で、ここが何なんだ？」

「まあまあいいから、入った入った」

圭輔に背中を押されるがまま、翔司は店内に入る。すると、そこには数人の男女が居た。全員自分と同じくらいの年代のようだ。

そして……その中には翔司の顔見知りも居たのだ。

「おっ待たせーい！ これで全員集合だな？」

「都合がついた子はね。それでも僕入れて13人か……。あとで準備中にしとかないとな」

「ほら圭輔、その子が噂のカレでしょ？ 紹介しなさいよー」

「おー、そうだった。ほれ翔司、自己紹介しろ」

「……」

「……どうなさったのでしょうか？」

「緊張してるんじゃないんですか？ 優香お姉様」

「瑞奈、その『お姉様』と呼ぶのはやめなさい……」

「あらあら、困っちゃったね」

「まーでもさ、これだけの人の前だもん。緊張とかしちゃうよー」

「こつこつうのつてなんて言うんでしたっけ？ えとえと…… 『負け犬』です？」

「そりゃ違えな。間違ってもそれは言っちゃいけない……」

「大丈夫ですすよ！ みんないい人たちですすから。ねーちゃん以外は……」

「ちよつと！ 何よその言い方！ 腹立つわねーこのバ海斗が！」  
目の前にいる彼らはみな、自分が何か喋るのを待っているようだが、翔司にはとてもそんな事を考えている余裕がなかった。

元旦の朝早く（正午を過ぎているが）から起こされて突然連れてこられた見知らぬ場所。そんな所でいきなり自己紹介しろ、などと言われても出来るわけではない。

一刻も早くここから逃げたい……、そんな思いが彼の脳裏をよぎる。……しかし次に聞こえた声がその考えを断ち切った。

「森野くん……でしょ？ 大丈夫だよ、がんばって」

小競り合いをしていた姉弟の隣に座っていた小柄な女の子が彼に声援を送る。

（この声は……っ！？）

彼女の名は水嶋音遠。かつて翔司が想いを寄せていた女の子である。もつとも、彼女自身はその想いに気付いていなかったのだが。

ともかく、その声に触発された翔司は、さっきまでとは別人のように朗々と自己紹介を始めるのだった。

「オレの名前は森野翔司！ フリーターの19歳、一人身！ そーゆーことでいつちよよろしく！」

言い終わってから若干の沈黙の後、店内を拍手が包み込んだ。

「なんだよ、ちゃんとと言えるじゃんかよ」

「……おい圭輔、ちよつと耳貸して」

間髪いれずに圭輔に耳打ちをする翔司。

（なあ、この人たちいったい何なんだ！？ 音遠ちゃんは知ってる

けど、他の連中は見た事もねーぞ)

(お前が一人で寂しそうにしてたから、顔の広いオレが友達を紹介してやってるんだってば。悪くないだろ?)

(そ……、そっか……)

(それにさ、女の子も多いじゃん?)

(……)

「ねー圭輔、何やってんのよー。早くその子こっち連れてきなさいよ」

「おー悪い悪い。よっし、んじゃ行くぞ」

「お……おう……」

圭輔に促されるまま、その輪の中に入っていく翔司であった。

(これでみんなに溶け込めれば楽しくなるんだろっけど……大丈夫かな、オレ)

新たな年を迎え、人の気持ちも新たに変わってゆく。動き始めたのは、時間だけではない。



## 第1章：Café Royale

「あゝあ、今日は暇だなあゝ……。あ、ソーダ！ あのカフェ行くか！」

翔司の口からこの言葉が出るのは、もはや珍しい事ではなかった。あの日以来、彼はすっかり店の常連となっており、マスターに顔を覚えられたのも間もなくであった。

自宅から自転車で15分ほどの距離にあるカフェ Hexagram は、相変わらずの落ち着いた雰囲気醸し出しており、このまま外国に持って行っても全く違和感がないほどであった。

ゆっくりとドアを開け、店内に入る翔司。待ち受けるは、マスターの優しげな挨拶。

「いらつしゃい、翔司くん。ゆっくりしてってね」

「あ、どーも」

いつものカウンター席に座り、適当に店内を見回す。

「あれ、今日はまだ誰も来てないんだね？」

「そうだね。ま、この時間じゃみんな仕事だよ。サラリーマンの人も営業の外回りでもない限りこの時間には来ないからね」

「そっかあ……。主輔も他のみんなも学校とか行ってるからなあ」  
そんな会話をしていると、不意にドアが小気味よい音を奏でる。

誰かが店内に入ってきた証拠だ。

「おはよござますー！ ありよ？ まだあまりいないですねー」

鮮やかな茶色の長い髪をたなびかせ、一人の少女がこちらに向かって歩いてくる。

「ああ、クリスちゃん。おはようございます」

「おはよござますー！ ますたーさん！ そのおにーさんもおはよござますー！」

「ああ、おはよう。えっと……」

「ありよ？ ミーのお名前知らないですか？ えとえと、ミーは桜庭クリステルと言いますです。みんなはクリスって呼びまして」

桜庭クリステル。皆がクリスと呼ぶ彼女は、異国の血をも併せ持つ少女。屈託のない笑顔は、周囲の気を引くのに充分すぎる魅力を持つ。

しかしながら、外国暮らしが長かったせいも、まだこちらの言葉に不慣れな面も見られる。頻繁にやらかす勘違いなど、その際たる例だろう。

「そうそう、そーだった。確かハーフの子だったよね？」

「はーふ？ えとえと……熱いものを冷ますときに言う」

「それは『はーふー』」

「違うですかあ？ えとえと……ふるふるしててやわらかくて、おみそしるに入ってる白いの」

「それは『豆腐』」

「これも違うですかあ。それじゃあ……」

「……はいストップ。もう漫才は見飽きたよ。いいかいクリスちゃん、ハーフってのはこいつのことを言うんだ」

マスターは冷蔵庫から業務用のマヨネーズを取り出し、クリスに見せる。

「ほら、ここ見てごらん。カロリーがなんと普通の半分って書いてあるぞ！ だから『Half』。OK？」

「わお！ OKですー！ ……ありよ？ それじゃミーはマヨネーズさんなんです？」

（……漫才続いちゃってるよ。なんだかなあ……）

（ホントでっすよねえー）

「ああ……って、海斗くん！？ いつから居た!？」

「ついさっきからでっす。マスター、コーヒーのおかわりをくれでっす」

いつの間にか翔司の隣の席には、高校生の原田海斗が座っていた。何食わぬ顔で、マスターにコーヒーのおかわりをせがむ。

彼には3つ年上の姉がいるが、仲が悪いのかいつもケンカばかりしている感があった。それが本当に仲が悪いのかどうかは定かではなかったが。

「ああ、ゴメンゴメン。ほい、お待ちどうさん」

「サンキューです。うーん、いい香りです」

そして何事もなかったようにコーヒーをすする。高校生であるにも関わらずこの時間にこの場所に居るといふ事は、サボリか何かだろう。

翔司はその事について彼に聞いたさうとしたが、それより先に本人が直接話してきた。

「学校ですか？ 今日開校記念日です。だから休みなんです」

「いや、今聞こうとしたんだけど……」

「……げ、ゴメンですマスター！ コーヒー代ツケといでです」

その途端、海斗は半分以上コーヒーを残したまま一目散に店を出て行ってしまった。

マスターは何事もなかったかのようにメモ帳に記録をし、コーヒーカップを下げる。

「なんだったんだ……？」

翔司が疑問に思っていると、またもドアを開ける音が聞こえてきた。

入ってきたのは若い女性……というか翔司と同年代であろう女の子だ。

「ちっ、バ海斗のヤツ……。逃げだけは速いんだから！」

吐き捨てるように言いながら彼女は、やはり翔司の隣の席に座る。クリスと彼女の間に挟まれる形となった翔司は、思わず目を伏せてしまっていた。

「ねーマスター。あのバカ、今度はどんな理由つけてここ来てたの？」

「開校記念日だつてさ。いつたい年に何回開校してるんだろっね、あの子の学校」

「またそれなの？ まったく芸がないんだから……ってアンタ、どっかで見た顔ね」

不意に女の子がこちらに向き直る。その顔には翔司も見覚えがあった。

「あーっ！ あの時の！ 久しぶりじゃーん！ 元気だったー？ 確か、翔司でいいんだよね？ 名前」

「あ……ああ……。えつとキミは……」

「みさき。原田みさきよ。圭輔とは幼なじみの腐れ縁。あの時は人多かったからあんまり話せなかったけど、今なら大丈夫じゃん？ マスターとクリスちゃんしかいないしー」

彼女は、先ほど脱兎の勢いで逃げ出していった少年の実の姉である。

恐らく彼は、この時間に学校に行かずにカフェにいる事を問いただされると思ったのだろう。

「どうやら、実際の力関係も姉のほうが一枚も二枚も上手らしい。

「はいはいー！ ミーもしょうじさんと話したいであります！」

「おっ、両手に花かい？ よっ、この色男！」

「えっ……ええ……？ あ、確かに今のこのシチュエーションってそうじゃん！」

「何よー、こーんなにかわいい女の子2人に囲まれて今頃気付いたの？ ホントアンタって鈍感よねー」

「違うですー！ しょうじさんもますたーさんもかわいいのです！ みんなかわいくて、みんないいですー！」

「何だそりゃ……。って、そうだ。キミが来た途端に海斗くんが帰っちゃった気がするけど……」

「あー、それね？ あのバカ、また今日も学校サボろうとしてんのよ？ ねーどー思う？ 最低だと思わなーい？」

「えつと……、そりゃ日にちにも抛るんじゃないか？ 何日くらい

サボってんの？」

「どーだか。今日で5日目くらいかな？」

「ちよい待ち！ 5日って少ねーじゃん！ それくらいなら大目に見てあげなっつて」

「はあ〜……これだからダメなのよ」

(だ……ダメって言われた……)

みさきは先ほどから、さながら機関銃のごとくまくし立てている。「あのね、いい？ アタシはね、幼稚園から今の大学まで、遅刻・早退・欠席なんか一度もした事ないのよ！？ 当然授業のサボリだつてした事ないし！」

これは本当の事だ。彼女は病気がらしい病気もなく、学園生活を本当に楽しんでいた。そして、今の今まで遅刻や欠席を一度もしていない事を自慢にしていた。

「だからね、バカ弟がそんなことすんの許せないじゃん？ あんなんでも一応、アタシのたった一人のキョーダイなわけだし、そーゆー面では自覚持つてほしーじゃん。分かる？」

「うーん、わからなくもないけど、人にも抛るんじゃないかな。みさきちゃんみたく許せない人もいれば、許せちゃう人もいる。僕なんか許せるな。そんなの自分の勝手だからさ」

マスターは自分の哲学を披露したみさきに、これまた自分の哲学で応戦する。

「サボり続けて結果的に進級できないとかになったら自分が悪いわけだし。後悔するのも自分だ。それを分かっている上での行動なら大目に見れるけどね」

「えとえと……、ミーにはちょっと難しですけど、してほしくなから今みたいにちゃんと言うのがいいのです。ちゃんと弟さんのおめを見て話すがいいですー」

クリスもマスターに負けじと、ゆっくりと言葉を選びつつみさきに諭す。

「今みたいに、本人がいないところでピーピー言っても全然聞こ

えてねーですからあ」

「そうだな、クリスちゃんの言う通りだ。みさきちゃんは、海斗くんにそのこと言ったのか？　ちゃんとその辺の意思疎通が出来てないのにオレらに愚痴っても意味ないっーか」

「ちっ……わ、わかったわよ。今日のところは許すわよお。帰ってきたら力づくでもわかってもらうけどね」

みさきは行き場の無くなったその拳を握り締める。本当にやりそうな所が怖い。

そして、その握り拳を突き出したままの姿勢で翔司に話しかけるみさきであった。

「あと、翔司！　別にアタシのことはちゃん付けなんかしないでいいよ。呼び捨てでいいわよ、呼び捨てで。アタシもそーしてるんだしさ」

「え、いいのか？」

「当たり前じゃん！　ってかむしろ呼び捨てにしろ！　さもないとアタシの事『翔司さま』って呼ぶわよ」

「意味わかんねえよ……。わかったわかった、じゃ……。みさき？」

「なあに？　翔司」

「なにつて……。いや、呼んだだけけど」

「なっ……。何よそれ！　ひっどーい！　こーんなかわいい女の子をつかまえて呼んだだけって、さいつてー！　罰としてなんかおこりなさいよ。アタシとクリスちゃんに」

「ちよ、ちよつと待てよ！　なんだよそれ！　サギじゃねーか！」

「よよよ……。アタシのことさんざん利用しといて、役に立たなくなったら詐欺師呼ばわりして捨てるのね……。ああ、アタシってかわいそう……」

「みさきのおねーちゃん、かわいそーです……。しょうじさんが泣かしたですー、しょうじさん悪い子です」

「ありゃりゃ、こうなっちゃったら折れるしかないよー。どうする、色男くん？」

「……わーっただ、わーっただよ！ ふたりぶん、奢りやいーんだろ！  
なににすんだよ……?」

「あーら、やつさしーのね。優しい男はモテるのよー？ 優しいだけじゃダメだけどね。……じゃーアタシ、トリユフのでっかーい！」

「わーいわーい、おごりですー！ しょうじさんありがとーですー！ Hugー。」

「ぶっ!? な、何をっ……!?!」

観念した翔司が、2人分の勘定を持つと言ったと同時に、クリスは彼に抱きついていていた。

「くっ……苦し……。あ、でも何かやわらかいもんが……」

「あーあ、またこれの餌食になった子が出ちゃうかな？ 氷水用意しとくかな」

マスターはマスターで、落ち着き払って厨房へと下がる。

時刻は午前11時を少しまわっているあたりで、太陽がいよいよ高く昇り始めるところであった。

「……あ、いつけねえ。オレそろそろバイトだ」

ここの居心地がよいのか、ついつい長居をしてしまった翔司。

時はすでに昼下がりを迎えており、周りにも見知らぬ客が席を埋め始めていた。

「じゃマスター、ごちそうさまでした。お金ここに置いてくよー！」  
声は聞こえなかったが、マスターの癖である指を鳴らす音が聞こえたので、彼の声は届いているようだった。

翔司はゆっくりと立ち上がり、カフェをあとにする。

晴れ渡っていた空は少しずつ雲に覆われ、いつしか空からは白いものが舞い始めてきた。

それは1月も半ばに差し掛かった、ある寒い日のことだった。

同日、夜。新雪に小さな足跡をつけながら少女が歩を進める。

その隣にはポケットに手を突っ込みながら歩く青年。目的地はやはり、カフェ Hexagram。

店内は閉店間際ということで、マスター以外には誰もいなかった。「こんばんは、音遠ちゃんに灯輝くん。……おや、音遠ちゃんは元気がないな。どうかした？」

「はあ……。あ、座っていいですか？」

「どうぞどうぞ。寒かったですよ。待ってて、今コーヒー淹れるから。で……。やっぱりアレなの？」

「そうですね、アレです。兄貴の事で……」

「お兄ちゃん……。えぐ……。ふええ……」

「ほら、こんな調子なんです」

水嶋音遠と入沢灯輝、そして水嶋灯夜を含めた彼らは3つ子の兄弟であった。

もつとも、一番上の兄である灯夜は今この場にはいなかったのだが。

それというのも、彼はあれだけ講義中に爆睡しているにも関わらず優秀な成績を修めていたために、語学留学の権利を与えられていたからだ。

彼はその権利を行使し、現在外国にホームステイしているのだ。

それだけならば、優秀な兄を持ってよかったという事で終わりそうだが、彼らの場合はそうもいかなかった。

3つ子の中で唯一の女の子である音遠は、灯夜のことを本当の兄と分かっていながら愛していたため、今のこの突然の別れを受け止められなかった。

出発の前には散々『私もお兄ちゃんと一緒に行きたい!!』と喚んでいたとの事だ。

それ以来すっかり気の抜けてしまった音遠を見かねた、末の弟である灯輝が今こうしてここに連れてきたというわけだ。

「うーん……。難しい問題だなあ。音遠ちゃんにとってみれば最悪



の出来事なんだろうけど、みんなにとっては、いい加減この関係を断ち切るいいチャンスなわけだし……」

「俺としてもね、キョーダイ同士で愛し合っつてえのはやっぱ間違ってると思うんですよ。ドラマとか本だったらそーゆーのもあるかも知れないけど、あくまでも現実なわけだからさ」

「確かに昔は兄弟間での恋愛もあったけどね。昔と言っても平安の時代だぞ」

「でしょう？ それに、仮に姉貴たちが普通のカップルだったとしても、姉貴の行動は異常だと思う！ あれじゃ兄貴、息詰まっちゃうぜー！」

音遠は、四六時中と言ってもよいほど灯夜に付きまとっていた。それこそ、傍にいない時はないというくらいだった。

彼が今回の留学の話をあっさり了承したのも、妹の束縛から逃れるためという見方もあるかも知れない。

「だから俺は、兄貴が居ない今だからこそ、姉貴にいい加減夢見る少女をやめて欲しいんだ！」

「やだ……。いやだ……。！ 私はお兄ちゃんとずっと一緒にいるの！一緒にいるんだよお！！うわああああー！！！！ん！！！！」

「まだそんな事言ってるのかよ！いい加減にしろよ！今年でいくつになるんだよ！いつまでもガキみてーな事言ってるじゃねえ！」

「わかったわかった、2人とも落ち着いて。ここはキミらの貸し切りじゃないんだから。……ま、今は他のお客さんいないから大目に見るけども」

「あ……。すみません……」

「えぐ、えぐつ……」

「じゃあ分かった。僕個人としての回答はこうだよ。……僕も灯輝くんの意見に賛成だ。音遠ちゃん、いい加減大人になろうよ。もう今年で20歳になるんでしょ？」

「大人になんか……なりたくないもん」

「え？」

「お兄ちゃんと一緒になれないなら、大人になんかなりたくない！  
！ ずっと子供のままでいるの！！！」

「あ、姉貴……。まだそんな事言うのかよ……！」

「灯輝くん、ここは僕に任せてくれないか」

「あっ、はあ……」

「どうするつもりなんだ。そんなこと言って」

今にも飛び掛らん勢いの灯輝を抑えながら、マスターは落ち着き  
払った口調で音遠に語りかける。

「今ここでゴネたって、灯夜くんが帰ってくるわけでもないんだよ」

「帰ってこないなら、私が向こうに行くもん。向こうでお兄ちゃん  
とずっと一緒に暮らすんだもん」

「そう？ じゃあ行けば？ どうぞご勝手に。僕は止めないよ。行  
けるもんなら行ってみようよ、さあ早く」

「……」

「あれ？ 行けないのかな？ 行けるよねえ、彼のことを本当に愛  
してるんなら。ほら早く」

「……行きたくても行けないもん」

「どうして？」

「……そんなお金……ないから……」

「ない？ ないなら借りれば？ サラ金からとか友達からとか。い  
いサラ金業者知ってるよ、紹介しようか？ 利息がトイチで織田信  
長みたいな人が社長のところ」

（おいおい、トイチじゃダメじゃんマスターっ！ しかも信長じゃ  
もつとダメじゃんっ！！ 第六天魔王来ちゃったよ！）

灯輝が隣でそう呟いたが、誰も聞いていなかった。マスターは興  
奮状態の音遠に畳み掛けるように言葉を浴びせる。

「出来ないんでしょ？ 出来もしないのに軽々しくそういうことを  
言わないで欲しいな」

「それじゃあ……待つ。お兄ちゃんが帰ってくるまで待つ」

「出来るの？」

「……出来るもん」

「ふん。それなのにさつきみたいに喚き散らすんだ」

「もう喚かないもん」

「無理だね」

「出来るもん!!」

「ほら無理だ、喚いたじゃないか。今」

「いぢわるう……。ふええん……」

「そしてすぐ泣くんだ。少しでも自分が不利な立場に立つたらずぐそうすりやいつも許してもらえと思うてる。泣いてればかわいそうに思われるからみんなが優しくしてくれる」

マスターは珍しく、苦虫を噛み潰したような表情になっている。

彼女の態度に、ついに怒りの感情を湧き上がらせたのだ。

「……自分ではなんにも出来ずにここまで来ちゃった。だから今も灯夜くんに会えないだけですぐ泣く。で、泣いてればいつか誰かが向こうに連れてってくれると思うてる」

ここまで言ってから、マスターは大きく息を吸う。そして……。

「甘ったれるな!!!」

「……!？」

今まで聞いたこともなかった、マスターの怒声。傍で聞いていた灯輝も思わず身を縮めていた。

直接言われた音遠に至っては、もはや顔の原型がとどまらないくらい泣き顔になってしまっていた。

「今までいるんな人の相談に乗ってきたけど、キミみたいなわがままな子は初めてだよ。そして、僕が怒鳴ったのも初めてだ」

マスターは自嘲的に笑いながら、さらに言う。

「ははは……。怒鳴ることで暴力的に解決しようとした自分の力のなさがつくづく嫌になってくるね」

「そんな事……そんな事ねえよ! マスターは頑張ってるじゃねえ」

か！」

「いいんだ、灯輝くん。……いいかい音遠ちゃん。キミの人生なんだから、キミの好きに過ごしてくれて一向に構わない。僕には止める権利も義務もないからな」

「マスター……」

「だがね、そういうこと続けてたら、いつかキミは信用を無くし、完全に孤立する。憧れのお兄ちゃんも振り向いてくれなくなるだろうね。脅しじゃないよ。本当の事なんだからね」

先ほどの苦虫を噛み潰した顔から一変、今にも涙をこぼしそうな悲しげな顔になるマスター。その声にも、どこことなく覇気が感じられない。

「……以上。もう疲れたよ僕は」

そこまで言っつて、マスターはカウンターの奥に引き返してゆく。

音遠はその場に立ち尽くしたまま動こうともしない。

呆気にとられていた灯輝は、とりあえず声を出さずに号泣している姉を近くの席に座らせる。

「なあ姉貴……。これでわかったら？ あのマスターが怒鳴ったんだぞ、そうそうある事じゃねえぞ。頼むよ、もういい加減に分かってくれよ……」

「くすん、くすん……」

埒があかなかつた。音遠は泣くばかりでそれ以上のことは出来なかつた。

結局この日は2人して帰る事になったが、泣き止まない音遠は歩く事すら出来ず、灯輝が家までおぶっていく事になった。

激しさを増した雪の中で、一人の少女の、大人になることを拒んでいる少女の、すすり泣く声だけが、静かな夜にこだまする。

「ん……、頭が痛っ……」

翌朝、いつもの様に目覚めたマスターであったが、どうもこの日は体調が優れないようだった。

「ふみゆ〜……。大丈夫？ だーりん」

それと同時に、隣で寝ていたマスターの妻も目を覚ます。

「おはよう……。千奈美さん。あ、僕のことなら心配しないで。大丈夫だから」

「そう？ それならいいんだけど……」

「さて……。！ 今日もいい天気！ ……でもないか。雪かきしなきや歩けなさそうだね」

「あらあら〜、そうみたいね。昨日いっぱい降ってたもんね〜」

「……朝ごはん食べたなら、学校行く前にちよつと雪かき手伝ってね。せめて店の前の道だけでも……」

「は〜い！」

そして2人はそれぞれ動き出す。夫はキッチンに行つて朝食の準備、妻は布団の片付けや食器を並べたり。

結婚当初からこの生活リズムを崩さず、すでに6年が経過しようとしている。

雪かきをひと段落させ、中学校の教師である妻を送り出したマスターは、今度は店周りの雪を取り払っていた。

「おー冷た。よく降ったなあ〜しかし。雪だるまでも作つてオブリエにでもしようかな？」

そんな事を一人で呟きながら、長身の身体を一生懸命屈ませて雪と格闘する。

その一連の作業を終えて店に入ろうとした途端、自転車に2人乗りしているカップルが走り抜けて行った。

彼らに見覚えがあるのか、マスターはその2人を見るなり手を小さく振っていた。

「あの2人……。最近来なくなつちやつたな」

寂しげに呟きながら店内に入る。彼の一日は、ここから始まるのである。

この日の夕方……比較的空いている店内の一角に、女の子ばかり4人が集まっていた。その誰もがこの店の常連であった。

女3人寄ればかましいとはよく言うが、4人も集まってはかましいどころか、やかましい。

「おねーちゃん！ ほら、これおいしーよ！ 食べてみる？」

中でも最もやかましく早口な少女が、この青山果緒梨。近くの高校に通う2年生である。

「ありがとう。いただきま〜……あれ〜？ ないよ〜？」

反対に、最もおとなしくのんびりした少女が、この青山絵実梨。

果緒梨の姉であり、大学3年生。

そろそろ少女という呼び方がふさわしくなくなりそうだが、そこはご愛嬌だ。

「えみりのおねーちゃん、のんびりすぎですー」

「う〜、のんびりなのはしょうがないよ〜。果緒梨がせっかちすぎるのよ〜」

「いや、絵実梨ちゃんは本気でどのんびりやさんだと思うわ。学校でもノートに書き写しきれないから、アタシ見せてあげてんのよ。

まーでも、そこがかわいいんだけどねー！」

「いや〜ん、かわいいなんても〜。みさきちゃん恥ずかしいよお」

「あ、あたしは？ みさきさん、あたしは！？ ねえ！」

「わっわっ、ちょっと落ち着きなさいって！ 果緒梨ちゃんもかわいいわよー！」

「よっし……おねーちゃんに負けなかつたぞ」

「みんなかわいくて、みんないいですー！」

彼女らのおかげですっかり賑わっている店内に、また新たな客が訪れた。これまた女性、しかも2人であった。

「いらっしやい。みんなあっちにいるよ。席そっちにする？」

「あ……。ええ。そうしていただこうかしら」

「わたしはお姉様と一緒にならどこでもいいです」

「だから……、私はあなたの姉になつた覚えなどございませんと申

してますのに……」

その女性客2人の存在に気付いたみさきは、手を振りながらこちらの存在を彼女らにアピールしていた。

「おーいお嬢ー！ こっちこっちー！」

「はいはい、ただいま向かいますわ」

南野優香と、橋本瑞奈。2人はいつも一緒にいる……と言うよりも、瑞奈が優香の傍から離れようとしないのだ。

2人の関係は、コーチとその生徒。優香がコーチをしているテニススクールに瑞奈が入った事が始まりだった。

もともと瑞奈には当初、テニスをしようという気はさらさらなかったのだが。

そんな彼女がそうするまでに至った背景には、ある一つの出来事があった。

それはとある日のこと。瑞奈が学校から帰る途中だった。

いつものように気の合う友人数人と下校していた彼女が他の全員と別れた後、何か訴えかけるような声を耳にした。

ともすれば外界の音にかき消されんか細い声ではあったが、確信を持ってその声のするほうへ向かうと、川面に浮かぶ段ボール箱を見つけた。

何とかその中を見てみると……なんと、1匹の仔猫が入っているではないか。このままでは流されてしまう。

幸いこの日は風もなく穏やかな陽気ではあったが、川の流れは止まらない。

動物好きの瑞奈としては、ここで見過ごすわけにはいかなかったが、泳げないためにどうにも出来ないのが現状だった。

そこに通りかかり、彼女に声をかけたのが優香であった。川を見ながら慌てふためく様子の瑞奈を見て、放っておけなかったのだろっ。

「どうなさったのですか？」

普段通りの口調で話す優香。瑞奈は無言のまま、川面に浮かぶ段ボール箱を指差した。

「これは大変……。早く助けなくては流されてしまいますね」

「でも……。無理ですよ。わたし、泳げませんから……」

「でしたら、私が行きましょう。あなたはここで見ていなさい」

「は……。はい……」

言いが早い、優香は荷物を全てここに置き、川べりへと走ってゆく。

そして手近な木の枝を見つけ、精一杯体を伸ばしつつ箱に引っかけようとすると……。あと一歩のところまで届かない。

そうこうしているうちに、優香は川に転落してしまった。

「きゃあっ……」

上から様子を見ていた瑞奈は思わず悲鳴を上げてしまっていた。

だが優香は、川に落ちたら落ちたで、なんとその箱に向けて泳ぎ始めていた。

そして、自分の手にその箱を掴むと、川岸に向けて再び泳ぎ始めた。

「……」

箱の中の仔猫は、自分の身に起こった危険に気づく事もなく、すやすやと寝息をたてていた。

聞こえてきた声は訴えかけるような声ではなく、仔猫の寝息であったのだ。

「ふう……。呑気なものですわね。服のクリーニング代、かかってしまいますわ」

瑞奈の元に戻った、全身をずぶ濡れにした優香は、彼女の目を見てこう言った。

「はい、どうぞ。もう大丈夫ですからね。……では私は仕事がありますので、失礼いたします。ごきげんよう」

「ま……。待ってください！」



「はい、何でしょう?」

「あのっ……、どうも、ありがとうございます!」

「お礼などよろしくてよ。私がそうしたかっただけですので」

「えっと、そのっ……お、お仕事って、なんですか?」

自分でも何故こんな事を聞いているのかわからなかった。だが口に出してしまつた以上、言い直すことは出来ない。

「ただのテニスのインストラクターです。それがどうかしましたか?」

「えっと……もしよければ、わたしも一緒に行つてもいいですか?」

「えっ……? あなたもですか?」

「はっ、はい! あ……、わたしの名前は橋本瑞奈といいます!

あのっ……、もしよければあなたの名前も教えて下さい!」

「私の名前……ですか? 南野優香ですが……」

「優香さん……ですか。素敵なお名前ですね!」

「ありがとうございます。……あなたの方こそ、とても素敵なお名前ですよ」

「わっ……、そんなこと……ないですよ。……あー、待つてくだ

さいよー優香お姉様ー!」

「お……お姉様?」

優香と瑞奈が4人に合流し、ついに6人席となつたその一角はさらに盛り上がりを見せる。

「ねー瑞奈ー、優香さん厳しかった?」

「え? わたしはお姉様の指導なら全然大丈夫よ!」

「……」

「ほらほらお嬢、そこでだんまりはナシよっ! こーんなに慕つてくれてんだから、もっと優しくしてあげなさいよ」

「……わかりましたわ。瑞奈、何がよろしいの? おっしやい。あなたはよく頑張りましたので、今日のところは私が出てあげまし

「よう」

普段から金の管理にうるさい優香がこのような行動に及ぶ事は極めて珍しい。

みさきはこれ幸いと、彼女をはやし立てる。

「ぎゃ〜！ あのお嬢が奢ってるわ〜！ 何か買うときでも1円単位で値切ろうとするあのお嬢が、常に自販機のつり銭出口を覗いてるようなあのお嬢があ〜！」

「え〜？ 優香ちゃん、そんなことまでしてるの〜？」

「すっごく……。あたしもマネしてみよーかしら」

「ゆづかのおねーちゃんはけちゃんぽですー！ でも今みずなちゃんに奢るですから……。ありよ？ どっちですー？」

「……みさきさん、ちよっとお話が」

「は……。はひ」

「……それでは、私はいったん席を外させていただきます。……失礼します」

「うわ〜ん、アタシちゃんと明日のおてんとさま見れるのかな〜？」

みさきの首根っこを掴むようにして、優香は店内奥の化粧室に姿を消した。

中でどんな事が起こったかは定かではないが、戻ってきたみさきの様子から、よほど壮絶な事が起こったという事だけは読み取れる。残された4人はしばらく呆気に取られていたが、すぐに誰からもなく話が始まり、また変わらぬ賑わいを取り戻した。

「ふーやれやれ。ま、一日に一回くらいはあーゆー席もないとくらくい店に思われちゃうからな。一種のディスプレイみたいなもんだな。でもこれはみんなにはナイショにしとくか」

マスター自身も、常連組の賑わいを寛容している節があった。

店の責任者としては、さすがに店内で騒がれる事についていい顔はできないが、一人の人間としては、自分もその中に入りたいと思う部分もあるのだ。

そんなこんなで、カフェHexagramの一日は今日も過ぎて

ゆく。

「あゝあ、今日もバイトまで暇だなあ……。カフェにでも行くか」  
そう言いながら出かける準備を始める翔司。特に何をしに行くわけでもなく、ただもてあましている暇を潰すためである。

通い慣れた道を時間をかけて自転車で走っていると、世界中の不幸を背負ったようにうつむいている、特徴的なツインテールの髪形をした少女が歩いているのを目にした。

足取りもどこか重く、そしておぼついていない。

「おいおい……。音遠ちゃんじゃねえかあれ。それにしても、何でもあんな風に落ち込んでるんだ？ ……男森野翔司、ここで動かねえでどーする！？ しゃんなる、行くぜ！」

翔司は音遠のとなりを併走するように自転車を近づけた。これでも彼の存在に気付いていないのだから、よほど落ち込んでいる事が分かる。

「よ……。よお、音遠ちゃん。久しぶりだね」

「……」

「おーい、音遠ちゃんーん？ おーい？」

「……。あつ、森野くん……。？」

「よかった、やっと気付いたんだ。……。どうしたの？」

「……」

翔司が事情を聞くも、音遠はだんまりを決め込んでしまった。

「なんか言ってくれなきゃわかんないんだけど……。何で音遠ちゃん、そんな元氣ないの？」

「……。お兄ちゃんが……」

「お兄ちゃん？ ああ、灯夜のことか。そういえばアイツ、外国に留学したんだっけ。すっげえよなーアイツ」

「お兄ちゃん……。うっ……。うわあああああああああ  
ん！……！！！」

「どうわあつ!?!」

やってしまった。今の音遠にとって、『お兄ちゃん』という単語は禁句同然であったのだ。

必死に抑えてきた感情が、翔司の軽率な発言によって完全にぶち壊されてしまい、音遠は感情に任せて泣きわめく。

「やべーやべー、どーしよどーしよ! ……はっ、そうだ! Hexagram! もうここからなら目と鼻の先、そこに連れて行くしかねえ! マスターになんとかしてもらおう!」

「ふえええ〜ん……。お兄ちゃん……」

「……くそ、こうだ!」

翔司は乗っていた自転車を道の端に駐輪し、音遠の手を引きながら一目散にHexagramに向かった。

(……お、お、お? おつとつと? 今オレ、音遠ちゃんと手繋いでるじゃねえか! しゃんなる、オレ頑張ったぜ! ……つて違う! オレのバカ、不謹慎だぞ!)

あらぬ想像をしてしまった自分を罵り、2人はカフェに入った。

「いらつしや……つて、随分息切らしてるねえ。大丈夫? 水でも飲むかい?」

「そ、そんなことよりマスター! どどどーしよマジで!」

「まずは落ち着こう、な? とりあえずそこ座ろうか。今は他のお客さんいないから、話聞いてあげられるよ」

興奮する翔司をなだめながら、マスターは2人をカウンター席に座らせる。そしてグラスに水を注いで差し出す。

「ど、どうも……。ふう、落ち着いた。あのですね、簡潔に言います。音遠ちゃんが……」

「わかつてます。お兄ちゃんって言って泣いちゃったんでしょ?

前にも灯輝くんがそれで相談に来たんだよ」

「そっか……。弟くんも……」

「えぐつ……。ふえええん……」

「なあマスター！ オレ、どーすりゃいいんだ！？ このままじゃ音遠ちゃんがかわいそー過ぎるぜ！」

「それは僕も同じだ……。でもこればかりは本人の意識の問題だ。音遠ちゃん自身が一人でもがんばろうとしない限り、ずっとこのままだろうね」

「……！ なんで……なんでだよ……！」

「なんでだって言われても困るね。僕もこないだ音遠ちゃんにキツく言っただけだし、僕の考えの及ぶ範囲ではこないだ以上の言葉は出てこないんだ」

「……」

「しつつかし、音遠ちゃんにも困ったな。こないだのでわかってくれたと思っただけけど……。そんなに灯夜くんの方がいいのかねえ」

「オレと灯夜は……高校の時の親友でした。……でも、オレはいつもアイツの背中を追ってただけのような気がする。いつともオレは灯夜の2番煎じだった。何をやっても敵わなかった」

「ああ、灯夜くんは高校時代から凄かったんだねえ」

「はい……。それでもアイツは、オレのためにいろいろしてくれた。宿題忘れた時は見せてくれたり、テスト前には自分の勉強もあつただろうに、オレの為に時間を割いてくれた」

「本当に……いい奴だったんだなあ」

「他人から見てもアイツは凄いい奴だったんだ。それをいつも目の前で見る音遠ちゃんには……。どれだけかつこよく見えたかなんて想像もできねー」

「そうだったんだ……。留学するって話もそうだもんね。彼が優秀だからそんな話が持ち上がったわけだしね」

「言ってみれば、恋人と逢えなくなるって事と同じだからな……」

「でも本当の兄妹なわけだからね」

「そうなんだよ……。だからこの機会に是非とも『2人は血の繋がった兄妹なんだから、そろそろ考え直したらどうだろう』って思っ  
て欲しいんだ！」

「それは灯輝くんも言ってた。最初に言ったように、それは音遠ちやんの意識の問題だから、僕らがどうこう言っても意味は無い」

「音遠ちゃん次第……ってことか」

「そうなるな……」

カウンター席に突っ伏しながらすすり泣く少女を横目に、男性2人は顔を見合わせながら深いため息をついた。

不協和音が、鳴り止まない。

## 第2章：Dissonance

「そーれっ、いっただけい〜！」

「あっ！ ねーちゃん、それはオレっちのおかず！」

「へっへ〜んだ、早いモン勝ちよっ！」

「くっそー！ オレっちもねーちゃんのもらっちゃうもんね！」

「あーら、いいのかしら？ そんな事して。こないだの事チクッちゃうわよー？」

「……お姉さま、まだございますが」

「んもう、いい子ね海斗くん じゃいっただけい〜！」

(……くっそあ、今に見てるよ)

原田家の食卓は、いつものようにいい年をした2人の子供が繰り広げる戦場と化していた。

だが、海斗はみさきに弱みを握られているため、ここは素直に姉の意見に従うしかなかった。

「ちつくしよー、食った気がしねーでっすよ。……なんか買ってこよ」

夕食のおかずを半分ほどみさきに取りられてしまった海斗は、何かを買いに行くため寒風吹きすさぶ外へと出て行った。

「うっ……、寒っ。あつたけーモノ欲しいでっすね。……おでんか中華まんだな」

コートを羽織りなおしながら、コンビニへ歩いてゆく。

その道すがら、見覚えのある少女の姿が確認された。

「あっ、あれは音遠さん？ しっかしいたいぜんたい、なんだってあんな落ち込んでるんだあ？ ……ちよっち声かけてみよう」

言うが早いが、海斗はその少女の元に歩み寄る。

「ちっす、音遠さん。お久しぶりでっすね」

「……」

しかし音遠は、海斗の存在すら気付かずに通り過ぎていくのだ  
た。

「ちえっ、なんだい……。シカトされちゃった。……。オレっちもま  
だまだだな。はあ」

とめどなく溢れ出す涙は止まらない。止められない。

涙で滲んで、ものがはつきり見えない。

発する言葉も、震えが止まらない。

翌日から、音遠は学校に姿を見せなくなってしまった。

「あつれー、音遠ちゃんいないや……。どーしちゃったんだろ、あ  
の」

必修教科のため、同じ講義を受ける事になっていたみさきが教室  
内を見回すも、彼女の姿を捉える事は出来なかった。

周りの友人に尋ねてみても、返ってくる答えは同じもの。

「……よっぽどなのねー、兄貴の事。今回ばかりはおせっかいもほ  
どほどにしといた方がよさそーね。情けは人のためならず……。つと  
ことわざの間違った使い方に気づかぬまま、いまだ始まらぬ講義  
を今か今かと待つみさき。

結局、この日に音遠の姿を確認する事は誰一人として出来なかつ  
た。

月明かりのみが差し込む暗い部屋に、鋭利な刃物が煌く。

「お兄ちゃん……。くっ！」

腕に深々と刻まれた傷痕からは、赤々とした液体が流れゆく。

「私には……。お兄ちゃんと同じ血が流れてるの……。もっとならな  
ちようだい、私と……。お兄ちゃんを結ぶものよ……」

カッターナイフに付着した血液を全て舐め尽くすと、続け様に腕



から流れるものに吸い付く。

「はう……うつつ、お兄ちゃん……」

悲しい喘ぎ声だけが、暗闇の部屋に溶け込んでいた。

早朝の Hexagram には、すでに何人かの客が来ていた。その全てが、マスターの見知った人物だ。

そんな彼らに、マスターはいつもと変わらぬ調子で問いかける。

「おはよう、みんな。今日は何もないのかい？」

「なくもないですけど、今日はお昼過ぎからなんです」

「オレは今日何も無いよ、マスター」

「私も学校の方はありませんが、テニススクールでのお仕事が正午からあります」

「そっか。おいおい、暇人なのはキミだけじゃないか。いいのかい翔司くん？」

「勘弁してよマスター。オレ、これでもけっこうバイトやってるんだよ？ たまには休ませてくれたっていいじゃん。なあ？」

「……我々に同意を求めてらっしゃるの？ そうですわね……森野さんは最近のチャラチャラした若者にしては頑張っている方ですわあくまでも最近の者達と比較して、ですが」

「そうだね。でも、将来の事も考えないとダメだよ？ このままフリーター続けるつもりじゃないでしょ？」

「そ、そりゃまー、そーですけど……。今は今、先は先なんですよ。とりあえず今出来ることを精一杯やるってことで」

「うん、それはそれで正しいね。どんな道を歩もうが、キミの生きる道だ。しっかり頑張るんだぞ」

「さすが、大人の方は仰る事が違いますわね。重みが感じられますわ」

「よしてくれよ、大人だなんて。僕はまだ子供の心を忘れてないんだからさ……」

「つまんないよ、マスター」

Hexagramの唇下がり、このようにほのぼのと平和に過ぎてゆく。

……腕に切り傷を幾重にも重ねた少女が来るまでは。

「あ、いらつしゃ……………!？」

「……………!? どうしちまったんだよ音遠ちゃん!? え、それって……………!？」

わけもわからず慌てふためく翔司を横目に、音遠は淡々と言葉を紡ぐ。

彼女の目に、光は宿っていない。

「お兄ちゃんは……………私の中にいたの。簡単な事だったの。私とお兄ちゃんは血の繋がった兄妹だから。流れてる血は、お兄ちゃんそのもの」

「言ってる事がよくわかんないよ」

「ちよつと見せてもらんなさい。……………これは……………!」

「自傷行為、いわゆるリストカットだな」

「リストカット……………って……………?」

翔司がおそろおそろ、聞き慣れない単語に対する疑問を投げる。

「簡単に言つとだね、自分の存在を証明したい、自分に注目してもらいたいという思いが高まりすぎた結果。話はよく聞くけども、まさかこんな身近にいるとは……………」

「そ……………そんな! じゃあ音遠ちゃんは、自分で自分の手首を切つたって事が!？」

「違うの。お兄ちゃんに逢いたかったただけなの。手首を切ったとかそういうのじゃないの。……………そう、いわば、扉を開けたってことかしら。私の中のお兄ちゃんを……………出してあげたの」

彼女の腕のあまりの凄惨さに言葉をなくした一同。しかし音遠はお構いなしに続ける。

虚ろな目を、こちらに向けながら。

「見えるでしょ？ みんなにも。……ここにいるの、お兄ちゃんは……見えないの？ じゃあ出してあげる。……くっ！」  
そう言うと、ポケットからカッターナイフを取り出し、おもむろに自分の腕に突きつける。

「……っ！ おやめなさいっ！！」

音遠が一番近かった優香がその行為を止めようとするも間に合わず、彼女の腕にはさらに傷が増えてしまった。

しかしながら音遠は、その行為を邪魔された事に腹を立てたのか、優香に鬼気迫る表情で向かっていく。

「……なんで止めようとしたの？ 優香ちゃん。ねえ、どうして！？ ……私はお兄ちゃんに逢いたいだけなの。どうしてそうさせてくれないのよ！！ うっ……うわあぁぁぁん！！」

感情に任せ、泣き叫ぶ音遠。そんな彼女に、ついにマスターの堪忍袋の尾が切れた。

カウンターを飛び越え、音遠の前に立ちふさがる。そして……。

バシィィィン……………ン。

「……帰れ。たった今、キミを出禁にした」  
そう呟いた彼の背中では震えていた。いや、震えていたのは全てであつた。

Hexagram店主・増田六は店主権限を行使し、彼女に出禁を命じるのだった。

「……帰れと言ったんだ！ 聞こえなかったのか！！ 店に迷惑をかけるような子は客として認めない！ 出ていけ！！！！」

その言葉に怯え、大慌てで店から退散する音遠。床には彼女の血が滴り落ちていた。

「そんな……。ウソだろ、音遠ちゃん……。どうしてだよ……！！」

「我々には……。どうする事も出来ないのでしょうか……！！」

「あの目は本気だったよ……。ちよっとの間だけ、放っておいた

方がいいと思う〜……」

「……くそっ!!」

行き場のない怒りを壁にぶつけるマスター。店内に鈍い音が響く。理由はどうあれ、人を殴ってしまった事に変わりはない。その行為を悔やんでいるのだ。

マスターは、普段の調子とは考えられないほど弱々しい声でこう言った。

「……ごめん、今日はこれで店じまいだ。キミたちも……帰ってくれないか」

「わ、わかった……。マスター、あんま気を落とすなよ。よくわかんねーけど、マスターは間違った事してねーと思うよ、オレ」

「私達の方でも何とかしてみます。それでは、ごきげんよう……」

「本当にごめん……。ごめんついでに頼むんだけど、ドアのアレ、準備中にしといてくれないかな……」

「わかりました〜。それじゃ〜……」

Hexagramから帰るときは誰しもが必ず元気を取り戻すはずが、今日ばかりは勝手が違っていた。

少しのズレが引き起こした不協和音は、そのズレをさらに増徴させながら勢力を拡大してゆく。

巻き込まれる音。全ては不協和音に変わり。

「おかえりーおねーちゃん! ……あれ、どったの? なんか元気ないね」

「うん〜……。ちよつとね〜……」

「ねね、何があったのよ? 朝カフェ行ってたんでしょ?」

「そうだけど〜……」

「あゝも〜じれったいなあ。早く教えてよー！」

「わかったよ〜。今から言うよ〜」

絵実梨は、ゆっくりながらも確実にカフェでの出来事を果緒梨に伝えた。

「そう……。音遠さんがそんな事を……」

「ビックリしちゃったよ〜。目の前で切るんだもん〜」

「やばいよそれ！ いや、冗談じゃなしに！ とうにか出来ないの！？」

「う〜、どうにも出来ないよ〜。下手に何かしても余計に傷つけちゃうだけだよ〜。肉体的にも〜、精神的にも〜……」

「本当にそう？ 何もしない事には、何も始まらないんじゃないの？」

「……違う〜。それで取り返しのつかない事になったら〜、あなた責任取れるの〜？」

「何よそれ！ おねーちゃんは結果を恐れてるだけじゃない！ 責任がどうか言うけどねえ、それじゃ責任以前の問題じゃない！」

「……っ！ だから……だからあんたは考えなだっって言われるのよ！ 責任も取れないくせに大きな事言わないでちょうだい！」

「おねーちゃんには言われたくない！ 何よ、おねーちゃんこそいつものんびりのろのろしてるからみんなに迷惑かけてるじゃないのよー！」

「それとこれとは関係ない！！ あんただってそのせつかちさがどれだけ周りに迷惑かけてると思ってるの！？ 自分の事を棚に上げて他人をけなすなんて最低よー！！」

不協和音は、仲のよい姉妹の絆をも歪ませる。

不協和音はさらに、最高の師弟関係までも狂わせる。

「……次！ ほら、右！」

「きゃあっ！ お姉様〜、あんなの取れませんよ〜」

「あれほどのものが返せないですって？ 瑞奈、あなた一体今まで何をしてきたの？」

「ふえっ……？ お、お姉様？」

「いいかげんにその呼び方をやめなさい。ほら、早く最初の位置に戻る」

「あ……あの……」

「聞こえなかったの！？ 早く戻りなさい！」

「は、はいっ！！！」

いつになく厳しい優香の指導に、瑞奈は戸惑いながらも練習を受けた。

練習終了後、瑞奈は意を決して優香に聞いてみた。

「あの……お、お姉様？」

「……何？」

「あ……えっと、お疲れ様でした」

「お疲れ様。……ごめんなさいね、今日は厳しく当たってしまったって」

「えっと……何かあったんですか？」

「そうね……。あなたにはお話しておかねばなりませんね」

優香は瑞奈に、Hexagramで起こった出来事を漏らさず伝えた。

「そんな……。音遠さん、そんなに追い詰められてたの……？」

「そのようですよ。私がついていながら……」

「お姉様のせいじゃないです！ ……悪い人なんていません。誰も悪くありません！」

「わかっていきます、そのくらい。……ですから、あの子を刺激するような真似だけは控えなさいね。今度は腕だけでは済まされませんから」

「ふええっ！？ こ、怖い事言わないで下さいよ……っう」

その夜。

カフェで一日を過ごすつもりだった翔司は、昼すぎにしぶしぶ帰宅していた。

昼寝から目覚めた後、机に向かいながら午前中の出来事を思い返す。

(どうすりや音遠ちゃんが手首切るのやめてくれっかなあ……。あ、そーだ！ 灯夜に直々に言ってもらえばいいんだ！)

一つの結論を導き出したと同時に携帯電話に手を伸ばす。音遠の兄である灯夜の言う事ならば無条件でのむだらうと踏んだからだ。

だが、『おかけになった番号は、電波の届かない所に……。』との機械的な声が響くのみ。

灯夜のメールアドレスにメールを送るも、アドレスが間違っているらしく送り返されてしまった。

「くそっ！ あんにやる、番号もメルアドも変えやがったのか！？ ……万事休すじゃねえか。どーすりやいいんだよ！？」

手も足も出せなくなった翔司は、頭を抱えながら机に突っ伏した。 ……と同時に携帯に着信が入った。灯夜からのリターンかとも期待したが、その相手は圭輔であった。

「もしもし、何だ？」

「翔司か。今すぐカフェの前に来てくれ」

「……え？ どうしたんだ、何かあったのか？」

「こっちで話す。それじゃまた後で。……なるべく急いでくれ」

早口でそう言うなり、すぐに通話を切られた。

「来たか。早かったな」

「当たり前だろ……って、海斗くんは灯輝くんまで……」

「俺も圭輔くんと呼ばれたんだ。ついさっき、な」

「オレっちもです。圭輔さん、一体何があったんですか？」

「結論から言っぞ。……音遠ちゃんがなくなった」

「なっ……!?!」

「いや、正確にはいなくなったかも、だ」

「なんだよ、ビビらせやがって……。でも、何でいなくなったかも  
って言えるんだ?」

「最近あの娘、様子がおかしいだろ? だからちよつと遠くから見  
てたんだよ、ここ数日」

「げ……圭輔さん、それってストーカーでっすよ!?! よく気づか  
れなかったでっすね……」

「るせー、黙ってるバ海斗。……ともかくだ、ここ数日はいつもこ  
の時間には家に戻ってるはずなのに、今日に限ってまだ帰ってない  
んだ」

「たまたま帰りが遅くなった、とかじゃないのか? 姉貴は交友関  
係広いからさ……」

「その可能性もあるが、今の音遠ちゃんは放つとくと何をしでかす  
か分かったもんじゃないだろ? それこそビルの屋上から飛び降り  
たりとか……」

「……っ! てめえ圭輔!! 飛び降りるとかなあ、冗談でもそん  
な事言っんじゃねえ!! 音遠ちゃんが……そんな事するわけねえ  
だろ……!」

「頭を冷やせ! ……オレだって、こんな事言いたかねえよ。でも  
な、心配なんだよ!! お前だってそうだろうが!! 違うのか!  
? ああ!?!」

圭輔の言葉尻を捕まえて激昂する翔司。一気に場の空気が険悪に  
なっゆく。

そんな2人の間に入った灯輝が、一触即発の雰囲気打ち砕いた。  
「……2人とも落ち着いてくれ。姉貴は間違ってもそんな事するよ  
うな人じゃない。実の弟がそう言ってんだ、信じてくれや」

(灯輝さん……かけー! 名前通り輝いてるぜ!)

「そうだな……。悪かったな、圭輔。でもどうするんだ? 探すの



か？」

「ここでじつとしてるよか、そうした方がよさそうでっすね」

「そのつもりでみんなを呼んだんだ。協力してくれるよな？」

「聞くなよそんな事。するに決まってるじゃないか」

「そりゃそーでっす！ 困ってる人を見過ごすなんて、男の風上にも置けねーでっす！」

「音遠ちゃんは……オレが救ってやる……」

「そうだよな、そうだよな……。よしわかった、手分けして探そう。翔司はあっち、灯輝くんはそっちだ。……海斗はここに残れ」

「えっ！？ な、何ででっすか！？ 4人いるんだから4手に別れた方がいいんじゃない？」

「おめーはケータイ持ってねーだろがドアホ。もし見つけてもみんなに知らせられなきゃ意味ねーだろ」

「だけど、残るんじゃないやあオレっち、なんのために呼ばれたんでっすか……」

男を上げたいのに役に立てないと感じた海斗がしよげると、圭輔はこう付け加えた。

「お前は、あの娘がオレらとすれ違ってた場合の最後の砦でもあるんだ。ここに引き止めておいてくれれば、連絡手段がなくても大丈夫だろ？ どうせオレらここに帰ってくるんだから」

「そーでした……。わっかりやした、オレっちはここでみなさんの帰りを待つのと、最後の砦を務めるでっす。野球で言うならストッパー、守護神でっす」

「見つからなくても、30分後にはまたここに帰ってこよう」

「そうだな。……じゃ、一旦解散だ！」

「ああ！」

4人はそれぞれの行動を取った。

実の姉の安否を心配し、いてもたってもいられぬ灯輝。

困っている人を助け、男のメンツを保ちたい海斗。

ストーリーまがいの事までして、彼女の身を案ずる圭輔。

そして……かつて想いを寄せていた女性を救いたい翔司。  
思惑は違えど、音遠を見つけたという気持ちはみな同じものであった。

結末は案外すぐに訪れた。 搜索開始から5分も経たぬうちに、灯輝が発見したようだ。

音遠本人は特に変わった様子もなく、やや急ぎ足で我が家に向かっていただけだった。

「あ……姉貴！ 大丈夫か？ どこもケガしてねえよな？」

「わっ、灯輝くん……。どうしたのいきなり？」

「それはこっちのセリフだ！ なんだってこんなに帰りが遅くなるんだよ！？ なぁ！」

灯輝は珍しく狼狽していた。こんなに早く見つかるとは思わなかったのだろつ。

そのために声が自然と不良時代のドスの効いた声になってしまい、音遠を怯えさせる。

「ひうつ……。何でって……お友達とカラオケ行ってたんだもん……」

「そ……そうか……。それならいいんだ。悪かったな」

「本当に悪いよう……。いきなり凄い剣幕で怒鳴るんだもん、怖かったなの……。くすん……」

「ご……ごめんって……。やっべー、ただでさえ精神状態不安定なのに驚かすようなマネしちまった……。くそ、かくなる上は！」

その瞬間、灯輝は姉の小さな体を抱き寄せていた。……直後に音遠から拒否反応が出たのだが。

「……いやっ！ 離して！」

「……！？ 何でだよ姉貴！ どうして俺を拒否するんだ！？ 灯夜の兄貴がいない今、俺を兄貴だと思ってくれていいんだぜ！？」

「違うもん！ お兄ちゃんはお兄ちゃん、灯輝くんは灯輝くんだよ！ どんな人でも、例えば灯輝くんがお兄ちゃんと瓜二つだったと

しても……！ お兄ちゃんは一人しかいないの！

「だから！ その兄貴がないんだから今は俺を代わりにしろって言ってるんだって……」

「だから違うんだってば！ 誰もお兄ちゃんの手代わりにはなれないの！ お兄ちゃんの代わりなんていないの！ お兄ちゃんの……うつ……うつわああああ……！」

「泣きてーのはこっちだよ！……」。それにしても圭輔くんたち、何やってんだよ……」

先ほどから連絡を入れているにも関わらず、圭輔や翔司は姿を見せない。

だが、向こう側から走ってくる青年の姿を目撃した。……翔司だ。

「はぁ……はぁ……。悪い灯輝くん、遅れちゃった。でも、よくやった。圭輔たちももうすぐ来ると思うよ」

「ありがとうございます……。でも、姉貴を泣かしちゃった……」

「くすん、くすん……」

翔司は、怯えきって泣きじゃくる音遠に恐る恐る声をかける。

「……なあ音遠ちゃん？」

「なに……？ 森野くん……？」

「はぁ、まだオレって名字で呼ばれるんだな。他のみんなは下の名前で呼んでるのに、何でオレだけなのかな……」

「わかんないもん、そんなの……」

「まあ、それはどーだっていいや。……それより、早く帰らないと送るからさ」

「いいもん。一人で帰るもん」

「そんな事言わずにさぁ、な？」

「いいつて言ってるでしょ！ もう帰るから、放つといてよ！」

そう言い放つと、早速でその場を去る……が、電信柱に正面衝突してしまった。

「うう……。痛いよ……。なんでみんな私の邪魔するの？ 私が何したのよ！？ もうわかんない！！！」

興奮しながら、その場を走り去ってゆく音遠。その額にはうつすらと血が滲んでいた。

「音遠ちゃん……………くそっ!!」

「翔司くん……………大丈夫だ。俺らがあきらめねー限りは」

数分後、圭輔たちと合流した2人は、近くの公園に立ち寄っていた。

「ひとまずは家に帰れたようだな」

「まあ……………後味最悪だったけど」

「心配でっすよね……………。ねーちゃんの話によると、音遠さんここ最近学校に来てねーらしいでっすよ」

「姉貴は……………。俺を拒否した……………。前までは俺も兄貴も同じだと思っただはすなのに、今は違うのかよ……………。代わりにやってやれねえのかよ……………!」

「いつもだつたらここでマスターの助言が入るはずだけど、今回は頼みの綱のマスターがサジ投げちまつてるからな……………」

「失礼な。僕はサジ投げた覚えなんてないよ」

「あ、ごめん……………って、ま、マスター!？」

どこから現れたのか、そこには長身を窮屈そうに屈めながらこちらの方を向くマスターの姿があった。

「うん。マスターですよ。もつとも、今は店にいないけどね」

「そ、そりゃそうだけど……………。こんなところで会うなんてどうしたの?」

「いや、貼るカイロが切れたからそのコンビニで補充しようかと思っただけ。したら偶然キミらの密会を目撃したもんだからさ、姿勢を低くして見つからないようにっす」

「なんか話がいきなりすげー日常的になつたでっすね。っーか密会っすてなんでっすか……………」

「気にしちゃダメだよ。……………さて、音遠ちゃんの事だけどね」

「そうそう、どうしようか……………。マスター、なにかいい考えでもあ

るの？」

「まあね。……女の子の悩みは同じ女の子に聞いてもらうのが一番だと思うんだ」

「え、じゃー、ねーちゃんとかクリスちゃんとかでっすか？」

「それも考えた。でも、もっと適任な人がいるんだ。……僕の奥さんに頼もうかと」

「……え？ マスターの奥さん？」

「うん。学校の先生」

「いや、聞いてないよ……。それより、マスター結婚してたんだ。指輪つけてないのに」

「あ、それはね……。ほら、ウチって喫茶店じゃないか。ならば当然、食品を扱う。それは僕が作るわけだ。……そういう人が指とかになにかつけてていいのかな？」

「あつ……。そうだ。料理人は、できればそういうのはしない方がいいんだ。衛生上の問題があるから」

「そういう事。だから普段からつけてないの。単なる意識の問題だけだよ」

自分の左手を4人に見せ、指輪がついてない事を確認させると、マスターはさらに続ける。

「まあそれはそれとしてだね……。今度の日曜日にでも、音遠ちゃんと会わせたいんだよ」

「今度の日曜か。そりゃまた急な話だな。まあでも、なんとかするつもり」

「ありがとう。そこで相談なんだけど、話し合いの場を作ってくれないかな？ 僕は……。会ったら気まずいからさ」

「そういう事なら協力するよ！ ついでにマスターの奥さんも見られるしね！ あ、奥さんの名前ってなんていうの？」

「名前？ 千奈美さんって言っただけど。そんな事聞いて何になるのかな」

「千奈美さんかあ。かわいい名前だな。……ん？ もも、もしかし

てその人、旧姓は霧原ってんじゃないの!？」

「あれれ? よく知ってるねー圭輔くん。正解だよ」

「な……なんてこったー……!?!?! まさか  
ちなみ先生のお相手がマスターだったなんてっ!?!」

マスターは、自分の結婚相手の名前を何気なく言っただつてもりだが、  
圭輔にとってはあまりの出来事だつたらしい。

「へえ、あの子ちなみ先生なんて呼ばれてたんだ。ついでに圭輔  
くんが教え子にいたのも今初めて知ったなあ」

「まあまあ、それはどーだつていいじゃないですか。それよりも、  
そのマスターの奥さんと音遠さんを立ち会わせる場を作らないとで  
っすね」

「そういうこと。大丈夫そう?」

「ま、何とかやってみますよ。何もしないうちから諦めるより、少  
しでも可能性のあるものになつてみたいですから」

「そーですす! まずは動いてみる事が肝心ですす! ですよね圭  
輔さん?」

「ちなみ先生が……オレの憧れの人だつたちなみ先生が……マスタ  
ーの奥さん……。ああああああ……。オレ、死のう  
かなあ……」

「圭輔くん、今その言葉は冗談に聞こえねーからやめてくれ……」

「だつて、だつて……。はああああ……」

「……僕、なんか言っちゃいけない事言つたみたいだね……」

(これで音遠ちゃんが少しでも元気になつてくれれば……)

周りの友人達を横目にひとり気を吐く翔司。問題は、まだ始まっ  
たばかりだ。

そして、日曜日がやってきた。マスターは自分の妻である千奈美  
を皆に紹介する。

「この人が僕の奥さんの千奈美さんだよ」

「はじめましてっ! 私が千奈美ですっ。今日はよろしくね」

「うおお、ちなみ先生！ お久しぶりです！ オレ、オレの事、お、覚えてますか？」

「ふみゆ？ ん……。あ、わかったぞー。秋野くんでしょ？ 秋野圭輔くん！ 何となく面影があるもんね」

「どおあああつ！！ 覚えていただけで光栄の極みです！ そうです！ オレです！ 秋野圭輔です！」

「わあ、おつきくなったね。あの時は私よりちっちゃかったのねー」

「そつ……それは言いつこなしですよー」

「もう見上げなくちゃ見えないよお。でも、それはだーりんも同じだけだね」

何年ぶりに再会した恩師は、相変わらずの様子であった。

その後は思い出話もそこそこに、この日についての計画が練られた。

「とにかく、私とその音遠ちゃんって子とお話できればいいのね？」

「そうそう。前にも話したと思うけど、僕はあの子をちょっと……

いや、かなり強くひっぱたいちゃったから気まずくて……」

「そうだよね……。あ、だーりんが怒るのってすつごく珍しいんだよー。私にも怒った事ないのね。……よっぱどの事があつたみたいね」

「そうなんですよ……。でも、千奈美さんは学校の先生って聞いたから、子供の悩み相談、特に女の子のとか適任なんじゃないかって……」

「なるほど、納得。任せて！ 私、こー見えても教師歴結構長いんだから！ いろんな子の悩みとか聞いてきたわよ、ちょっとやそつとの事なら動じないわ」

「頼もしいね、さすが僕の選んだ人だ。うん」

「あーん、だーりん嬉しいー！ ぎゅーーーーー！」

「……まだやってたんですか、それ」

「……まだ？」

年齢を感じさせない行為に、呆気に取られる4人であった。

「さて、どうやって音遠ちゃんを連れてくるかだけど……。海斗、それはお前の役目だったよな？ 大丈夫なんだろうな」

「任せてくれです！ ねーちゃんが音遠さんを誘ってくれましたから。うまいことタイミングを見計らって帰るフリするっつてまじです」

「やるなあ、みさきの奴……。今度なんか奢ってやるか」

「いいですすね、ねーちゃんも喜びますです。……うまくいったらどうするんですっけ？」

「ん、そこからは俺の役目だ。俺の単車に姉貴を乗せてここまで連れてくる。……だから海斗くん、お姉さんがどこに行ったか教えてくれ。そこで張ってるから」

「了解です！ ねーちゃんにも言っておくですよ。音遠さんから離れたら灯輝さんを探してくれて」

「……なあ圭輔？」

「なんだよ？」

「海斗くんや灯輝くんがこんなに動いてくれるのに、オレは何もしなくていいのか？」

「……翔司。大丈夫だ。ちなみ先生の話が終わりに近づいたらお前の出番をやる。誠心誠意話すんだ。一番大事な役割だぞ？ なんてって今回の問題を解決する秘密兵器なんだからな」

「そ、そうだったな。……よし」

「あーじゃあ、灯輝くんはそろそろ向かってくれ。頼んだぞ」

「ああ、任せてくれ。んじゃー！」

灯輝は愛車のエンジンを入れ、一気にふかす。次の瞬間にはもうその場からいなくなっていた。

一方海斗は、公衆電話からみさきに電話を入れていた。



「あ、ねーちゃん？ オレっちオレっち」

「は？ 何よ、新手のオレオレ詐欺？ アタシにそんなことしようだなんて上等じゃないのよ」

「ちよ、ジョーダンキツイぜねーちゃん……。で、音遠さんとはもう合流してんの？」

「うん、もういるわよ」

「了解です！ 今さっき灯輝さんもそっちに向かったから、あとはそっちでうまいことやってくれです」

「はあ？ ……アンタねえ、このアタシを誰だと思ってるのよ？」

「アンタなんか言われなくともやりますわよーだ、べーだ！」

「がっ……。こっちはよかれと思って忠告したのになんでっすかその態度！ まったく、つくづく女の子らしくない……」

「ああそう。そういう態度取るわけ。帰ったら覚えてなさいよ。こないだお嬢にやられた事をそっくりそのままアンタにお見舞いしてやるわ」

「……切るですすよ、そろそろ金なくなるし……」

「うなだれながら電話を終える海斗。その表情から笑顔は消え去っていた。

「……オレっち、明日のおてんとさま拜めるのかなあ……？」

「電話、誰からだったの？」

「ん？ ああ、うちのバカ弟。あんまりムカつく事言ってきやがったから、今日帰ったらこの世のものとは思えないほどの凄い事してあげるの。うっふふふ……」

「あうう……みさきちゃん怖い……」

「……アンタのほづがよっほど怖いわ」

「うにゅ？ 何か言った？」

「いーや、なーんにも言ってないわよー？ ほら、アレすっごくかわいいわよ？ 見よ見よ！」

「わっ、待ってよーみさきちゃん……」

そう言いながら、みさきと音遠はデパート内に姿を消す。

そのさなかで彼女は、ここの雰囲気似つかわしくない青年に目配せをしたのだが、その行動に気付いたのは当人同士のみだった。

頃合いを見計らって、みさきは何気なく携帯を取り出してこう言う。

「…………げ、ごつめーん音遠ちゃん！　なんか親から帰って来いってメール来ちゃったわ」

「え〜？　帰っちゃうのお？」

「うん。なんか急ぎの用事っぽいからもう行かないとだわ。ゴメンねーアタシから誘っついてこんなんで。今度昼メシ奢るからゴメン！　そんじゃまたー！！」

言うのが早いが、みさきはそれこそ脱兎の勢いでその場を去ってしまふ。

…………近くの物影には灯輝がいた。みさきは彼を見つけると、不自然に見えないように近づく。

（こんな感じでいい？）

（ああ、問題ない。ありがとうよ）

（いーのよいーのよ。アタシだって音遠ちゃんの事考えてるんだからね、協力させなさいよね！）

（ん。それじゃー後は俺に任せといてくれ。お疲れさん！）

灯輝はみさきとの密談を終えると、未だに呆気にとられている音遠に自然な装いで近づき、さも今しがた見つけたような口振りで声をかける。

「ん…………あれ？　姉貴じゃんか。どうしたんだ？」

「あー、灯輝くんだー！　灯輝くんこそどうしたの？」

（この反応の違いはなんだ…………。こないだ怖がらせたのをもう忘れてたかのように…………）

灯輝は姉の態度に疑問を抱くも、それを抑えながら話を続ける。

「俺は…………気まぐれに入ってみたただだよ。姉貴は？」

「私はね、さつきまでみさきちゃんと一緒にいたの。なんか親から帰って来いって連絡があつたみたいで帰っちゃったけど……」

「そっか。これからどうすんだ？」

「私もそろそろ帰ろっかな〜って思う。なんにもやる事ないから……」

…

「あ、じゃあちよつと俺と出かけない？ 暇なんだろ？ 俺も暇だしさ、暇人同士で遊ぼうぜ。てか、たまにはお姉さん孝行させるよ」

「灯輝くんと？ ん〜……、いいよ！ 行こっ」

「よし、決まり。下に単車停めてあるからそれ乗してやるよ」

「わあ〜、あのオートバイみたいなのやっつでしょ？ ちよつとおっかなそうだけど、乗ってみたかったんだ 嬉しい」

（へえ〜、弟くん結構やるじゃないのよ。……灯夜とはまた違った感じのイケメンだし、ちつと考えてみるかね）

みさきはまだ帰っていなかった。

「はいもしもし、灯輝くんか？」

「おう。今姉貴を連れてそっちに向かうよ」

「オツケー。んじゃ気いつけて」

定期連絡を入れていた灯輝の応対を終えた圭輔は安堵の表情を浮かべていた。

自分の立てた計画が、今のところ全て滞りなく進行していることに満足しているようだ。

（このまま……うまくいってくれ。頼む！）

「そんじゃ、これ」

デパートから出た2人は、灯輝の単車のところに来ていた。そこで彼は音遠にヘルメットを手渡す。

「わっ……と。これかぶるんだよね？」

「そうそう。かぶんねーと道交法にひっかかるかもしれないからねーからよ。ま、2ケツも充分それにひっかかっちゃうんだけどな」

「どっこうほう？」

「わかんなきやわかんねーでいいよ。……それっ！」

灯輝はそう言いながら足に力を入れ、エンジンを起動させた。

「よし、後ろに乗ってくれ」

「うん！……でも、落ちないよね？」

「いや、ちゃんとつかまってねーと落ちる。……でもほれ、座つてるとこ見てみる。ベルトみたいなのあるだろ？」

「あ、うん。これがどうしたの？」

「片手でこれを握って、もう片っぱの手で俺につかまるんだ。そうすりゃ大丈夫」

「は〜い！」

「しっかりつかまったな？ よっしゃ行くぜ！」

音遠を乗せた彼の単車は軽快に道を走っていた。

「どーだ？ 気持ちいいか姉貴？」

「うん、すっごく！ 風を切るってこんな感じなんだね〜！ あー

そっだそっだ、これからどこ行くのぉ？」

「ええ？ どこ行くかって？ ……そいつあ、着いてからのお楽しみつてもんだな」

「ぶう〜、いぢわるう」

「なんとでも言うてくれえ！ しっかりつかまってねえと落ちるぞ」！

「うわ〜い！ 速い速い〜！」

音遠は、弟を掴む力をさらに強めていた。

それはさながら、遠く離れた兄の面影を確かめるかのように。

（お兄ちゃん……）

「……お、あれじゃね？ 灯輝くんたち」

「それっばいな。早いな」

翔司たちの肉眼で確認できたものは、確かに灯輝たちであった。

ゆっくりとスピードを落とすつつ、こちらに向かってくる。

「よっ、おまたせ！」

「いや、全然待ってねえって。早かったなずいぶん」

「いや、姉貴がもつと飛ばせっつーからさあ」

「あれ？ 森野くん圭輔くんだけ。それに海斗くんまで……。みんなはどうしたの？」

「いや、実はな音遠ちゃん。キミに会いたって人がいるんだよ」

「えっ！？ 誰誰？ 誰なのお？」

「うん。その人は今カフェにいるんだ」

「えっ……？ でも私、あそこ出禁にされちゃって入れないよ……」

……。森野くんなら知ってるでしょ……？ くすん……」

「あーあー、悪い悪い。泣かないでくれ。そうそう、それだから今からその人を連れてくるよ」

圭輔はひとつ走りカフェへと向かう。その時、翔司は音遠の傷だらけの腕を見て愕然とした。

また新たな傷が増え、重なっている。Hexagramを出禁にされた日もまた切ったのだろうか。

「はあ……はあ……。お、お待たせ……」

「ふみゆく、もつとゆっくり走ってよ……。……あつ！」

駆け足で現れた圭輔と千奈美は、2人して呼吸を荒くしている。

しかし千奈美は音遠を見るや否や、すぐに呼吸を整え正面から向かい合うのだった。

「あなたが音遠ちゃんね？ 初めまして、私の名前は増田千奈美。

みんながマスターって呼んでいるHexagramの主人の妻ですよ。よろしくね、音遠ちゃん」

そう言いながら、屈託のない笑顔を見せる千奈美。

音遠の方も、見知らぬ女性から名前を呼ばれて戸惑っていたが、すぐにいつもの調子でこう返す。

「えっと、私は水嶋音遠といます！ ちなみさん、初めまして！

えへっ」

「きゃく、かつわいい〜！」

「わっ、かわいいなんてそんな事ないですよ。ちなみさんこそすつごくかわいらしいう ……あ、私に会いたい人って、あなたの事ですか？」

「ええ、そうよ。みんなが音遠ちゃんの事話してるから、どんな子なのか知りたくなっちゃったの」

「なんか照れちゃうなの〜。いろいろお話しようね」

「うん。 ……私ね、中学校の先生やってるんだけど、大学では心理学も少しやってた。まあ、申し訳程度の知識しかないけど」

「えっ ……？」

そう言つと千奈美は視線を落とし、音遠の傷だらけの腕を凝視した。

「リストカット ……。音遠ちゃん、これ、いつからやってる？」

「あう ……」

「答えてちょうだい。私はあなたの悩みを聞いてあげたいの。言ってくれなきゃわからないわ。さあ、話してみて。 ……大丈夫よ、怖くないから」

「あぐう ……。くすん ……」

優しく諭すように言つ千奈美だったが、音遠は怯えるばかりで言葉が出てこない。

……とその時！

シヤアアア ……ン。

何を思ったか、千奈美は自らの手首に果物ナイフを押し当て、そのまま横に動かしていた。

彼女の白く華奢な腕から滴り落ちる鮮血が、その場の空気を凍りつかせてゆく。とめどなく溢れ、止まらない。

……しかし当の千奈美は、痛がる素振りも見せずに、氷のような

微笑を浮かべていたのだ。

千奈美の腕から流れる血が地面に落ちたと同時に、向かい合っていた音遠もその場にひざまづいていた。

### 第3章：Moonlit Girl

カフェHexagramの前では、異様な光景が映し出されていた。

左腕から流れる血を止めないで小さく微笑む女性と、彼女の前でひざまづく少女がいる……といった光景を、道行く人々は見て見ぬふりをしていた。

……その時、ひざまづいている少女のほろが口を開いた。

「どうして……どうしてそんなことしたの……？」

女性はしゃがみ込み、少女……音遠に視線を合わせながら答える。「それはね、あなたがこれで苦しんでいたから。これ、というのはリストカット、つまり『虚偽性障害』。自分を傷つける事で他人の気を引こうとしているの」

「だから……どうして……」

「私はあなたと同じようにしただけ。……人の悩み、苦しみというものは、相手の悩み、苦しみを知ってから初めてわかるものだから」  
「……違うもん。私はお兄ちゃんに逢えなくて寂しいんだもん。ちなみさんには……マスターがいるじゃない。おんなじじゃないもん！」

「……私ね、だーりんを5年は待ったな」

千奈美はそこで、自分の身の上話を始めた。

「あの人、高校卒業と同時に独りで外国に修行に行っちゃったのよ。当時は今みたいに通信手段が整ってなかったから、連絡なんてほとんど取れなかった」

「そんな……そうだったの……？」

「寂しくなかつたって言えばウソになる。でも、いつかきつと私を迎えに来てくれると信じてたから、私は待てた。……そして今に至るの」

そこまで言って、千奈美はマスターの方に目をやった。マスター



は慌ててそつぽを向くが、その顔は赤く染まっていた。

「ふふっ、だーりんだったら照れちゃってかわいいんだから。……大好きな人が遠くに行っちゃったという点で言うなら、おんなじだと思っただけだな」

千奈美の言葉を受け止めた音遠は、こらえきれずに泣き出してしまった。

「でも……でも……。くすん……」

「おいで。ぎゅってしてあげる」

「……うん……」

「よしよし……。いいこいいこ」

音遠を抱きしめ、頭を撫でる千奈美。その姿は、さながら赤ん坊をあやす母親を彷彿とさせた。

彼女のすすり泣く声だけが、周囲に小さな楽曲となって奏でられていた。

「お疲れさん。腕、大丈夫？」

「うん。なめとけば治るわ」

「先生ええ〜〜！！ おケガはありませんか、気は確かですか〜〜！！？」

「圭輔さんこそ気は確かですすか？」

「うるせー！ オレは……オレは……。ああああ〜〜！！」

「で……あの子はどうしたの？」  
「寝ちゃった。今は落ち着いてるからいいけど……虚偽性障害、結構大きいかもしれないわ」

「そっ……か。もう少し休ませてあげようか。もし何だったら泊めてあげても構わないし」

「あの……っ！ 音遠ちゃんは、大丈夫なんですか！？」

「こつこつのは焦った方が負けよ翔司くん。つらいのはみんな同じ。だからじつとこらえて。男らしく」

「……わかりました。冷静に受け止めます」

「少しは前に進んだ、って思ってもいいのかな……これは」

「いいと思う。最終的には『大丈夫だ』って思う事が大切だよ。気持ちの問題。大きな一歩だと思えば、それでいい」

「気の持ちよう……ですか。深いですわ……」

「……それじゃ、ここで立ってるのもなんだからお店入る、みんな？ 私がおごっちゃうから」

「千奈美さん、いいの？」

「いいのいいの！ おいし〜の作ってね、だーりん」

「りょーかい。さ、そんじゃ入った入った」

彼らはカフェに戻り、マスターの甘味を堪能する。

そうすることで、ようやく皆の顔に笑顔が戻ってきた。

「……あつ、私ちよつと上行ってくる」

「うん、行ってらっしゃい」

千奈美はマスターにそう告げると席を立つ。『上』というのはこの建物の2F・3F部分、すなわち彼らの住居部分を指す。

2Fの寝室を小さくノックする千奈美。しかし反応はなかった。

どうやら音遠はまだ寝ているようだ。

「……ふう。寝てるのならいいわ。それじゃ、今日は泊めてあげますか」

そう呟くと、彼女はそつとその場を去ろうとする。……とその時、何故かそこに居た翔司と目が合った。

「わつ、翔司くん？ 来てたの？」

「ええ……。音遠ちゃんが気になって」

「大丈夫よ。今は寝てるからそつとしといてあげましょ」

「それなら……」

千奈美に誘導されて、翔司はしぶしぶ戻ってゆく。

彼は、誰よりも音遠のことを心配していた。なんとかして彼女に立ち直ってもらいたいと思っているのだ。

その夜、音遠は不意に目を覚ます。

周囲を見渡すと、見慣れぬ風景が広がっていた。月明かりを頼りに、電灯のスイッチを探す。

「ここ、どこかな……?」

電気をつけて見回すも、そこに広がる風景は自分の知らないもの。不安になってしまった彼女はドアを開け、誰かを探し始める。

だが、時間はすでに0時を過ぎてしまっている。

恐らくは誰も起きていないだろう……と思ったその時だ。

「あら、音遠ちゃん? 起きちゃったの?」

そこにはパジャマ姿の千奈美がいた。年齢のわりに幼く見える彼女は、その服装も子供のようにだった。

「あの……私、ずっとここで寝てたの?」

「そうよ。ずっと寝てたから起こすのも忍びなかったし」

「あ……あの……えっとお……」

「ん?」

「あつ……。怒ってないの? マスター」

「だーりん? ああ、もうぜーんぜん。泊めてあげてって言ったの

あの人だし」

「……」

「さっ、まだ夜よ。寝なさい。ね? それともお風呂入る?」

「……うん」

「それじゃ、着替え用意しとくわね。お風呂はあっちよ」

「ありがとう……。それじゃ入らさせてもらいます」

音遠は軽く会釈をし、風呂場に向けて歩いていった。

「起きたの? あの子」

「うん。今お風呂」

「……あのさ、今日はあの子と一緒に寝てあげてくれないかな?

独りじゃきつと心細いから」

「あら、だったらみんな寝ましようよ。うふふ、親子で川の字に

なつて寝られるよ」

「親子じゃないつて。あんな大きい子が本当の子供だったらまずいでしょ。……でもあの子ね、今年で20歳になるんだつてさ。全くそうは見えないよね」

「そんな事言っちゃって、ホントはあの子の事がかわいいくせに」  
「このこの」

「う……。わ、わかった。あつちから布団持つてこようか？」

「いいじゃない。あの子ちっちゃいんだから、おふとん2つでも充分入るわよ」

「それもそうか。……飲む？」

「うん！」

マスターは千奈美のグラスにもビールを注ぐ。彼らは、少しだけ遅い晩酌を始めたのだった。

その頃……音遠は湯船の中で何やら考えを巡らせていた。腕の傷は、どうやら湯には沁みないようだ。

「私も……待たなきゃダメかなあ……」

髪留めを外した彼女の髪は、相当な量がある。そのたつぷりとした髪も湯に浸らせながらさらに考える。

「5年……。長すぎるよそんなの……。お兄ちゃんはそんなに長くないわけじゃないけど……。私、今でも待てないから……。はう……。お兄ちゃん……。逢いたいの……」

遠い国の兄に思いを馳せる音遠。この時は涙を見せることはなかった。

「このシャンプー、いい香りだう。今度買ってみよつと」

入浴を終えた音遠は、脱衣所に置いてあつた服に着替える。

どうやら千奈美のパジャマのようだが、彼女には若干大きめだった。

髪を乾かしてから、明るい部屋へと移動する。

「お。出てきたね」  
「あらら、ちよつと大きかったみたいね」  
「はい」。私にはちよつとだけおつきかったの」  
「とは言ってもなあ、まさか僕の着せるわけにはいかないだろうしね。大きすぎちゃうね」  
「も〜だーりんったら、当たり前じゃないのよ〜」  
そう言いながら千奈美はマスターに軽く肘で攻撃する。  
まるで新婚カップルのような2人の仲の良さに嫉妬心を抱いた音遠は、つい本音を漏らしてしまう。  
それが再び、口論の火種を生むとも知らずに。  
「いいな〜……仲良くて。私もお兄ちゃんがいたら……」  
「またそれか。音遠ちゃん、もうあきらめたらどうだ」  
「やだ！ 私絶対あきらめないもん！」  
「キミはまた……いつたいつになつたら……」  
「だーりん、ストップ。私に任せて。……あのね、あなたはお兄さんとうとうなりたいの？」  
「どうなりたいうて……。私はずうつとお兄さんと一緒に居たいの」  
「それが……何を意味しているかはわかる？」  
「……？ わかんない」  
「そう……。じゃあ教える。それはね……結婚。ずうつと一緒に居たいって言うなら」  
「結婚……。そうかも、私はお兄ちゃんとそうなればいいのかも……」  
「無理よ。わかっているとと思うけど、法的に許されていない。それに世間体も最悪になるわ。そうなつたら親御さんにまで迷惑がかかるのよ。それでもいいの？」  
「あう……。だ、だつたら……結婚しなくなつて一緒に居ることは出来るでしょ？ そういう夫婦も居るってこないだテレビで見たもん」

「確かにそういう方法を取れば可能かもね。それでも親御さんにかかる負担は大きいだろうけどね。……でも、お兄さんは本当にそれで幸せなのかしら？」

「違うの？ 自分を愛している女性と一緒に居られることは幸せじゃないの？ うっくん、きつとお兄ちゃんを幸せにするんだもん」

「違うに決まってる。そんなのはただの幸せの押し売りよ。あなたの幸せがそのままお兄さんの幸せになると思ったら大間違い」

「幸せの押し売りだなんて、ひどい！」

「酷くないわ。それにね、お兄さんの幸せをあなたが勝手に決めていいわけない。音遠ちゃんだってイヤでしょ？ そんなの」

「お兄ちゃんのためならガマンするもん」

「……例えば、親御さんが勝手に結婚相手を選んできて、自分の考えも聞き入れられないまま結婚させられる。これはどう？」

「うっ……。それはイヤだっ……」

「でしょ？ あなたは今、お兄さんにそういう事をしようとしてるの。人が嫌がることなんだから、しちゃダメ」

「でも……。それじゃ私はどうなるの？ お兄ちゃんと一緒に居ちゃダメって言うなら、私は幸せになれないよ……」

「そんなの知らない。あなたの事はあなた自身が決めなさい」

「あっ……」

「いい？ 音遠ちゃん、もう一つ。あなたとお兄さんが一緒になっちゃいけない理由。……あんまり考えたくないけど、あなたとお兄さんが関係を持って、子供が出来たとするわ」

「マスターはこの時点ですでに席を外している。しかし、どこからそっとう聞き耳を立ててはいるようだ。」

「そして子供が生まれる。……でも、その子供は高確率で奇形児になっちゃうらしいの。統計上どこまで本当かはわからないけど、そういう話があるという事実は受け止められる？」

「……！」

「無理よね。お兄さんが短期留学してるだけで大泣きするくらいだ」

もんね。……悲しい事だけど、平安時代のような昔みたいに、兄弟で結ばれることはあっちゃダメなのよ」

千奈美はこの話を進める傍らで、何度もビールを口にしている。しかしそれでも、酔いは回っていないようだ。

「家族の幸せのためにも、お兄さんの幸せのためにも、そして何より、あなた自身の幸せのためにも……ね？」

「えぐっ……、はうっ……」

ここまで話し終えたところで、ついに涙をこぼし始めた音遠。そんな彼女を、千奈美はそっと抱き寄せる。

「大丈夫だから……。あせらず、ゆっくり受け止めていこうね？」

（はぁ……すごいなやつぱり。僕があれだけ言っても聞かなかったあの子に……）

腕を組みながら納得したようにうなづくマスターの横で、千奈美は音遠の頭を優しく撫でてやる。

待宵の月が、3人を優しく照らしていた。

翌朝、音遠は見慣れぬ風景に困惑していた……がすぐに現状を把握した。

「あ、私マスターのおうちに泊めてもらってたんだっけ」

髪を結びながらゆっくりと立ち上がると、不意に彼女の鼻孔を何かかくすぐる。

「あっ、朝ごはんだっ」

「おはよ、音遠ちゃん。よく眠れた？」

「うん！ すっごーい！ ね、これ誰が作ったの？」

「僕ですよ……っ」

奥からエプロン姿のマスターがゆっくりと姿を現す。

カフェでのエプロンとは若干異なっただけだが、風貌自体はあまり変わらなかった。

「さあ、冷めないうちに召し上がれ」

「うわあ、いいの？」

「よくなかつたら3人分なんか作りません。ほら座った座った。立  
ったままはお行儀悪いよ」

「あう。やつぱりマスターは優しい」

「……こないだはごめんね、痛かっただろ。もうしないから、許し  
てくれないかな……？」

「あぐう……、もう気にしてないもん……。だから、許すも許さな  
いもないもん」

「……はいっ、握手！」

そういうと千奈美は立ち上がり、マスターと音遠の手を握らせて  
上下させた。

「はいっ、これで仲直りね。ほいじゃみんな一緒に、いただきま  
す！」

「はい、いただきます。……うん、今日もいい出来だ」

「いただきま〜す！……きやう〜、おいしい〜！」

「音遠ちゃん、あ〜ん」

「あ〜ん！ にやうう、おいしい」

まるで姉妹のような仲のよさを見せる2人の様子を見ながら、マ  
スターはコーヒーをすすする。

(よかつた……。だいぶ立ち直つたみたいだな)

食事を終わると、音遠はマスターに話しかける。

「ねえマスター？ 泊めてくれて……。ありがとう。ごはんもおい  
しかったの」

「いえいえ、お安い御用です」

「あのね……。だからね……。今日一日だけ、お店のお手伝いさせて  
もらえないかな……？」

「え？ ん〜……。音遠ちゃんがそうしたいってんなら構わないけ  
ど、確かキミ、出禁になってたんじゃなかったっけ？」

「あぐう……。いぢわるう……」

「もー、いぢめないの！ 手伝いたいって言ってんだからさあ、ね



？ それにだーりん、もう出禁解いたって昨日言ってたじゃーん」  
「それもそうだ、うん。酔った勢いで言ってたわけでもないし、うん  
それじゃ音遠ちゃん、よろしくね」  
「わーい！ ありがとう！ きゃう」  
「わかったわかった、わかったから離れてくれないか？」  
「はーい！ てへへ……」  
「あー！ だーりんを抱きついていいのは私だけなのにくー！ こ  
らー！ 待てー！」  
彼ら3人の姿は、さながら本当の親子のようであった。もちろん、  
ただそう見えるだけではあるが。

この日のHexagramは、なんと言っても華やかさが違う。  
ウエイトレスが一人加わっただけでこつも違ってくるものだろう  
かと感心するほどだ。  
客の入り、客層、客の滞在時間など、全てがまるつきり違ってい  
た。

その原因は、本日自らヘルプを申し出た少女、音遠にあった。  
普段の要領の悪い彼女からはおよそ想像のつかない手際によさに、  
さしものマスターも舌を巻くほどだ。

「なかなかやるじゃないか……。家でお手伝いよくやってるのか、  
それとも同じようなバイトかなんか経験あるのかな……？」

「マスター！ 5番に暴君の紅茶と三日月タルト入りまーす！」

「はいよー！ ……よっし、作りますか」

そんな状況でもマスターは、いつもと変わらぬ調子を保っていた。  
時は11時を少し過ぎた辺り。溶け残る雪が日差しを反射して美  
しく光る頃、ドアが開けられた。

「おはよござますー！ 今日はおたたかですねー。……ありよ？ ね  
おんのおねーちゃん？」

元気いっぱいのカフェに入ってきたクリスは、ウエイトレス姿の

音遠を見てただでさえ大きな目をさらに見開いていた。

「ねおんのおねーちゃん、どうしたですか？　くいにげでもしたですか？」

「あうう、違うよおクリスマスちゃん。昨日ね、マスターのおうちに泊めてもらっちゃったから、恩返しって事でやってるの。結構楽しいよ」

「ほほお。ますたーさんのお仕事、大変です？」

「ううん……。今までずっと一人でやってきた事を考えると、マスターって凄いと思ったな」

「こらこら音遠ちゃん。おしゃべりはまた後でね」

「はうい。えへへ、怒られちゃった」

「ねおんのおねーちゃん、がんばれです！　ミーは勝手に座っちゃうですよ？」

クリスはカウンター席の左から2番目に座る。どうやらここが彼女の指定席のようだ。

マスターもある程度承知しているのか、彼女が来店した際はその辺りにいるようにしていた。

そんなマスターは、ふと時計を見る。いつの間にかもう3時になつていたようだ。

「さてと音遠ちゃん。ここからもう少し忙しくなるよ。学生とか帰ってくるし、3時はおやつ時間だ。今のうち休憩取っちゃって。

お腹すいたでしょ？」

「うん……。あうう、おなかすいたの。マスターのごはん食べたいの」

「はいはい。今ちょっと手が空いたから作ってあげるよ。ちょっと待ってな」

「きやう」

心底から嬉しそくに厨房に下がる音遠。マスターもそれに続いていく。

この時点での客は、クリスマスのみであった。

彼女はいつもアメリカンコーヒーを飲みながら本を読んでいるのだ。

今回読んでいるものは、日本のライトノベル。

もう何度も読み返しているのか、ブックカバーが所々破れている。よほどお気に入りなのだろうか。

厨房に引っ込んだマスターが再び店内に戻るまでの時間はほんの数分。店内にはまだ目立った変化はない。

あるとしたら、クリスがコーヒを飲み干しているくらいであった。

それに気づいたマスターは、クリスにおかわりを勧める。

「ごめんごめん、ほったらかしにしてて。ほい、コーヒのおかわり。いる？」

「いるですー！ あったかいの好きですー」

「はいよ、どうぞ。ごゆっくり」

「ありがとうございますー！ ……ますたーさん、ねおんのおねーちゃんは？」

「ああ、あの子ならまだ食事中だね。『おいしいからゆっくり食べるの』だつてさ」

「ふむふむ。今度ミーにも食べさせて欲しいです」

「はいよ。いつか注文してくれたらね。……お、誰か来た」

「ドア開いた音したですねー、カラコロって」

その音を出した者は……翔司であった。彼は、相変わらずの軽い様子で店に入る。

「ちわーっす！ また来ちゃったぜ」

「いらっしやい。暇人3号くん」

「ひ、暇人って、3号って……。え、それじゃあ1号とか2号もいるの？」

「ん？ 1号はそりゃ、この僕さ。だつて実際、暇だし。で、2号はクリスちゃん」

「はいはい、ミーもひまじんさんですー！　一緒ですー！　とーっ！　合体です！」

翔司は苦笑しながらカウンター席に座る。

……その時、彼の目には信じられない光景が映し出されていた。

それは……ウエイトレス姿の音遠だった。

「えっ……！？　音遠ちゃんが、なんで？」

「うん、そっだよ。いらっしやいませ、森野くん」

「~~~~~！！！」

翔司の発した声は、もはや声と呼べる代物ではなかった。……直後にマスターに口をふさがれたのは言うまでもない。

「うるさいよ、そんなケモノみたいに猛り狂っちゃって。いつもと変わらぬ音遠ちゃんじゃないか」

翔司は、自分の口をふさいでいるマスターの手を振り解き反論する。

「な、何言ってるんだよマスター！　音遠ちゃんあのカツコ！

どー見たってその、最近よく見るメイドさんとかそんな感じのじゃないか！　……てか、あの服ってマスターの自前なの？」

「そんなバカな。千奈美さんのお古だよ。あの子にはちよっとサイズが大きいみたいだけどね」

「それが重要なんだよ！　腕を伸ばしても指先がちょっとだけしか出ないってのが！　やべえ……来てよかったぜ！」

「そうかそうか、いつもはイヤイヤ来てたんだな。コーヒー一杯であれだけ居座ってるってのに。そんな不屈きなキミに朗報だ。あの子がここで働くのは今日限りだよ」

「……え！？」

マスターの言葉に驚きを隠せない翔司。すかさずマスターに詰め寄る。

「どーゆーことなんだ！？　音遠ちゃんをバイトとして雇ったんじゃないのー？」

「違う違う。キミにはまだ言ってなかったと思うけど、昨日あの子、

うちに泊まったんだ。その恩返しがしたいって自分から言ってきたのさ。義理堅いことするよねえ」

「へえ〜……なるほど。偉いなー、音遠ちゃん」

「あうあう、そんな事ないもん。私としてのけじめだもん」

「ねおんのおねーちゃんはおえらいさんですー！　しょうじさんも見習うがいいです」

「ハツハハハ、クリスちゃんの言う通りだ！　……あ、誰か来た」  
店に新たな客が来る。Hexagramは賑わいの面を見せてきた。

そして午後7時。Hexagram閉店の時間である。……だがまだ残っている客が約一名いるようだ。

「ほい、翔司くん。店じまいだよ、帰った帰った」

「えー、ちよつと待ってよ。もう少しいいじゃん？」

「だーめ。特別扱いはしないよ。……閉店作業手伝ってくれるなら別だけど」

「よし、やってやるーじゃんか！　何すりゃいい？」

「んじゃ、店ん中掃除しちゃって。ほうきとかはこれね。僕は奥でコーヒー飲んでくるから、頼んだよ」

そう言つとマスターは、いつの間にか後ろ手に持っていたほうきとちりとりを翔司に手渡した。どうやら最初から彼にやらせるつもりだったらしい。

翔司に掃除用具一式を渡したマスターは、エプロンを外しながら奥へと引つ込んでゆく。……彼の顔に、疲労の色はなかった。

「森野く〜ん、おそうじするの？」

「ああ、うん。音遠ちゃんも奥に行つてなよ、オレやつとくからさ」「いいよー。私も手伝うよ。自分からやるって言い出したんだから、最後まで責任持つてやらないとマスターに悪いもん」

「そう？　じゃオレこの辺やるから、音遠ちゃんはあっちの方お願いね」

「はい！」

(……ちつくしゅ！ マジかわいい！ ……今なら後ろ向いてるから抱きしめるとか……ってダメだ！ オレのバカ！)

湧き上がる欲望を何とか理性で抑えつつ、翔司はほうきを操った。そして、ある程度店内をきれいにすると、2人は掃除を切り上げる。

「もう終わりでいいよな？」

「うん！ ありがと、森野くん」

「いやー、ははは。あ、マスターに言う？ 終わったこと」

「いや、いいよ。見てたから。ご苦労さん、よく頑張ったね」

いつの間にか2人の後ろに立っていたマスターは、彼らに労いの言葉をかける。

その時の姿は喫茶店Hexagramの主人ではなく、一人の男性と変わっていた。

「それじゃ2人ともお疲れ。ここはもうカギ閉めちゃうから、外出といて。……あ、音遠ちゃんにはその服あげるよ」

「いいの？ わーい！ マスター、ありがとっ！」

「いやいや、お安い御用です」

2人は店の外に出た。空には真円の月が輝いている。

月明かりに彩られた音遠の顔は、翔司の目にはいつもより美しく見えていた。

そんな彼女に、翔司はさりげなく近づき、声をかける。

「これからどうするの？ 帰るなら送るけど？」

「もうちょっと待つ。マスターにさよならって言いたいし。森野くんこそこれからどうするの？」

「オレ？ オレは別に何も無いから、そのまま帰るだけ」

「そうなんだ……。あ、マスター」

店内の照明が落ちると同時にマスターが姿を現す。そして、ドアにカギをかけた。

「はい、今日の業務、全て終了つと。さあ帰ろうか」

「うん！ マスター、今日はありがと！」

「お礼を言うのはこっちの方だ。音遠ちゃんのおかげで助かったよ。

……それじゃ僕はもう帰るよ。2人とも気をつけて帰ってくれ。風

邪引くなよ。……お休み」

「おやすみなさい、マスター」

「んじゃ」

マスターはひとり、家に戻ってゆく。とは言っても店の裏手に回

り込んだだけなのだが。

「じゃ、オレらも帰ろうか」

「うん」

寒空の中、2人は共に歩いてゆく。

翔司は、音遠と歩幅を合わせるように歩いていた。

「ねえ、森野くん？」

「……は、はひっ!？」

「わっ、びっくりしちゃった？」

「いや……まあ……。ど、どうしたの？」

「えつとね、どうしてお掃除手伝ってくれたのかなあ〜って」

「う……」

(どうするオレ。ホント言つと『もつと音遠ちゃんと一緒に居たかったから』だけど、こんな事ほざいたらきつと軽蔑されちまうからな……)

彼はしばし考えた後、当たり前障りのないと思われる答えを出した。

「ああ……それはね、オレいつつも来てるからさ、たまにはあーゆ

ー事してもいいんじゃないかな……って」

「そうなんだ〜。そんなに来てるの？」

「うん。圭輔に教えられてからこの1ヶ月ほぼ毎日。だけど、だい

たい誰かしら知り合っているよね。マスターも特に何も言わないし」

「そうだよね〜。マスター、優しいもんね。……私、そんな優しい

人を怒らせちゃったんだよね……。えぐう……」

「う……うわわわ！ な、泣くなよ音遠ちゃん！ マスターももう  
気にしてねーって！ な？」

「でも……でも……。くすん……」

(ど、どーすりゃいいんだ！ ……くそ、こうか!?)

翔司は音遠の肩に手を置き、じっと彼女を見つめた。

「オレ、音遠ちゃんが悲しむの……もう見たくないよ。マスターも  
もう気にしてないんだから……。もうその事を気にしなくなつて…  
…いいんだよ……」

「えぐ、えぐっ……」

だが音遠は泣き止まない。翔司は少しかがんで、背の低い彼女と  
目線の高さを同じにして続ける。

「大丈夫だから……な？」

「くすん……。うん、ごめんねいきなり泣いちゃって……」

「……もう大丈夫？ 家まで送るから、行こっか」

「うん……。えっと、翔司くん……？」

(……!？ お、お、お!？ つ、ついにオレを下の名前で!?)

「な……なに……かな……？」

「心細いから……手つないでいい……？」

(……来たああああ!! お、落ち着けオレ、オレ落ち着け。ど、  
ど、どつちの手を出せばいいんだ?)

高鳴る心臓、震える指、そして、ゆるむ頬。その3つを必死に抑  
えつつ、彼は音遠の小さな手を握る。

「翔司くんの手……あつたかいの……」

「そ、そうか、な？ そ、そいつはよ、よかつ、よかつた。もし何  
かあっても、オ、オレが音遠ちゃんをまも、守ってやるから、な、  
な？」

しかし、どうにもこういうシチュエーションに慣れていないせい  
か、明らかに拳動不審になってしまっている。

歩く時も右腕と右脚が一緒に出ていたり、まばたきの数も不自然  
に多くなっていたりした。何故か汗ばんでもいた。



それから20分程夜道を歩いたところで、2人はようやく音遠の家に着いた。

「ほ、ほら、つ、着いたぜ音遠ちゃん」

だが、翔司はまだ繋がった手を離そうとはしない。そんな彼を訝しげに見つめながら音遠は言う。

「ねえ、もう着いたんでしょ？ 手離していいよ」

「あつ……ごめん……」

そう言われて、心底から名残惜しそうに彼女との接点を断つ翔司であった。

「久しぶりのおうちだう……。怒られちゃうかなあ……」

「大丈夫だと思うけど？ マスターとかが電話してくれたと思うし」

「そこまでしてくれたんだ……。マスターって凄いね」

「うん。……オレの周りはみんな凄い奴ばかりだなあ。その点、オレなんかなんにも取り柄ないしなあ……」

「そんな事ないよ。翔司くん、優しいじゃない。こうして私をおうちまで送ってくれたし、お掃除も手伝ってくれたし」

「優しい……か」

その言葉が引き金となり、翔司は途端に卑屈になってゆく。

彼は一たびマイナス思考になると、その方向にどこまでも突き抜けてしまうという悪癖を持っており、この時もその癖が出てしまっただようだ。

「優しいだけの男ってどうなの？ オレは確かに優しいかもしれない。でもそれだけじゃ……自慢になんかやりたくない！」

「えっ……ど、どうしたの？」

「圭輔にも海斗くんにも灯輝くんにもそれぞれ取り柄があるのに……オレにだけなんにもない……！ オレだけが……オレだけなんもできないダメな奴なんだ……！」

「そんな事ないもん！ 何よ、そんなにひがんじゃって！ そんな風に、いっつも自分はダメだって思い込んでるから本当にダメにな

「つちやうんじやない！」

「うっ……！」

翔司は、核心を突かれた気がした。『ダメだと思うからダメになる』、確かに彼は彼自身そう思っていた節があった。

その悪癖に、今ようやく気づけたのだ。

（そうだ……。オレは……。いつも自分だけがダメだと決め付けていた）

翔司にも良い点はたくさんある。それに気づいていないだけなのだ。

だが彼は、自分でその点に気づいていない事を焦っていた。

（なまじつか、オレの周りは凄惨奴らばかりだったから、すぐに勝てないとわかってひがんでた……。ただの負け犬だった……。ただど……。今更改善しようつたって……。！）

「……。ごめん音遠ちゃん！ オレ、もう帰るわ……。それじゃまたな！」

「あっ……！」

音遠の返事も聞かぬまま、翔司は一目散にその場から逃げ出していた。

夜空に光る月も、今の彼にとっては自分の失態を嘲笑っているようにしか見えなかった。

（また……。オレ逃げてやがる……。正真正銘の負け犬だな……。オレ）  
結局、家に着くまで彼は全力疾走をしていたのだ。

「はあ……。はあ……。はあ……。あーあ、もう無理だオレ。もうダメだ。やめやめ。所詮オレなんかどんなに頑張ったところで、音遠ちゃんのような高嶺の花は振り向いちゃくれねーや」

そう言いながら、勢いよく玄関のドアを開け放つ翔司。

「……。はは、そう考えたら楽になったぞ、肩の荷が下りた気分だ。そうだよな、『モテないギルド』の構成員が恋しようって事がまず間違ってるんだよな。ははっ……」

崇高なる負け犬は、ある種の悟りを開いていた。

再び訪れる、兄の部屋。

彼が旅立ってから、この部屋に立ち入る者はほとんどいない。

……彼を愛する少女を除いては。

「お兄ちゃん……。私、帰ってきたよ……。だから、お兄ちゃんも帰ってきて……」

右手に握られる、カッターナイフ。刃を少しずつ出し、ゆっくりと左腕に近づけてゆく。

……だが、新たな傷は増えなかった。重力に従い落下してゆく凶器は、音も立てずに床に落ちた。そして音遠もくずおれる。

「手が……動かなかった……。どうして……?」  
泣こうとしても、その瞳から涙は出ない。

……ふらふらと兄のベッドに近づき、力なく倒れこむ。

「お兄ちゃん……。淋しいの……。私をなぐさめてなの……」  
枕を抱きしめ縮こまった月明かりの少女は、自らを快樂に浸らせる。

その小さな喘ぎ声は、遠い海の向こうには届きもしないのに。

翔司はやや汗ばみながら自室へと戻る。テーブルの上に放置していた飲み物を飲み干し、空になった容器をゴミ箱に投げる。……しかし入らない。

「ちっ……。ゴミにも嫌われてんのかよオレ……」

彼は入らなかつたゴミをそのままにし、脱いだ服もそのままです、風呂にも入らず眠りに就いた。

(でも……。やっぱオレ、音遠ちゃんの事好きだわ……。でもどうせ何したって無駄だし、どうにもなんねーし……)

答えの出せないまま、眠りの世界に落ちていた。

(音遠……。音遠……)

「う……にゅ……？　だあれ……？」

（俺だよ……俺）

「……お兄ちゃん！？　帰ってきたの！？」

（ハハハ……ちげーよ……。俺、あつちに好きな子できたんだ……。だからよ、もう俺の事なんか考えるんじや……ねえぞ……）

「そんな……やだあ！　待って！　私を置いていかないで、私から離れないで……」

「……。夢……だったの……？」

彼女は夢を見ていた。

愛する兄が、留学先で好きな子が出来たと告げ、自分の事を考えるなと警告する夢を。

もちろん、彼女はそれを受け入れられるはずはない。そして、動揺も隠せない。

「うそだよね……お兄ちゃん……。だって、お兄ちゃんは私の事を今こうして愛してるんだから……。はうう……」

自分の右腕を兄に置き換えることで強引に自分を納得させた彼女は、しばらくその行為を続ける事で夢の内容を忘れようとしていた。

月明かりも遮った暗闇の中、嗚咽とも喘ぎ声とも取れるような悲痛な声をあげながら。

結局彼女は、その後眠ることもせずその行為に溺れていたのだ。

翌日、翔司がいつものようにカフェに行くと、マスターが店先を掃除していた。

「マスター、おはよう」

「やあ、おはよう」

「いやしかし、毎朝精が出るねえ」

「はは、そうかい？　店先の掃除はね、開店前の儀式みたいなもん

だね。他には……その立て看板に今日のおすすめメニュー書いたり、店内掃除に材料の仕込み、かな」

「色々やる事あるんだなあ」

「昨日のうちにやっとく事もあるけどね。10時開店に合わせるためには、遅くとも1時間前には始めておかないと」

「てかさ、そんなにたくさん仕事があるのに何で誰も雇わないの？」

「昨日は音遠ちゃん入ったから随分楽だったでしょ？」

「あれは特別。確かに楽にはなったけど、他の子も音遠ちゃんのように仕事が出来るとは限らないわけじゃないか。雇ったところで僕の仕事が増えちゃ雇うだけ損だし」

「うわ、さりげにすげーこと言ったよこの人……」

「それに、僕は基本的に他人任せってのは好きじゃないんだ。自分で出来ることは自分でやりたいわけ。僕は、この仕事を趣味でやってるんだし、口出しされるなんてまっぴらゴメンさ」

「は、はあ……。そうなの……」

「翔司くんはどうなの？ 自分がこれだ！ って思えるものでも他人任せでいい？」

「……」

しばし考え込む翔司。自分がこれだ！ と思えるもの、それは今の彼にはおおよそ想像のつかないものであった。すなわち、絶対に譲れないもの。それは……。

「……翔司さん！」

「……んあつ！？ ……な、なんだ海斗くんか。どうした？」

「そりゃこつちのセリフです。どーしたんですか、んーなトコにボケーっと突っ立っちまって」

「あー……、考え事してた」

「翔司さんが考え事ですか……。やっべー、オレっち傘持ってきてねーですよ」

「……どういう意味？」

「言葉通りです」

「あつそ……。で、今日学校は？」

「学級閉鎖でつす。これはマジでつすよ？ 昨日のオレっちのクラス、ありえねーほど休んだんでつす。40人いるんでつすけど、30人以上休んじまって……」

「高校の学級閉鎖ってあんまり聞かないけど、そりゃ確かにそうせざるを得ないかもなあ」

「他のクラスもそんくねー休んだから、やむなく学級閉鎖ってことになったんでつす。今日は金曜日だから、3連休をタナボタ的にゲツトって感じてつすね」

「そかそか。そんじゃ今日はみさきに何も言われないな？」

「当たり前でつす！ だいたい、ねーちゃんはいちいち細かすぎなんでつす！」

海斗は、ここぞとばかりに姉のみさきの悪口をまくし立てる。

「なんか小姑みてーに人のやることなすことケチつけんじやねーって話でつす。オレっちはねーちゃんのドレイじゃねーんでつすから！」

しかし翔司は、その愚痴をうまいこと右から左に聞き流していた。「おせっかいもほどほどにしねーと、いつまで経っても彼氏なんか出来るわけねーって話でつすよ。行かず後家だけは勘弁してくれってんだ。ぶつぶつ……」

彼らはまだ知らなかった。この店に忍び寄る女性の存在を。

「それと自分の事になると無頓着でガサツで……ん？」

「おはよ アタシのかわいい弟の海斗くん 翔司もおはよ」

不自然な猫なで声で呼びかける恐怖の女王……もとい、みさき。

その顔は笑っているが、目は笑っていない。

海斗はその表情に戦慄し、一気に冷や汗を噴き出す。かたや翔司はその殺気を鋭敏に感じ、こっそりと店内に避難する。

「がっ……。翔司さーん、そりゃねーでつすよあ……」

「ねーえ、海斗くん？ 小姑みたいなおねーちゃん、嫌い？」

「い……いえ……」

「おせっかいとかほどほどにしないから、アタシに彼氏出来ないの  
かなあ…………？ くすん、かなちなあ…………」

「う…………ぐ…………」

「あとお、行かず後家なんて言葉、どこで覚えたのお？ おねーち  
やんに教えてくれないかな？」

（さ…………最悪だ…………）

「それとね、海斗くんはアタシのドレイなんかじゃないわよ。海  
斗くんはあ、アタシのお、げ・ぼ・く。よ。」

（こ…………殺される…………）

「ここだとマスターに迷惑かかるからあ、続きは近くの公園でね？」

「どうぞ…………お望み通りに…………」

海斗はみさきに完全に腕を極められながら、近くの公園に連行さ  
れていった。

それから3日間、海斗の姿を確認した者は誰一人としていなかっ  
たという。

「…………こんにちは」

穏やかな物腰でドアをくぐるは、テニススクールコーチの南野優  
香。この日は珍しく一人であった。

「いらっしやい」

「どうも。森野さんも、こんにちは」

「ああ、おつす。一人なんて珍しいね、瑞奈ちゃんは？」

「あの子のクラスは学級閉鎖になってしまったと伺いました。なの  
で自宅待機を余儀なくされており、それを真面目に遵守しているよ  
うです」

「ああ、そう言えば海斗くんもそう言ってたな。同じクラスだった  
っけか」

「そうでしたわね。…………いつもはいると小うるさいだけですが、い  
ざいなくなるといささか寂しいものですわね」

「そうなんだ。じゃあ、灯夜もそうだったのかな？ あいついつつ

も音遠ちゃんをウザがってたけど、いなくなると寂しいとか思ったりして」

「そこは……本人に伺ってみないとわかりませんわ」

「ははは、確かにそうだ」

「……それにしましても、森野さんはいつも音遠ちゃんの事を口にしていらっしやいますね。自分でもお気づきではありませんか？」

「え？ オレそんなに音遠ちゃんのこと言ってる？」

「言ってる。昨日は25回、今日はこの時点で3回目だね」

「何で数えてるんだよ！？ オレだってわかんねーのに」

「ごめん、昨日の回数は適当だ。でも今日の回数は間違ってるよ」

「まあ……。そんなに口にしていらしたのですか。あの子の事が気になるのでしたら、面と向かってそう申せばよいでしょうに……」

「それがなあ、そうもいかないんだよなあ。どうせオレなんかごんなに頑張ったってあの子がオレの事好きになってくれるはずないし……」

「そんなに自分を卑下しないでくださいな。初めから無理だと決めているのは、成功するはずがありません。まだ面と向かっては言っていないのでしょうか？」

「そりゃ……そうだけど……」

「うーん……。圭輔くんだったら何て言うかね。まあ、さんざん罵った後の確なアドバイスくれるとは思っけど。もしかして、そういうのを待ってないかな？」

「うっ……」

「やっぱりね。翔司くん、キミはいつもそうだ。まず自分から動こうとしてない。誰かにアドバイスもらってからでないと動かない」

「そ、そう……かも……」

「僕はキミに会ってからまだ1ヶ月くらいしか経ってないけど、ずっとそんな感じじゃそう思わざるを得ないよ」

「……」

苦虫を噛み潰したような顔でマスターの苦言を受ける翔司。完全



に当たっているだけに反論が出来ない。

それでもなんとか、搾り出すように言葉を発する。

「た……確かにオレはそうだったかも知れない。認めるよ……。わかった。もう誰のアドバイスも受けない。オレはオレなりに、決着をつける」

「わははは、もっともらしく聞こえるね。よろしい、その答えは翔司くん、キミ自身の答えだよ。自信を持って振りかざせ！そして、キミなりに音遠ちゃんを振り返らせてみせる！」

「そうですね！ 私も応援いたします！」

この時ばかりは、優香も珍しく乗り気だった。

翔司はそんな2人に後押しされ、おもむろに携帯電話を取り出し、少し操作をする……が、本当に少しいじっただけで手を止めてしまった。

「あつちやく、オレ音遠ちゃんのアドレス知らなかったぜ」

「はあく、しっかりとしてくれよ。優香ちゃん、教えてやってくれなにか」

「お断りしますわ。せっかく森野さんが燃えていらっしやるのですもの。それに、アドレスを自力で聞きだすことが出来ないで、どうして森野さん自身の気持ちを伝えられるでしょうか？」

「そうだ、それもそうだ。おじさん一本取られちゃったよ。ハッハハハ！」

「……よし、わかんねーなら聞きに行くぜ。何のためにオレには足がついてるんだってこった。じゃ、またね！」

翔司はそう言うと、まだ半分ほど残っていたアイスコーヒーをそのままにして、足取りも軽くカフェをあとにした。

すっかり乗り慣れた自転車で街を散策する翔司。

……とそこで、見慣れた長身の青年がいた。紛れもない、圭輔だ。「あれ、あいつこんな所で何してんだろ」

圭輔の行動に興味を持った彼は、道の端に自転車を停めて遠くか

らこつそりと尾行を始めた。

……するとその隣から、音遠が出てきたではないか。人ごみの中だったため、長身の圭輔のみしか確認できなかったのだ。

翔司はいてもたってもいられず、2人の前に躍り出た。

「おー、翔司じゃないか。どした？」

「圭輔……。オ、オレと音遠ちゃんをかけて勝負しろ！」

「はあ？ ……ははくん、そういうことか。よし、乗った！」

圭輔は少し戸惑ったが、すぐに翔司の思惑に気づいてこっ返していた。

だが実際は、その場のテンションに任せて言い放ったことなので、思惑も何もあつたものではないのだが。

「で、勝負方法は？」

「そうだな……。お互いに自転車持つてるから、それで勝負するか」

「いいだろう。シユウを相手に何度も勝負をしたオレに勝てると思ふなよ！？」

「うるせー！ 勝つのはオレだ！」

「はうう、私はどうすればいいの？」

一人取り残された形の音遠をよそに、男2人はにらみ合う。

……だが圭輔は、初めから真面目に勝負を受ける気はなかった。

ここで彼が考えていた事は、『いかにしてわざとらしくなく翔司に勝ちを譲る事ができるか』だった。

## 第4章：Accidents

翌日……圭輔との音遠をかけた自転車レースに備えると言つ意味で、翔司は行きつけの自転車屋に向かった。

高校生の頃からここを利用して、この橋本自転車店はカフェに次ぐ居心地のよさを誇っていた。

「おお、しょーちゃん。らっしやい。今日はどうしたんでい？」

「おやつさん……。オレは一世一代の勝負を、こいつでする事になつたんだ……」

「……ぐうっつ！！ 若え！ 若えよしょーちゃん！ 青春してるねえ！ うちの娘もテニスで青春してっし、お父さんは嬉しくて嬉しくて……くう〜！！」

翔司の言葉に感極まつて男泣きを始める店主。

彼も、その光景はすでに見慣れてるらしく、全く動じていない。「それでな、おやつさん。オレはその勝負にどーしても勝ちたい！ そのためには念入りな整備が必要と考えたわけさ」

「そうかいそうかい……。よっしゃ、まかせな！ しょーちゃんのためにこいつを最高のコンディションに仕上げてやるぜ！」

「さっすがおやつさんだ！」

「お代はいらねえ、しょーちゃんが青春してるってんならそれで充分ってなもんよ！」

「お……おやつさん！」

「しょーちゃん！」

店の前で手を取り合う2人。傍から見たらあまりにも異様すぎる光景である。

「そんじゃこいつは任せな。最高の状態でお返しすつからよ！」

「ああ！ 楽しみにしてるよ！ それじゃっ！」

翔司はすっかりいい気分になって自転車屋をあとにする。

その道すがら、周りを気にしながら歩く少女とすれ違った。

「あつ、瑞奈ちゃん。ちゃーっす」  
「ふえっ!？ あ、翔司さん……。よかったあ。こ、こんばんはです……」  
「今日もテニスやってきたのか?」  
「それが……学級閉鎖になっちゃって……」  
「ああ、そう言えばさつきそんな話を優香さんとかから聞いたなあ。で? どこ行ってたの?」  
「えっとね、そのこのペット屋さん。本当は自宅待機なんだけど、どうしても我慢できなくて……」  
「なるほどね。だから変にキョロキョロしてたんだ」  
「はい……。誰かに見つかったらイヤだもん。翔司さんはどこ行ってたんですか?」  
「オレ? オレはね、その自転車屋に行ってたんだ」  
「……え? 自転車屋って、橋本自転車店?」  
「う、うん。そうだけど、それがどうかした?」  
「どうかしたじゃないですよ! そこ、わたしの家!」  
「な、なんだってー!?!? ってことはあのおやっさん、瑞奈ちゃんのお父さんだったのか?」  
「お父さん……また変な事したんじゃないか」  
「あ、いや、えっと……まあ、いいお父さんじゃないか」  
「そうだけど……涙もろくてやんなっちゃう」  
「あー、確かに……」  
「あの……。うちの店に来たってことは、やっぱり自転車直しに来た……んですよね」  
「うん。最高の状態で返してくれるって言った。今なら作業してるかもね」  
「ふ〜ん。どうして?」  
「それはな……。まだ秘密。時期が来たら教える」  
「むう、いじわる〜。……それじゃわたし、もう帰りますね。またカフェでね!」

「うん、そんじゃーね!」

一方その頃、同じように自転車レースを控えている圭輔は自分で自転車の整備をしていた。

しかし、その辺りの知識まで詳しくないせいか、どうにもはかどらない様子だった。

「……っはー、ダメだ。わかんねー。……シユウの奴に頼んでみつか」

独り言のように呟くと、携帯を取り出しどこかに連絡を取る。

「あん? 何だよ?」

「んだよそのぶつきらぼうな挨拶はよ。変わんねーな、お前も」

「うっせ。お前にだけは言われたくねー。……んで? 用はなんだよ?」

「自転車直して」

「……は?」

「いや、自転車直してって言うてるの」

「ちっ……。ったく、めんどくせーな。今どこにいんだよ? 行ってやるから待ってるよ」

「あ、今来てくれるの? 悪いなー。やっぱよー、お前ってホントいーい奴だよなー。めんどくせーとか言うけど最終的にはちゃんとやってくれるんだからなー。ハハハハ!」

「んだよ、気持ちわりーな。褒めたって何も出ねーぞ」

「わーってるわーってる。今カフェにいるよ。わりーなマジで」

「いーよ別に。断ってあとでグチグチ言われる方がめんどくせーかな。カフェだな? わかった、20分ほどで行けると思うから」

「おう、すまんな。頼むよ!」

そう言つと、電話の相手は一方的に通話を切ってしまった。

圭輔は整備中の自転車を、カフェの駐輪スペースに停めてから店内に戻る。

それから30分後、カフェに二人の客が来る。彼らは、圭輔と同じくらいの年齢であろうカップルだった。

「来たな、シュウ。芽衣ちゃんも久しぶり」

「圭輔くん、久しぶり！ 元気だった？」

「そりやもうこの通り」

「そいつは殺しても死なねーからよ、いつだって元気に決まってるあ」

シュウと呼ばれた青年……手塚周一と、芽衣と呼ばれた彼女……

上原芽衣は、恋人同士という関係を半年程度続けているカップルだ。両者ともにこのカフェの常連であり、マスターには特別な恩があった。

「久しぶりだねえ、二人とも。最近どうなの？」

「えっと……。どうって聞かれてもわかんないよ。周一もボクもいつも通り、かな？」

「まあ……。な。そんなもんだろ」

「そっかそっか。現状維持ならそれはそれでいいな。んじゃオーダ、何にします？」

「えっと……。じゃあ今日のおすすめとアメリカン、キリマンジャロとコロンビアのブレンドで」

「あ、ボクもそれで」

「かしこまりました」

マスターは二人の注文を聞くとすぐに厨房に引き返してゆく。店は閉店間際で、圭輔たち3人の他に客はいなかった。

「よお、シュウ」

「あん？」

「芽衣ちゃんと一緒にいたっばいのに、わざわざ呼んで悪かったな」

「あー、気にすんな。今日はずっとこいつの家にこもってたから、ちようど外に出たかったんだし」

そう言つと周一は、やや顔を赤らめながら傍らの少女に目をやる。「なるほどなあ。いいよなあ、帰れる家が複数あるって」

「なんだよ、羨ましいのか？」

「ちっ、ちげーよ！ そんなんじゃないよ、そんなんじゃない。ただな、よかったよな……って」

「……お前には感謝してるよ」

「な、なんだよ改まつちまつて」

「へっ、知らねーよ！ そんなつもりはねーしな」

「……よお芽衣ちゃん。あいつ、何か変なものでも食べたのか？」

「え？ いや、今日はずっとボクといたんだけど、ボクの作ったものは残さず食べてくれたよ」

「いや、そーゆー意味じゃなくって……。そして今日はずっと……。くうう〜」

「はい〜お待つとさん。本日のおすすめメニューとブレンド2つずつ、確かにお持ちしました」

「相変わらず早いな……」

「ま、他に何もしてなかったからね。ほれほれ、冷めないうちにどうぞ」

マスターのもてなしを素直に受ける周一と芽衣。

圭輔も、周一から少しもらうことでその味を堪能していた。

「食ってからでいいよ、自転車直すの」

「ん、了解」

「ん？ 自転車直すのかい？」

「ああ、そうそう。マスターにも言っておいたほうがいいな。なんか翔司のヤツにいきなりチャリ勝負申し込まれたからさ、受けて立とうと思って」

「へえ、そりゃまたどうい風吹き回しかね」

「それがさあ、音遠ちゃんをかけて、だって。オレがたまたまあの娘と一緒にいたからって勘違いしやがってさ。ほら、アイツ音遠ちゃんにお熱じゃん？」

「知らねーよそんなの。……その翔司ってのは、たまにお前の話題に上がるヘタレか？」

「そそ。ていうかお前がヘタレって言うな。確かにありやなっさけねーヤツだけど、いつぞやのお前よかマシだと思っぜ」

「ふーん……。んで、どうすんだよ？」

「それなんだけど……。正直オレと音遠ちゃんは何でもないから勝ったところで意味ないじゃん。だから、負けるつもり」

「負けるつもりと来たか。それじゃ、彼に勝ちを譲るんだな？」

「ああ。だけど、わざと負けたらアイツきつといい感じはしないと思う。だから、どーやったら自然な形で負けられるかねえ……。ってさつきから考えてるんだ」

「……。じゃこうしよう。ちよつと耳貸せ」

周一は圭輔の耳を取り、耳打ちを始める。いい案が思いついたのだろうか。

芽衣はというと、自分の分を食べ終わってしまつて暇をもてあましていたので、周一のコーヒーカーップにこっそりと砂糖を入れていた。

「てへへ、甘くしちゃえ」

満足するまで砂糖を入れ終わると、何食わぬ顔で自分のコーヒーにも砂糖を入れる。

周一のコーヒーは想像を絶する甘さになつてしまつただろう。

圭輔への耳打ちを終えた周一がそれを飲んだ途端、彼は咳き込んだ。

「……。ぐふあっ!？」

「きやはははっ ひっかかた〜!」

自分の思惑通りに事が運んだ芽衣は、素直に喜んだ。

周一のほうは、味が豹変してしまつたコーヒーを飲むのを止め、芽衣の頭を鷲掴みにしてこう言う。

「お前だろ。こんな事したの!」

「うん。だつて周一、甘いのが好きなんでしょ? いつも砂糖いっぱい入れてるじゃんか」

「それはインスタントだからだよバーカ。マスターのコーヒーは何



も入れないで飲みたいんだよ。こだわらなくてもんがあるんだよ」

「むにぃ、そんなの知らなかったもん。せつかく周一のために思っ  
てした事なのに……」

「ありがた迷惑って事もあるんだよ。覚えとけポケナスが」

「お、おいシユウ。ちよつと言いすぎじゃないか？」

「いいんだよ。こいつのいたずら癖は今に始まった事じゃないから、  
強く言うくらいでちょうどいいんだ」

「むにぃ……ごめんなさい……。これ、ボクが責任持って全部飲む  
から……」

さすがにやりすぎたと感じたか、芽衣はその大きな目を潤ませな  
がら周一のカップを手に取る。

しかし彼は、芽衣のその手を遮った。

「……いや、いい。半分ずつしよう、な？ 俺のためにしてくれた  
んだもん。それなのに俺って奴は……。俺が悪かったよ、言いつ  
ぎた。ごめん」

「周一……。ボクの方こそごめんね……。周一の気持ちもわからな  
いで……」

周一は、そんな芽衣をゆっくりと抱きしめる。隣に圭輔がいる事  
を知っている上で。

「……あ~~~~！！ 見せ付けてくれやがるなちつくしよー！ ね  
ーマスター、暖房効きすぎじゃねーの！？ クソ暑いんですけど！  
？」

「ん？ そんな事はないよ。ほい、設定温度18 だ。省エネで、  
地球に優しいHexagramでした」

「そーじゃなくて……。あーもういいや。オレにもコーヒーおかわ  
りちよーだい」

「はいよ。500万円ね」

「……サラ金行ってくる」

「行ってらっしゃい。むしろ逝ってらっしゃい」

「……いや、誰か止めるよ！ 店出そうになっちゃったじゃんか！」

「じゃあ言つてよ。どこまでボケていいかわからないじゃないか」  
「きやははっ！ 相変わらずだね〜マスターって」

Hexagramが閉店した後、圭輔たちは店の前で自転車の整備を始めていた。

マスターは気を利かせて、店の前の電気は消さずにいた。

「……おい圭輔。お前いつたいたいどんな事したのさ？」

「え？ いや、オレなりにやってみただけだよ」

「充分な知識もねーのに変な事してんなよ。……ま、こんくらいならいいけどさ」

「わりーわりー」

二、三文句を言いながらも、周一は圭輔の自転車を直してゆく。そして10分後……。

「……よし、こんなもんでいいだろ。乗ってみろ」

周一に促されるまま、圭輔は自転車に乗り込みペダルに足を乗せる。

……だが、なかなかペダルは動こうとはしなかった。

「あれ？ ペダル重そうだよ？ ねえ周一、アレでいいの？」

「いいんだよ。翔司って奴がどれだけ自転車乗り慣れてるか知らねーけどさ、いくら何でもあの速度には負けねーだろ」

「えー？ それじゃ圭輔くん負けちゃうじゃんか」

「さっきの話聞いてなかったのかよ？ あいつは翔司って奴に勝たせたいんだよ。でもわざと負けるときつといい気分しねーだろうから、全力でやって負けるようにしてくれってことなんだ」

「今日ボクたちを呼んだのはそのためだったの？」

「お前は呼んでないけどな。まあ、そう頼まれたから俺はあのチャリのペダル重くしたの。ほれ、圭輔見てみる。あいつ、あれで全力でペダルこいでるんだぜ」

「ほんとだ。でも遅いね、やっぱ」

そこに、試運転を終えた圭輔が肩で息をしながら戻ってくる。

「はあ……はあ……。な、ナイスだぜシュウ……。こ、これなら大丈夫だ……」

すっかり息を切らしていた圭輔は、若干汗ばんでもいた。

「そうか？ ま、せいぜい頑張つてバレないようにしろや。勝負終わったらまた呼べや。それ、元に戻してやつからよ」

「そりゃそーだ。終わってまでこんな調子だったらどこにも行けねーや」

「……ね、もう帰る？ 終わったんでしょ？」

「おう、そうだな。……じゃ圭輔、俺ら帰るわ。マスターにも言つといてな」

「おうよ、ありがとさん！ ……へへっ、仲良くな、お二人さん」  
「……けっ、うっせーよ」

やや照れながら、周一は芽衣を自転車の後ろに乗せてあつという間にいなくなつてしまった。

勝負の時は、いよいよ近づいていた。

あくる日、やはりこの日も開店と同時にカフェにいた翔司は、マスターに話した。

「マスター……。オレ、今日自転車レースするつもりだ。圭輔もそれでいいって」

「そうか、今日か。圭輔くんから聞いたよ、音遠ちゃんを賭けてやるんだって？」

「そうそう。オレが負けたらあの子のことはあきらめる。初っから縁がなかったってこつた」

「ふ〜ん。ま、店に迷惑かけなきゃ何したっていいから。せいぜい頑張つてね」

「オレは負けねえ！ おやっさんが汗水たらして整備してくれたんだからな！」

「おやっさん……ねえ。僕もいつかマスターじゃなくておやっさんとか呼ばれたりして」

そのようにとりとめのない話をしていると、日曜と言つ事もあつてか見知つた客もそうでない客も続々と店内に集結してきた。

「おー、忙しくなりそうだ。そんじゃごゆっくり」

その瞬間、マスターは仕事人になっていた。

次々と店内の座席が埋まる中、翔司たち常連組はテーブルを寄せ集めて一ヶ所に固まっていた。

メンバーは絵実梨、果緒梨の姉妹、クリス、みさき、優香に瑞奈、海斗、そして翔司。総勢8人の大所帯だ。

「うーん、翔司さん！　なんか立場悪いでっすよね」

「ん？　そうかね？」

「なーに？　まさかアタシがいるからってそんな事言ってるんじゃないわよねー！？」

「んな事ねーでっすけど……、ほら、男ってオレっちと翔司さんしかいねーじゃないでっすか」

「確かにそうね。でも人数とか、そんなの関係くない？　何びびってんのさ、いつもの海斗じゃないよ？」

「そ、そうかな……？」

「そうだよ。いつも顔合わせてるんだから、そんな萎縮する必要ないよ」

「絵実梨さん……、やさしーでっすね……。お、オレっちは……！」

「わー、わー！　えみりのおねーちゃんがこくはくされます！　かいとくんにこくはくされます！　スキヤンダルです！　盗撮です！」

「え〜？　ダメよ。私と海斗くんじゃ年が離れすぎだも〜ん」

「そーそー。あたしと同じ年の人をお義兄さんとか呼びたくないし」

「ち……ちが……」

「よーお。盛り上がってんなー。ちよつくら俺も混ぜてくんな」

「と……灯輝さ〜ん！　お、オレっちを助けてくれでっす〜！」

海斗は、頼れる兄貴分・灯輝が来た事で立ち上がって彼に助けを求めた。

しかし灯輝は状況がつかめず、困惑するばかりだ。

「は？ なんなの？」

「あんま相手にしちゃダメよー弟くん。ほれ、ここ座って？」

「ん？ おお、サンキュ」

そう言つとみさきは、先ほどまで海斗が座っていたはずの自分の隣の席に灯輝を座らせる。

「悪いね、みさきさん」

「もー、さん付けなんかしないでいいわよつての。そんでそんで？ 音遠ちゃんは一緒じゃないの？」

「姉貴？ いや、今日は一緒じゃない。でももうすぐ来るんじゃないかな」

「……聞いた？ 翔司。ほら、迎えに行きなさいよ」

「そうだな。んじゃ行ってくる」

みさきに半ば強引に促された翔司は、ゆつくりとカフェをあとにした。

「みさきの奴、ある意味気を利かせてくれたんだな？ でも、こんな風に他人のおせっかいを甘んじて受けるオレのがダメなのかもな……」

複雑な気分のまま、翔司は周囲を探す。すると、長身の青年が視界に入ってきた。

「お、あれは圭輔？ ……つて、隣にいるのやっぱ音遠ちゃんじゃねーか！」

彼の目は、さながら獲物を狙う鷹を思わせるように鋭くなっていた。

その目に映った光景は、自転車を押しながら話をする圭輔と、その話を楽しそうに対応している音遠の姿であった。

傍から見たら普通のカップルであるその光景に、翔司は自分の中で何かが崩れ落ちるような錯覚を受ける。

それでも、なんとか平静を保ちながらゆつくり二人に近づいてゆ

くのだった。

「ん、あれ？ 翔司だ。おーい！ こっちこっちー！」

「お、おう。圭輔に音遠ちゃん。どうしたの？」

「さっきそこで偶然会ったんだよ。な、音遠ちゃん？」

「うん！」

「そーゆーこつた。あんだすたん？」

「そつか。……で、圭輔よ。そいつの調子はどうだよ？」

「こいつか……。勝負の時までのお楽しみだ」

「へっ、なるほどな。……言っとくけど、オレは負ける気はないからな」

「へへへ、口だけならいくらでも大きなことと言えるよな、負け犬くん？」

「……くはーっ、口の減らねー奴だ。……じゃともかくカフェ行こうぜ、みんな待ってるよ」

「お、みんないるのか？ へへ、ギャラリーは多けりや多いほどいいよな」

歩きながら話しているうちに、3人はいつの間にかカフェの前に立っていた。

「こんちわーっ！」

「お、主賓たちのご到着だね」

「……あっ、なんか正月以来じゃん？ みんながこーして集まるのっつて」

「そうみたい。そこで初めて翔司さんと知り合っただよな」

「その翔司くんが、今度は圭輔くんとチャリ勝負ってことか。なんっつーか、成長したなあ」

「ミーはわくわくしてきたです！ しょうじさんとけいすけさんの、肉湧き血踊るデキレースが始まるです！ わくわく」

「クリスさん、正しくは『血湧き肉踊る』ですわ。そして、出来レースでは八百長になってしまいます」

(……おいおい、ビビらせんなよクリスちゃん……)

「圭輔さん、どうしたんですか？ 顔色悪いでっすよ？」

「気にするな、オレはいつでもこの顔色だ。……んーじゃ改めてみんなに告げようか。ほれ、注目！」

圭輔は人差し指を立て、自分に注目するように呼びかけた。

「今からオレと翔司は自転車によるレースを始める。ルールは簡単だ。このカフェからスタートして駅前の商店街に出て、またここに戻ってくる」

「ルールは？」

「モラルに任せる。ともかく先に駅を通り過ぎてカフェに戻ってきた方の勝ちだ」

そのルールは、圭輔の考えた保険であった。

自転車のペダルを重くして、さらにわざと遠回りのルートを通ればより確実に翔司に勝ちを譲れると思つての決定だった。

「以上！ 異存はないな、翔司？」

「ああ。正々堂々と勝負しよう」

「もちろんだ。……ほれ」

そう言いながら圭輔は右手を差し出す。翔司も彼の動きに合わせて右手を出す。そこに繋がったその手は、どちらともなく離れていった。

「あーちよつと」

そこにマスターが声をかけてきた。皆、何事かとマスターの方を向く。

「レースするんならタイム計るでしょ？ よかつたらこれ使いなよ」

マスターは、何故かエプロンのポケットからストップウォッチを取り出し、圭輔に投げ渡す。

「そんじゃま、怪我しない程度に頑張つてね。あ、会計はお忘れなく」

全員がカフェの店先に集まり、二人の勝負を今か今かと待っている。否応なしに緊張感が張り詰める。

「そんじゃ二人とも、準備はいい？ いいならスタートするけど？」

ストップウォッチを持ったみさきが、二人に声をかける。いよいよスタートが近づいてきた。

（オレは負けない……！ 音遠ちゃんの……ために！）

（オレは勝たない……。スタート直後コケてみつか？）

それぞれの思惑が渦巻く中、ついにその声は響いた。

「よ……い、スタートっ……！」

みさきのスタートの合図と共に、一直線に駆け抜けた翔司とは対照的に、圭輔はいきなり自転車を倒してしまっていた。

それを起き上がらせるも、今度は鍵をかけたままでいたため、彼がスタートした頃にはもう翔司の姿は見えなかった。

「何やってんでっすか圭輔さん！？ 遅れまくりでっすよ！？」

「秋野さんらからぬミスですわね……。もしや、わざと負けようとしているのでは……？」

優香が何気なく言い放った言葉は、圭輔の考えと完全に一致していた。

しかしこの時点では、圭輔以外にはわかっていないはずだ。

「としたら、強ちクリスさんの言った出来レースも間違いではないのかも知れないわ」

「お姉様、鋭いっ！ きつとそうですよ！」

「どうかな？ あの慌てようも演技だったら凄いよ？」

「わかんねーでっす。圭輔さんは底が見えねー男でっすから」

「なーにわかったようなこと言ってるのよバ海斗。アイツにそんな考えあるわけないじゃないのよ」

「がっ……。またバカって言われたし……」

「……っーか音遠ちゃん。アイツらアンタを賭けてやってんだけど、そのことわかってんの？」

「ほえ？ 私を賭けて……って？ あっ、こないだたまたま圭輔くんと歩いてた時、翔司くんそういふ感じのこと言ってたかも……」



「……はあ、そんなこつたるーと思つたわ。で？ 音遠ちゃん自身はどーなの？」

「どう……つて？」

「勝つた方と付き合わなきゃなんないのよ、極端な事言つと。その辺分かつてる？」

「えっ……？ そ、そうなの……？ あう……。私、今初めて知つたう……」

「へっ！？ ちょ、ちょっとどうすんのそれ！？ 音遠さん、それでーの！？ ねえ？」

「……わかんないよ」

「わかんないじゃないよ。翔司くんも圭輔くんも必死だよ？」

「あう……でも……」

「……よいではありませんか。その事は。今はお二方の勝負を楽しみましょう。決めるのは終わつてからでも遅くはありませんので」  
自分の言葉が発端になつたにも関わらず、それを柵に上げてまとめてしまった優香。

しかし、誰もその行動に気づく事はなかった。

「それに、結局は音遠ちゃんの意味が尊重されますから」

「うん……」

「さすがお姉様！ シビれますっ！」

そこまで話が進んだ頃、ようやく圭輔は次の曲がり角に差し掛かっていた。

一方その頃の翔司は、自転車屋に整備してもらつたばかりの愛車を軽快かつ豪快に飛ばしていた。

カフェから徒歩で15分はかかる駅に、なんと5分で到着していたのだ。

（よし……。圭輔はまだ来てない！ オレの勝ちだ！ これでようやく音遠ちゃんを……。よっしゃー！）

もと来た道を引き返そうと、自転車を大きく傾けてUターンを試

みる翔司。

しかし、その速度はほとんど落ちていなかったために、一時的にコントロールを失う。

「うおっ、やべっ!」

翔司は大慌てで何とかハンドルをニュートラルの位置に戻そうとするも、逆効果であった。

……その刹那、彼の目の前は真っ暗になった。

その事を知らず、重いペダルを一生懸命こぎ続ける圭輔。

息も絶え絶えになった頃、電信柱の脇に倒れている青年の姿を確認してしまった。

「……っ! 翔司!」

そのただならぬ様子を見た圭輔は、重い自転車を飛び降りて翔司のもとに駆け寄る。

「翔司! 翔司! おい! 大丈夫かよ!」

「……圭輔……か……? へへっ、ドジっちまった……」

「大丈夫か? どこが痛むんだ?」

「なにやってんだよ……圭輔……。今がチャンスだぜ……?」

「今はそれどころじゃねーだろ! 待つてる、今救急車呼ぶからよ」

「そんな事……してくれなくていい……。こんな事で三面記事飾りたく……ねえよ……」

「バカヤロー!! 何言ってるんだよ! こんな時に体裁なんか気にしてんじゃねー!」

「……」

「翔司!? おい!」

頬を叩いて呼びかけるも、返事はない。圭輔の声は、届かない。

「……」

彼は無言のまま、傷つき倒れた親友を無理のない体勢にする。

そして、携帯で事故があった事を119番し、その後にカフェで待つ友人達にも告げる。

「…………あ、電話だ。…………圭輔くん？ なんたる」

圭輔の電話を受けたのは灯輝だった。いつもの調子で対応するが、その後告げられた事実には徐々に声を荒げた。

「…………なんだって！？ 翔司くんが！？」

突然言い渡された事。それは、翔司が事故に遭い意識を失ってしまっただという事実。

「わかった。ありがとう。…………そんなじゃ」

「圭輔、なんだって？」

「やべえぜ…………翔司くんが事故つたらしい。呼んでも返事がないぞうだ」

「…………！」

灯輝は静かな声で全員に告げると、周囲はたちまちどよめきに包まれる。

…………混乱しつつあるその場を制したのは、優香だった。

「皆さん、落ち着いて下さい。ともかく、ここで慌てても始まりません。事故現場に向かいましょう」

その言葉に、一同はだいぶ落ち着きを取り戻す。

「…………ですが、この大人数で行っても意味はありません。3、4人で行きましょうか」

「そうね…………。じゃ、アタシはここで待ってるわ。そのかわりこっちでアイツからの連絡を受けるよ」

「承知しました。提案した私は行きますが…………瑞奈、あなたはついてきてはなりません。足手まといになるだけです」

「はい…………」

「…………オレっちも行かせて下さい、優香さん！」

「分かりました。海斗さんも行く…………と。他には？」

「俺が行こうか。男手は多いほうがいいだろう？ な、海斗くん」

「はいっ！ お、オレっちも男でっす！ 男の中の男は…………こ、こんな状況でもビビったりしないものでっす！…」

「ふふ……。では、あとは音遠ちゃん、一緒に行きますか？」

「うん……。私のために、翔司くんが……」

「決まりだな。姉貴、俺の単車で行ったほうが早いから乗ってくれ。優香さんと海斗くんは悪いけど走るなりに頼む」

「……。そんじゃ、行かないみんなはカフェに戻ろ？ マスターにも教えたほうがいいし」

「みさきさん、そちらはお任せしましたわ。……では海斗さん、私達も行きましょう」

「は、はいっ！」

「そんじゃ優香さん、俺らは先に向かうよ。……くれぐれも事故とか起こしてくれるなよ」

「ええ。お互いに……ですわね」

翔司のもとに向かおうとする優香、海斗、灯輝、音遠。

他のメンバーはカフェに戻り、マスターに事の顛末を伝える。

「……。そうか……。救急車は？」

「圭輔が呼んだって。今、お嬢たちも向かったわ」

「くっ……。こんな事ならやめさせればよかった……！」

「マスターのせいじゃないよ。事故なんて予想できるわけないもん」

「えと……。しょうじさんは大丈夫……です？」

「大丈夫よ、クリス。心配しちゃダメ。翔司さんはきっと大丈夫。ね？ 信じていれば……」

「かおりちゃん……。はいです、ミーはしょうじさんが大丈夫と思うです」

「ともかく、今はヘタに動かない方がいい。もし万が一の事になつたとしても慌てちゃダメだ、わかったね？」

「うん」

「……待ってな、今心が落ち着くハーブティー淹れるから。……メリッサのストックどこだっけ？」

「……翔司い……。目え開けてくれよ……」

連絡を回してから5分後、まだ誰も到着していない。

その間、翔司はずっと目を閉じたままだ。

もちろん息はしているものの、圭輔は気が気ではなかった。

その時……。

「……圭輔くん！ 来たぜ」

「灯輝くんか！ それに……音遠ちゃんも……！」

「翔司くんは……大丈夫なの？」

「……」

返事の代わりに、翔司の方に向き直る圭輔。

その姿を見てしまった音遠はうつむいてしまった。

「姉貴……。大丈夫だよ、そんなに落ち込むこたーねえよ」

元氣なくうつむいた姉の肩に手を置き、自分なりに励ます灯輝。

その行為に幾分か立ち直れた音遠は翔司の傍に近づき、しゃがみ

込んで彼の顔を覗き込む。

「翔司くん……痛いのか？」

「……ごめんよ。オレが勝負するって言ったからこいつは……！」

「うつん、違う。悪いとか悪くないとか関係ないよ。……あっ、優

香ちゃんたちだ」

音遠の視線には、優香と海斗がいた。

彼らはどうやら全力で走ってきたようで、2人とも息が少し上が

っていた。

「はぁ……はぁ……。や、やっと着いたでっす……」

「……ふう。皆さん、遅れて申し訳ございません。森野さんのご様

子はいかがでしょう？」

「あっちだ。……息はあるけど、気を失ってるみたいだ」

「救急車は呼んだでっすか？」

「もちろん。そろそろ来るはずだ。……ほら、サイレンの音が近づ

いてきた」

圭輔の言う通り、徐々にサイレンの音が大きくなってゆく。

そして程なくして救急隊員が駆けつけ、あっという間に翔司を搬送していった。

「……………」

「ともかく、カフェに戻るか……………」

カフェに戻った一行は、みな沈痛な面持ちであった。

「お帰り……………」はあ、さんざんだわね……………」

「ああ……………」

「で？ 翔司くんのケガの具合は説明してもらったの？」

「ええ…………」。骨の損傷はないものの、腕や脚を強打したようですね。全治3週間程度、と仰ってました」

「そうか…………」。とりあえず今日はゆっくり休ませてあげよう。お見舞いとかに行くのは明日以降だ。いいな？」

「わかってるよ……………」

みさきの手にはまだストップウォッチが握られていた。止まる事のないデジタルな数字が、事故をより現実的にする。

……………そのストップウォッチは、自転車レースの開始から2時間が経過した事を表していた。

「……………はっ、ここは!？」

病院のベッドに寝ていた翔司は不意に目覚めた。

わけもわからず周囲を見渡すことで、ようやく自分の置かれている状況を把握する事が出来ていた。

「あ……………、オレ、ドジって事故っちまったんだっけ……………。ははっ、カッコわりー。これで音遠ちゃんも完全に終わったな……………。寝よ。半ばやさぐれたように、再び目を閉じた翔司。

しかし言葉とは裏腹に、彼の心の中は先ほどの後悔で満たされていた。

（くそ……………、くそっ！ 何でオレは……………こんな時に事故ったりする

んだよ……！ 自分がほとほと嫌になるぜ……！ ちつくしょく！  
！）  
少しずつ頬を伝う涙は、白い枕に染み込んでゆく。  
病院の夜は早く、長い。

皆が寝静まった頃、音遠はまたも腕に傷を増やしていた。  
……だがこの行為は、自分でも予想していない事だった。  
彼女はとめどなく流れる赤い血を見て、脱力する。

「はっ……、私、また切ってる……。どうして……？ もう切らな  
いって決めたのに……」

今までと違う。今回は傷口が激しく痛む。

吹き出す血は、止まらない。

「やだ……、やだよお……！ 止まって……止まってよ……。えぐ  
う……」

泣きじやくりながら洗面所に向かい、タオルを水に浸す。

濡らしたタオルを出血箇所当てて、なんとか血を止める。

だが、使用したタオルは真紅に染まり、ごまかしがきかない。

この時彼女は誓った。『もう絶対にこの行為をしない』と。

翔司が入院して数日が経ち、彼もようやく立って歩けるようにな  
った。

医師も、彼の回復力には舌を巻いているようで、早ければ来週に  
は退院できるとの事だ。

今は昼時、病院にも昼食の時間がやってきた。

「ちえーっ、まだこんな病人食なのかよ。あゝあ、かーさんやマ  
スターの味が懐かしいな」

文句を言いながらも、出された食事に手をつけてゆく。

食事を終えた後は、いつものように読書を始める。

読んでいるのは、彼の趣味である書店巡りをしていた際に見つけたライトノベル『ぴゅあとら!』。

ひよんな事から付き合いを始めたとある二人。

数日付き合いを続けていたある日、彼女は彼を見つけて声をかけたら、それは彼によく似た別人であった。

付き合っている彼に酷似したもう一人の人物により、彼女の心は揺れ動く。

……といったよくあるストーリーに、単純な翔司はすっかり夢中になってしまったのだ。

「あ、そー言えばこの女の子も音遠って名前なんだなあ。そんなに珍しくないのかな? あの名前って」

そんなことを考えながらだけだるい午後を過ごしていると、不意に彼の病室のドアがノックされた。

「ん? なんだろ、問診かな? はいはい……っ」と

足を引きずりながらドアに向かうと、彼がドアを開ける前に先に開けられてしまった。

そこに現れたのは、みさきだった。

「ハイ、翔司!」

「み、みさき! わざわざ来てくれたんだ」

「もつちろんよ! ホントはねー、もつと早くに来てあげたかったんだけど、ほら、学校でテストあったのよー」

「テストか、そりゃ大変だ」

「でも、それも終わって今春休みだからヒマになってね」

「へえ、大学ってもう春休み入っちゃうんだ。あ、そこ座りなよ」

「ありがと。ほい、これおみやげ」

「みやげ? ……なんだろ、開けていい?」

「どーぞどーぞ」

みさきから何かを手渡された翔司は、その中を見ている。その中



身は、先ほどまで彼が読んでいた『ぴゅあとら!』の新刊だった。

「うおっ! これって『ぴゅあとら!』の新しいのじゃん! そっか、こないだ出たんだっけか……」

「圭輔のヤツに聞いたわよ、アンタこのタイトルが好きなのよね? それにしても表紙が必要以上にかわいいわねー、これ」

「そう! オレこのイラストレーターさんも好きなんだよ!」

「あー、それはどうでもいい。ジャケ買いはアタシの性に合わないし」

みさきは着ていたコートを脱ぎながら、彼への見舞い品について語る。

「アタシも学部が学部だし、ちつとは活字読まなきゃダメかなーっと思うから最近読んでるのよ。でも圭輔のヤツ、そーゆーラノベしか持ってなくてさ」

「ラノベのどこがダメなんだよ!? ちゃんとした物語じゃんかよ!」

「わーかってるわよ。アイツに見してもらって考えを改めたわ。…

…ね、その前の巻、あるんなら見してくんない?」

「ん、いいよ。ほい、これ」

「ありがと。つか、貸して。ここで読んだら長居しちゃいそーで迷惑じゃん?」

「ん、オレは別にいいんだけど、みさきがそう思うんならそれでいいよ」

「じゃ借りとくわ。でさ、いつごろ退院できそう?」

「さあね。早ければ来週とかって聞いたけど」

「あら、よかったじゃん! ……じゃあ、そろそろ動かないとダメじゃん?」

「何のこと?」

「……アタシの口から言わせる気? ったく。音遠ちゃんの事よ! どーすんの?」

「どーすんのも何もオレ、あの勝負に負けちゃったしさ……」

「それはもう忘れなさい。あんなの無効試合よ」

「そうかも知れないけど……、圭輔は……」

「圭輔？ アイツはね、ホントはわざと負けるつもりだったのよ」

「なに……！？ そう……だったのか？」

「うん。シュウ……あ、うちの友達にシュウって奴がいるんだけど、そいつに頼んでペダルを重くしてもらったんだって」

みさきは、先日の勝負において圭輔がどんな気持ちで望んだかを明かした。

「それに、ルートをモラルに任せるってのも。不自然だとか思わなかった？ フツーさ、ルートを任せるなんてありえないじゃん。駅に誰かいたわけでもないし」

「言われてみれば……確かに不自然だ。こっちもやるうと思えばズルとかできたんだからな」

「アイツは、どうしたらアンタに不信感を抱かせずに自分が負けられるかってのを考えてたの。その結果が、アレなの。全ては、アンタと音遠ちゃんをくつつけようとして。わかる？」

「圭輔……。何でそこまで……」

「何でって、アンタがいつまでも動かないからじゃん！ そんな事もわかんないの！？ たまには自分で行動を起こしなさいよ！ 他人からアドバイスもらうのを待たないで！」

「……！」

「まったく、アンタってホントダメよね。ダメ男よね。男として最低よ。まだ海斗の方がマシね。……病院内だからあんまりヒドいこと言わないけどさ」

（充分言ってるじゃんか……。それ以前に、ダメ男や最低よりも酷い言い方なんてあるとですか……）

心の中でそう思っても口には出せない翔司であった。

みさきは幾分口調を穏やかにして続ける。

「そうそう、これ聞いた？」

「何？」

「音遠ちゃんのこと。あの子、またやつちやっただって」

「えっ……！？ リストカットか！？」

「そうよ。それが今度は自分でもわけわからなかったらしくて、切りどころが悪くて……」

「で？ それでどうなったんだよ！？」

「……思い通りの反応するのねアンタって。安心しなさいよ、取り返しの付かない事にはなっていないから。むしろ喜ぶべきかもね。…もう二度と切らないって」

「ホントか！？」

「う、うん。ほら、いつだったかちなみ先生の家にあの子が泊まったって言ってたじゃん。それから切らないっていうか、切れなかったんだって」

「そうだったのか……」

「でも……今回は切りどころ悪くてしばらく血が止まらなくなっただらしいのよ。誰かに振り向いて欲しいって意味で切ったのに自分を深く傷つけちゃったから、もう切らないんだって」

「そうか……。これでひとつ問題は解決したかな」

「そうね、そうだといいわね。……あとはアンタの仕事よ。あの子の壊れた心のパズルを組めるのは、現状ではアンタだけ。アンタがあの子の事を本当に案じているんならできるはず」

みさきは、翔司の肩に手を置きながら彼の目をまっすぐに見つめる。

「アンタの持ちうる全ての優しさで……包んであげなさいよね。傷ついた心を癒せるのは、まっすぐな優しさだけなんだから……」

「みさき……。ああ、わかってる。オレも……そういうのは痛いほど良くわかってるから」

「……ありがとう。じゃあそろそろ帰るわね。これ、借りてくわよ。読み終わったら返すわ。んじゃねー！」

「ああ、ありがとな！」

意外にも控えめにドアを閉めて帰ってゆくみさき。病室は再び静

寂に包まれる。

(早く退院しなきゃ……。音遠ちゃんを救えるのは、オレしかいねーんだから……！)

そんな事を考えながら、彼はみさきの持ってきた『ぴゅあとら！』の新聞に目を通すのだった。

またあくる日、Hexagramに一人の客がやってくる。

以前にこの店の店員として働いていた少女、音遠だ。

「いらっしやい」

「こんにちは……」

「珍しいね、今日は一人なんだ」

「うん。……みんなは？」

「まだ。もう春休み入ったんだっけ？　じゃあまだ寝てそうだねえ。

……たまにはここもオフにして休んだりしてみようかな？」

「そう……」

やや落ち着かない様子で、マスターを上目遣いで見つめる音遠。

マスターはそんな彼女の様子を察し、カウンターの奥にある自分専用の椅子に座りながら尋ねる。

「どうしちゃったかな？」

「うん……。マスター、翔司くんっていつ退院するかわかる？」

「わからないな」

「ぶう〜、冷たい……」

「あのねえ……。僕をスパコンか何かと勘違いしてないか？　いくら僕がキミらより余計に生きてるからって、誰がいつ退院するかわかるわけないよ」

「あつ……。そういつつもりで言ったんじゃないもん……」

「冗談だよ、冗談。ハツハハハ……。……で？」

「で？　って？」

「いや、どうしてキミが翔司くんの退院の日を知りたいのかな、っ

て思ってた」

「だって……、お友達だし……。それに、私のために怪我したようなものだし、心配なの……」

「ふうん、本当にそれだけ？」

「……え？ う、うん」

「そうかねえ……。ほれ、僕の目を見て、言っただらん？ 恥ずかしがらずに」

マスターは、目の高さを音遠に合わせていく。

その不思議な目の輝きに、ついに彼女は口を割った。

「うん……。もしかしたらただけだね。私、ほんのちよつとだけ翔司くんの事が気になってるのかも知れないの」

「……そうか。それはどうして？」

「えっと……どうしてだろう……。あうあう、わかんない」

「うん、それが答えだと思うな。まだわからなくていいんだ」

「そうなの？」

「……そっか。まだキミは恋とかした事がないんだな。だからその辺がよくわからないんだ」

「違うもん。私はお兄ちゃんに恋してるんだもん　早く逢いたい  
にゃあ……」

「だーからー、それは恋じゃないの。ただの憧れでしかないの！  
わかる？」

「あう……」

「同じ事を何度も言うのは嫌だから、もう言わないけどさ」  
「……」

「最初の話に戻るけど、音遠ちゃんさ、翔司くんの退院の日が知り  
たかったんだよね？」

「あ、うん」

「だったらさ、本人に聞くのが一番いいんじゃないかな？　ほら、  
自分の事を一番良くわかってるのは結局は自分なんだから」

「あっ、そっだよな！　あうう、私まだお見舞いに行っただけだった

う

「それじゃあなおさらだ。きつと向こうもキミに来て欲しいと思っ  
てるぞ」

「うん！ ありがとうマスター！ あとで行ってあげるね。あ、注  
文いいいかな？」

「そうだね、翔司くんも喜ぶよ。……そんじゃ何にします？」

「えっとねえ、『お姫さまのブランチ』とレモンティー！」

「かしこまりました」

音遠の注文を受けたマスターは椅子から降り、奥の厨房へと下が  
ってゆく。

その時、勢いよくカフェのドアが開けられたかと思うと、長身の  
青年が息を切らしながら音遠に近づいてきた。

彼は何かを決意したかのような目をしている。ここまで全力で駆  
けてきたのか、息も上がっていた。

「音遠ちゃん……。はあ……。はあ……。ここにいたのか……。はあ  
……。探したぜ……」

「ど、どうしたの圭輔くん？ 私にそんなに急ぎの用事があるの？」

「ああ……。すげー急用が……。はあ……。はあ……。ど、どござ  
しても言いたい事があるから、聞いて欲しいんだ……」

「わ、わかったよお。なあに？」

「いいか……。落ち着いて聞いてくれよ……。はあ……。はあ……。  
……オ、オレ、音遠ちゃんの事が……。好きだ……！」

## 第5章：Suddenly Confession

「なに……!?!?」

外から聞こえた、圭輔の突然の告白。

さしものマスターも、ここまでは予想していなかった。

彼はたまらず調理の手を止め、カウンターに出る。

そこには困惑した様子の音遠と、決意に満ちた目をした圭輔がいた。

「えっ……? やだ、ウソでしょ……?」

「ウソなもんか。嘘偽りでこんな事言ってたまるか。あの勝負は無効になったけど、オレが勝ってたら本当に告白するつもりだった。

だから、オレは本気なんだ、音遠ちゃん!!」

「あっ……」

(圭輔さんの心が読めない!? こんな事は初めてだ。いつたい、どんな思惑があるというのだ……? とりあえず、何か聞いてみよう)

「いきなりの告白なんてフェアじゃないな圭輔くん。キミらしくもない」

「何言っただよマスター! 『ここでくすぶってるのは似合わない』って前にオレに言ったじゃねーか! 少しは強引な事しなきゃやってらんねーよ!」

「確かに僕はそう言った。そして、人を好きになるのも自由であるとも思う。でも、そこから先は違うな。相手の気持ちも考えてあげないと。音遠ちゃん、どうなの?」

「あっ……。なんかわかんないけど……圭輔くん怖い……。そんな圭輔くん、やだ……」

「なるほど。今の強引なキミはイヤだそうだ」

「ふざけるな! オレは認めねーぞ! ……音遠ちゃん、それともオレ以外に誰かいるってのか!?!?」

「う……」

「どうなんだ!? 答えるよ!」

まるで人が変わってしまったかのように、音遠に詰め寄る圭輔。彼女は、弱々しくもようやく言葉を返す。

「……い……」

「ん?」

「……嫌い……。嫌い! そんな圭輔くんなんか、だいつ嫌い!」

「……そうかよ。やっぱオレ以外にいるわけだな。……おおかた翔司かその辺だろうけど。やめとけ、あんなダメ人間」

「……っ!?」

その言葉に、音遠は自分の耳を疑った。

親友であったはずの翔司に、こともあるうにダメ人間のレッテルを貼り付けた圭輔はなおも言葉の暴力を続ける。

「もしそうじゃなかったとしてもだ、灯輝くんじゃ実の姉弟だから犯罪だし、海斗は口だけだし、マスターだったら不倫だ、援交だ」

「……」

「消去法でいくとアレしかいねーんだよ。あのヘタレキングしかな! 大事な勝負だったのに自分の不注意で事故って入院だろ? は

っ、笑つちまわあ」

「それは言いすぎだ! 訂正するんだ!」

ここでマスターがついに圭輔に対して注意を行う。

だが彼は聞く耳を持たなかった。

「いやだね。オレは事実を言ったまでだ。正論を述べて何が悪いってんだ!? あんたならわかんだろうが!」

「くっ……」

「……圭輔くん、最低だよ……。みんなの事、そんな風に思ってたんだ……。そんな人に告白されたって、私は絶対イヤだからね!」

「じゃあどうするってんだよ! オレを最低って言うんなら、翔司なんかヘタレすぎて存在すらしてねーぞ!? それでもいいのかよ!」



「いいんだもん！ 翔司くんはあなたなんかよりずっとずっといい人なんだから！」

「じゃあ何かい。オレよかあいつの方が人間的に優れてるとも言いたいのかい」

「……そうよ。私、あなたなんかより翔司くんの方が何倍も好きだもん」

「へっ！ そーかよ！ じゃーさっさとあのバカのところに行けばいいじゃねーかよ！ オレみてーな最低な奴の近くにいたらそっちまで最低になっちまうぜ！？」

「言われなくたって行きます！ ……もう、顔も見たくない！！」  
心無い圭輔の言葉の暴力に窮した音遠は勢いよく立ち上がり、そのままカフェを出て行ってしまった。

その様子を見届けた圭輔は……急に表情を和らげて、へたり込むようにカウンターに突っ伏した。

「……っは、慣れないキャラ演じると疲れるわ……」

「ぬ……どういうことだ？ 今までのたまさか、演技だったのか？」

「マスター……、わかんなかったのか？ いつもだったらスイスイ当てちまうじゃんか」

「……いつもはね。でも何故か、今回だけはキミの心が読めなかった。キミがあまりにも突拍子もないことをやらかしたもんだから、動転していたのだろう」

「……へへっ、やっとマスターを超える事が出来たか。わかった、オレの真意を話すよ。あのな……」

圭輔はマスターに、自分の言動の真意を全て打ち明けた。

「……なるほど、そういう事か！ 圭輔くん、キミって奴は……」

「ほら、自転車レースがオジャンになっちまったじゃんか。それにアイツ、入院しちまったし……。これは完全に予想外だったぜ」

「確かにそうだ。僕だって予想できなかった」

「その間に音遠ちゃんがアイツのこと意識しなくなったらヤバイっ  
て思ったから、ちっと強引だったかもだけどあーゆー事するに至っ

たわけだよ」

「……………」

「それにな、みさきの奴もアイツに言ったんだと。自分でさっさと動け、オレの力を借りずに……………って。今動いちまったけど、これ以降動かなければいいんだし」

「そういう事が……………。大体わかった……………けど、今回はかりは少しやりすぎたと思うな。音遠ちゃんはね、今さっき自分から翔司くんのお見舞いに行く事を決めたんだよ」

「うっわマジかよ！ あっちゃん、また空気読めてないのかオレ」

「恐らくキミは、音遠ちゃんがいつまでも翔司くんのお見舞いに行かないからそれを懸念したんだと思うけど、それは取り越し苦労だったんだ」

「その通りだよ……………うっわ、オレってマジありえねーわ」

「……………それに、顔も見たくないって言われるほど嫌われようとした意図が読めない。果たして、そこまでする必要はあったのかな？」

「今思えば、あそこまでする必要はなかった。でも、慣れないキアラだったからついつい飛躍させすぎちゃった……………」

圭輔はそう言うと同時に、椅子から立ち上がる。

そして、窓ガラスから外を眺めて続けた。

「結果としてこうなっちまったのは仕方ない。オレの蒔いた種だしな。これである子が翔司といい関係になりさえすれば、オレはそれでいい」

「どうしてそこまで……………。キミって奴は、友達のためなら自分はどうなってもいいんだね」

「わかんねー。自分でもわかってないよ。つくづく損な性分だよな」

「それも個性として片付けられたらそれまでだけど……………。キミはそれでいいのか？」

「今のところは特に不自由感じてないから、いいと思う。……………自分にたかってる虫も払えないで、他人のおせっかい焼くなって感じだけどな。ははっ」

「……ま、形はどうあれ、これで音遠ちゃんが翔司くんに会いに行く事になったわけだ。ああそつだ、あの子の注文、どうするかな……。圭輔くん、代わりに食べる？」

「うん。元はと言えばオレの責任だし」

「……んじゃこれ。お姫さまのランチとレモンティー」

「うおつ！ 女の子しか注文できないメニューじゃん！ やったぜ」

「もちろん、代金はキミが払うんだぞ」

「へいへい。んじゃいったきまゝす！」

コンコン……コン。

控えめに響く、ノック音。

翔司は読みかけの本にしおりを挟み、ドアを開ける。

「はい……って、音遠ちゃん!？」

「こんにちは、翔司くん。……怪我の具合、どう？」

「ああ、もう大丈夫だよ。そんな事より、わざわざ来てくれたんだ?」

「……うん」

「ん? なんか様子変じゃね? なんかあった？」

「……あつ、違うの。そうじゃないの。ただ……」

「ただ？」

音遠は翔司に、先ほどの圭輔とのやり取りを説明した。

「なっ……!?!? あの野郎、音遠ちゃんになんてひでえ事を……!」

「でしょでしょ? もうビックリしちゃった。あんな人だとは思わなかつたう……」

「オレだつて予想外だぜ! ったくあんにやる……」

「もう顔も見たくないよ、あんな人」

「そつだそつだ、そつした方がいい」

「うん。……だからね、聞いて？ 翔司くん」  
「なに？」

「退院したら……一緒にどこか遊びに行こ？」

「え……え？ そ……それって、二人で、ってこと？」

「そっだよ？」

「ほ……ホントにいいのか！？ お……オレなんかと？」

「翔司くんだからいいんだよ……。それとも、翔司くんは私と行きたくないの？」

「な、なにをそんなバカな。もも、もちろん行きたいさあ。あー待ち遠しいなあ！ 早く退院してえなあ〜！」

「えへへ、早くそうなるといいね」

二人で遊ぶ約束を取り決めてからは、雑談を始めた。

当然の事ながらこの時点では、彼らは圭輔の考えに気づいていなかった。

そして3日後、翔司は晴れて病院を退院したのだった。

この報せは、すぐにカフェの仲間たちにも届いた。

「そう……か。今日退院したんだ。よかったなあ」

「ああ。病院に聞いてみたらそうだって聞かされてさ」

「で、本人がいないのはどうして？」

「もう少し様子見るとかじゃないの〜？ 家とかで〜」

「それもそーね。……っーか音遠ちゃんもいないじゃん。あの子ども行ったかわかる？」

「さあ？」

結局、この日は彼女の姿を見ることが出来なかった。

……ただ一人を除いては。

「翔司くん、退院おめでとう！」

「いやー、ははは。ありがとなーマジで」

同じ頃、翔司と音遠は病院の前にいた。3日前から毎日足繁く彼

の病室に通っていたため、詳しい退院日がわかっていったのだ。

「ね、これから出て出かけても大丈夫？」

「え？ うん……。やっぱいつペン家に戻るよ。親ももうすぐ来るし、荷物とか整理するから……」

「そうなんだ……。残念だ。一緒に遊びたかったのに……」

「ごめん。オレは別に大丈夫なんだけど、親がうるさいからさー。明日以降でもいい？」

「うん……。絶対だからね？ 約束してね？」

「わかったってば。何なら指きりでもする？」

「うんっ！」

そう言つと二人は、お互いの小指を絡めあう。

この小さな繋がり、後にさらに大きく、そして強いものへと変わっていく事は、この時点の二人には想像できなかった。

翌日、翔司は他の誰にも退院の事実を直接伝えないまま、音遠とともにオーシャンズオリエントへとやって来ていた。

「わーい！ 遊園地だう」

「ここだけ……。オレ最後に行ったのいつだっけ？ 中学ん時はめんどくさかったからシカトしたんだっけ」

「え？ もつたないなあ。私はね、お兄ちゃんといっぱいいっぱい遊んだんだよ」

「だってさあ、勝手に決められた班で行動しろって言われたんだぜ？ それにほら、オレって基本的にこーゆー所あんま好きじゃ……って、いけね！」

そこまで言つて、慌てて口を閉じた翔司。

しかし時すでに遅し、傍らの少女は目にはっぱいの涙を湛えていた。

「あつう……。どうしてそんな事言つ……。？ 私と来たのがイヤなの……？」

「だあああ！ ゴメン！ マジでゴメン音遠ちゃん！ 違うんだよ、ほら、アレだよ。気の合わない奴らと行ったから楽しくなかっただけで、音遠ちゃんとならすっげー楽しいんだよ！」

「くすん……。本当にそう思ってる？」

「思ってる！ すっげー思ってる！ だからもう泣かないで！ な？」

「……うん！ それじゃ行こっ！」

すっかり機嫌の直った音遠に腕を引かれながら、翔司は園内へと入ってゆく。

「うきやあ〜！ あれすつごお〜い！」

園内に入った途端、感嘆の声を上げる音遠。

彼女の興味を引いたのは、ここオーシャンズオリエントに新しくできたアトラクション『無限螺旋』。

上から一気に落下し、その勢いそのまま螺旋の道に入っていくといったものだ。

実は翔司は、こういったいわゆる絶叫系のアトラクションを苦手としていた。

そのため、眼前に広がる螺旋を描くコースを見た瞬間に恐怖を覚えるのだった。

「げ、ちよつとヤバいんじゃないの？」

「大丈夫だよ〜！ 翔司くん、怖いのか？」

「そ……そんなこと、な、ないよ。う、うん。いやー、ヤバい楽しそうだなー、あははは……」

必死に平静を装う翔司だが、額を流れる冷や汗を止める事まではできなかった。

「それじゃ、並ぼつ」

「……」

なすすべもなく列の後方に並ばされる翔司。

彼らは、これから2時間以上にも及ぶ待ち時間に耐えねばならな

かった。

並び始めて30分後、まだ前方は見えない。

そんな中、翔司は音遠の手に自分の手を近づけていった。

（こないだ……繋いでくれたんだし、指きりまでしたんだから、今も大丈夫……だよな？）

などと考えながら手を触れると、音遠は反射的に手を遠ざけてしまった。

「ひゃううー!？」

「あつ……。ご、ごめん……」

「あう……。今何しようとしたの?」

「いや……。手、繋ごうかな、って……。ダメだった?」

「ダメじゃないけど……。なにか言ってるよお。びっくりしちゃったう

……」

「ホントごめん。じゃ……。手、繋いでいい?」

「うん!」

ひと悶着あったが、翔司はようやく音遠と手を繋ぐ事ができた。

（来た来た来たあ〜! オレ、また一步前進できたぜ!）

一時間が経過して、ようやく列の半分まで来た程度だろうか。

先ほどからずっと手を繋ぎ続けていた二人だが、どちらともなく手を離す。

「……ははっ、ずっとつなぎっぱなしじゃ疲れちゃうな」

「そうだねー。……でも翔司くんの手、あつたかかったの。……こつちもあつたためてなの」

そう言いながら音遠は、先ほどまで繋がっていなかった左手を差し出す。

翔司はやや顔を赤らめながら、両手で彼女の冷え切った小さな手を包み込む。

「……どう? あつたかいかな?」

「うん、ありがとう……。すっごく嬉しいの」

「音遠ちゃん……。オレも、そう言ってもらえると嬉しいよ」

音遠の目を見ながら呆ける翔司。列が前に進んだのにも気づかず  
に。

「……はうう、翔司くん！ 前に進んだよ」

「おわっ、いつけねえ！ よし、行くか！」

「うんっ！」

握った手の片方を外した翔司は、音遠を引きながら前の列に追いつこうと駆け出した。

並び始めて一時間半。

いよいよアトラクションの入り口まで差し掛かり、お互いに緊張感を隠せないようだ。

「いよいよだね、翔司くん。私、ドキドキしてきちゃったにやあ」

「う……。そ、そうだね……。お、オレもいろんな意味でドキドキしてきたよ……」

喜色満面の音遠とは対照的に、少しずつ蒼白な顔へと変貌してゆく翔司。

しかし、この顔色が数分後に逆転する事になるうとは誰が予想しただろうか。

アトラクション入り口で二人は、注意事項を書き記したオブジェを目にした。

それを何気なく眺めると……『身長制限：150cm未満の方は危険なので乗る事ができません』という内容が書かれていたのだ。

「ふーん、150以下は乗っちゃダメね……。って厳しいなあ。つか音遠ちゃん、150ある？」

「あぐう……。私、そんなにないもん……。ヒール高い靴にしてくればよかつたう……」

「げ、マジで！？ ……だ、大丈夫だと思うよ、多分……。ほら、それと並んでみなよ。ほとんど同じじゃん。ギリギリセーフだって」



そんな会話をしていると、係員が音遠のもとに駆けつけてきた。  
「失礼ですがお客様、身長をそちらと比べさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「あつ……」  
しびしび係員の誘導に従い、文字通りオブジェと肩を並べる音遠。それには地面から150cmのところを目安となる線が引かれており、それより低かった場合は危険と判断しているようだ。

音遠はというと、ほんの2、3cmほどであったが、150cmには届いていなかった。

「……申し訳ございませんが、身長が規定のものに達していないよ  
うなので……」

係員から下される、非情なる判決。翔司はたまらず係員に食って掛かった。

「ちよつと待つてくださいよ！ ほんのちよつとじゃないですか！  
ほら、指の第一関節の分しか変わらないでしょ！？ ここまでオレ  
らがどれだけ待ったと思っただよ！？」

「ええ……。ですが、危険なので……。なにぶん、新しくできたア  
トラクションなので、どのような事態が起こるか私どもも把握しき  
れていないのが現状です……」

「そんなの知るかよ！ やってみなくちゃわかんねーじゃねーか！  
たったこれだけでいいか悪いか決まんのか！？ ええ！？」

「翔司くん、もういいよお……。あきらめようよお……。くすん……」

「ダメだよ！ 音遠ちゃん、これに乗りたかったんだろ！？ せっ  
かくこれだけの時間待ったのに、乗る直前で門前払いなんてバカバ  
カしすぎるぜ！」

「みゆ……」  
「……少々お待ちください」

翔司の気迫に気圧されたか、係員は奥に引っ込んでいった。上の  
者と話をつけに行ったのだろう。

「ふう……ふう……。つたく、こんな風に言わなきゃわかんねーのかよ!? マニュアル通りにしか動けねーとか最悪だな。人の気持ちとかなんて二の次なのかよ」

「翔司くん……。私のためにありがとね」

「いや、違う。確かに音遠ちゃんのためでもあるけど、あの態度にすげームカついたからさ」

「嬉しいの……」

翔司の腕に自分の腕を絡める音遠。その行為と同時に、彼女の胸は高鳴る。もちろん、翔司の心臓も張り裂けるほど活動するのだ。た。

それから数分後、ようやく戻ってきた係員が二人にこう告げた。

「先ほどは大変失礼いたしました。上の者と相談したところ、大丈夫との通達を受けましたので、これよりご案内いたします」

「や……。やったう〜！ わあ〜い！ きゃう」

「うわっ……。やったな音遠ちゃん!!」

嬉しさのあまり音遠は、翔司に勢いよく抱きついた。その行動は、かつて兄にしたものと全く同じものだった。

「……。いよいよだね」

「うん。私……。すっごくドキドキしてるの……」

「お、オレも……。これ、ホントに大丈夫なのか……?」

翔司の不安は、安全バーを下ろした時に最高潮へと上り詰めていた。

緊張の時。……そして次の瞬間！

「うおおっ!?!」

「きゃう〜」

一気に最高速度で動き始めたマシンは、最初の螺旋の道に差し掛かる。

どうやらこのアトラクションは、従来の上り坂を登ってから急降下するものとは異なり、スタート直後に最高速度に達するタイプの

ようだ。

満面の笑みを浮かべる音遠の横には、安全バーを必要以上に強く握り締めながら必死の形相をした翔司がいた。

「ノオオオオオオツ!!! た〜すけてくれ〜い!!!」

「うわあ〜い! 速いの〜」

「ホンギヤアアアアアアアア!!! 世界が、オレが回るうううう〜!!!」

「くるくる回るの〜 楽しいにや〜」

「どええええええええつ!!!?? また戻るのはかよおおおおおおおおおお!!!」

「きゃう〜 もつかいな〜」

「ウボアアアアアアアアアアアアアア!!! いつそ、いつそ殺してくれえええええええええ〜!!!」

「まだまだ終わらないでなの〜!!!」

「音遠ちゃん〜ん!!! 愛してる〜!!!」

「……ふええ? 今何て言ったの〜??」

「音遠ちゃんのためなら〜!!! 死ねる〜!!!」

「にゃう〜、聞こえないよ〜」

「お父様お母様、先立つ不幸を……お許し下さいiiiiiiii!!!」

「!!!!!!!!!!!!!!」

このように、彼らは全く対照的であった。

マシンが自然に動きを止めるまでの時間はほんの数分間であったが、翔司にとっては永遠にも等しい時間であったろう。

コースターを降りた翔司からは、覇気が全く感じられなかった。

全てが体内から抜け切っているような状態だった。

おかげで一人では歩く事もままならず、音遠に支えられながらようやくベンチに座る事ができた。

「みゆう……、大丈夫?」

「まだ……世界がぐるり回ってるよ……。ここは誰? オレはどこ

だ〜？」

「あうう〜、どうしたらいいの〜？」

「も……もちよい傍にいてくれれば……っつーかもう少し休めばなんとか……」

「ごめんねごめんね、私のために……。乗りたくもなかったのに乗っけてくれて」

「そんな事気にすんなって。それよりさ、次は何に乗りたい？」

「次？ う〜ん……。じゃあ次は楽なのがいいなあ」

「……待った。オレと音遠ちゃんの間が全然違っただけはさっきので痛感した。音遠ちゃんの楽なのってあーゆるーのでしょ？ きつと」

翔司が震える腕をなんとか上げて指差したものの、それは『レインフール』。

夏場は水上を突っ切る特徴的なアトラクションだが、秋冬には水を通らないコースになるため、何の変哲もない単なるジェットコースターに成り下がっている。

「違うよお。ホントに楽なものだよ。例えば……アレとか」

かたや音遠は、大きな船のような形をしたアトラクションを指差した。

大きく左右に振られるという、どこにでもあるようなものだ。彼女にとってはこれが『楽なもの』として存在しているらしい。

「……丁重にお断りさせていただきます」

「あうあう、これもダメなの〜？ つまんないう……」

結局、翔司がちゃんと動けるまでには20分ほどの時間を要したのだった。

「……よっし！ もう大丈夫だぜ音遠ちゃん！ って、あれえ？」

「すー……、すー……」

なんと、いつの間にか音遠は眠ってしまった。

「う〜ん……。悪い事しちゃったな……。寒くねーかな、上着でも

かけよっか」

翔司は、毛布代わりにと自分の着ていたジャケットを音遠にかけやる。しかしそれでも彼女は起きない。

（しっかしよく寝てるよな〜。……もしかして、こーんな事しても起きねーとか？）

何やらよからぬ想像をした翔司は、眠っている彼女の顔に自分の顔を近づけていった。

小さな寝息が顔にかかる、さらに興奮の度合いが高まる。

（いける！ いけるってオレ！ ちょいとばかり反則かも知れないけど、いつきま〜す！）

次の瞬間、彼は音遠の頬に口づけをした。

柔らかな感触が唇から全身へと伝わり、翔司は悦びの境地に達していた。

（や……やっちまったあああ！！ 音遠ちゃんにキス、しちまったぜええ！！ でも……まだ起きないんだな。……しゃんなる！ 男森野翔司、次行つてやるぜ！）

次に彼は、眠っている音遠の顔に正面から向き直る。

彼女はややうつむきながら寝ていたので、顔を多少持ち上げる必要があったのだが。

（寝てるって……。いけるって！ よ〜し……その瑞々しく輝く唇にキスを……っ）

ゆっくりと、自分の唇を近づけていく。

そして、ついにそれらは重なり合った……と同時に彼女を抱きしめた。

（やった……やった！ オレ……もつどうなってもいいぜ……！でももう少し……このままで……）

無抵抗の彼女の唇を奪い続ける翔司。

……だが、彼の願いもむなしく、口づけから数秒もしないうちに音遠は目覚めてしまった。

「うにゅ……？ ふあああっ……！」

「うわあおっ！」

半ば突き飛ばすように、翔司と距離をおく音遠。その目にははつきりと涙が浮かんでいた。

「えぐっ……。私の寝てる間に何したの……？」

「あ……。いや、その……」

「ひどいよ……。いきなりこんな事するなんて……。心の準備できてなかったのに……」

「ご……ごめん……」

「えぐ、えぐっ……。ふえええ〜ん……」

ついに泣き出してしまった音遠。

翔司に向けられるは、道行く人の冷たい視線だった。

「うわ……。うわあああ！……」

まるで汚いものを見るかのような、奇異の視線に耐える事ができなくなつた彼は、一目散にその場を去つてゆく。

残されたのは、望まぬ形でキスをされた哀れなる少女のみだ。

「なんで……言ってくれなかったの……？ 言ってくれたら……心の準備できたのに……」

慌ててその場を去つた翔司が向かったところは、見知ったカフェの中だった。

彼はいつの間にかコーヒーを注文しており、目の前にはいつもと変わらぬマスターもいた。

「……はっ、オレ何してたんだっけ……？」

「お、やっと目覚めたのかい？ 翔司くん」

「あっ、マスター……。そうだオレ、ここに来てたんだっけ……」

「そうそう、全速力でね。何かあったのかい？ 退院したての全速力は感心できないけどね」

「……はっ！！ 音遠ちゃんは！？」

「さあ？ 今日は見えてないよ。ここ最近も見えてないね。むしろ、僕らの方が知りたいくらいだ」

「え？ 僕らって他にもいるの？」

「いるじゃん。そっちのテーブルに」

と、マスターはあごでテーブルの方を指し示す。

そこには圭輔など、おなじみのメンバーが数名いた。

「よーお翔司！ 久しぶりだな、怪我の方はもういいの？」

「もー、心配かけないでよねー！ アタシ、マジで気が気じゃなかつたんだから！」

「ともかく、ご退院おめでとうございます。今後はあのような事のないよう、気をつけなさいね」

「翔司さ〜ん！ 事故のことお父さんに言ったら泣いちゃったんです。『オレのせいかー！？』って……。今度でいいから、顔見せてあげてくださいね」

「しょうじさん、おかえりなさいませです！ るけつとぱんちとか出せるようになったですか？」

「……どうだい？ みんな、キミの事を心配してたんだ。……圭輔くんがあの時、キミを連れ出したりしなかったら、今こうしてみんなに歓迎される事もなかったらうよ。感謝しろよ？」

「そうか……。みんな、心配かけて、本当にごめん！」

翔司は、カフェにいる仲間達にお礼の意味を込めて深々と頭を下げた。

「いいんだよ！ んな事しなくたって！ オレたち友達だろ？ そして、仲間だろ？」

「圭輔……！」

「ほれ、握手」

圭輔はそつと右手を翔司に差し出す。

翔司も彼の手を取ろうとしたが……ふと何かを思い出し、その手をはたいていた。

「痛っ！ いきなり何すんだ！」

「何すんだっててめえ、こないだ音遠ちゃんにひでーこと言っといでよくそんなヘラヘラしてられんな！？ 本人から聞いたぞ、ボロ

クソに言われたって！」

翔司は、圭輔の奇行を覚えていた。

自分より、音遠が傷つけられた事に対して怒りをあらわにしているようだ。

「おまけに、オレのこともさんざっぱらバカにしてくれたみてーじやねーか！ どういうつもりだ！？ 返答次第じゃただじゃおかねーぞー!?」

「あの事が……。ありや演技だ。お前のためを思って……。つい……」  
「またおせっかいか。いい加減そーゆーのウンザリなんだよ！ そんな押し売りみたいにしやがって。オレの事はオレでやるから、もう過剰な構い方すんじゃねえ！」

「……すまん。今回ばかりはオレもやりすぎたって思う。だから……すまん！ 悪かった！」

「圭輔……」

翔司の目の前で深々と頭を下げる圭輔。先ほど、翔司がやった事を模倣するかのよう。

「……もういいよ。オレも言いすぎたわ。頭上げてくれよ」

「ああ……。でもこれだけはわかってくれ。オレは本当にお前のためを思ってたんだ」

「わかってるよ。オレも実際、助けてくれーみたいなオーラを発してたから、きつとお前もそうしちゃったんだろーし。へへっ、やっぱオレってヘタレだよな」

「まあ、オレももーちつと空気読むようにするよ。……ところで音遠ちゃんは？ お前さ、さっきまで彼女と一緒にいたんじゃないかっただのか？」

「う……。そ……。それが……」

「ん？ 何か言いにくい事でもあるのか？」

「まあまあ二人とも。そんな所に立ってないでさ、そこ座りなよ」  
マスターの促すままに、二人は向かい合わせにテーブル席に座る。その動きに合わせ、他の者もそちらに移動を始めた。



翔司はひとつ深呼吸を挟み、ゆっくりと話し始める。

……みるみるうちに全員の顔色が変わったのは言うまでもないだろう。

「はぁ……。んで？ その後どうしたの？ 間違いを起こしちゃった後！」

みさきに詰め寄られ、思わず後ずさりをする翔司。

しかし後方には優香と瑞奈が控えており、全く身動きが取れない。「どちらへ行かれるつもり？ あなたに逃げる資格はございませんわ」

「翔司さん！ 観念してください！ 逃げちゃダメです！」

「うっ……。ぐ……」

「ほら！ 早く吐く！」

「しょうじさん、これじゃ負け犬です！。そんなしょうじさん、キライです！」

皆がそれぞれの感情をぶつける中、マスターは我関せずといった感じで店の外に出て行ってしまった。

「わ……。わかったよ……。言うよ……」

翔司は大汗を書きながら、事情を説明する。

「寝てる音遠ちゃんにキスした直後に……。音遠ちゃん起きて……。いきなり泣いちゃって……。で、どうすりゃいいかわからなくなったから……。大急ぎでここに来たわけで……」

「音遠ちゃんをほったらかしで？」

「……。ああ」

「ここに来たら、解決するかと思った？」

「ここまで言っつて、みさきは左手で翔司の頭を鷲掴みにし、顔を真っ赤にしてさらに詰め寄る。」

その後、無言で小さくうなづく彼の顔面を、みさきは渾身の力を込めて殴りつけた。

怒りが頂点に達した彼女は、思うままの罵声を浴びせる。

「……最つ低！ 人間のクズ！ ゴミ！ 変態！ 害虫！ 鬼畜！  
強姦魔！！……ふざけんじゃねえよこのクソ野郎！！」

翔司の体は殴られた事で、周りのテーブルや椅子を巻き込んで崩れ落ちる。

マスターは店の外に出たまま、戻ってくる様子を見せない。

「はあっ、はあっ……。てめえは女の子を……。女の子の気持ちを……。何だと思つてんだよ！！ さんざん弄んでおいて、泣かれたらすぐにポイかよ！ 意味わかんねえよ！！」

情けなく倒れる翔司の胸倉を掴み、眼光鋭く睨みつけるみさき。

だがその瞳には、いつしか涙が浮かぶのであった。

「そつ……。それでも、男かよ！ 人間なのかよおお！！！ ぶ……

ぶつ……。ぶえええええ……ん！！！！」

「……みさき。あとは……。オレらに任せとけ」

「ひぐつ、ぐすん……」

翔司を罵り、号泣するみさきを、いつの間にか戻っていたマスターに託した圭輔は、やはり彼を見下すように言い放つ。

「そう言うこつた。みさきは……。オレらの気持ちを全部代弁してくれた。お前は、人として一番やつちゃんねー事をしちまつたんだ。悔い改めな」

「森野さん……。あなたには失望しました。もう少し骨のある殿方と思つていましたが……」

優香は拳を握り締め、いつでも攻撃の出来る体制になりながら言う。

「本来ならば、ここであなたを再起不能にしたいほどに私も怒気を漲らせているのですが……。この若い身空で監獄に放り込まれたくはありませんので。運のいい人ね」

「翔司さんがそんな人だつたなんて……。信じられない！！」

「しょうじさん。ミーはガツカリしました。ねおんのおねーちゃんがかわいそうです！ もう顔も見たくないです」

皆が翔司に非難の声を浴びせ、軽蔑の視線を向ける。

しかしマスターだけは、そんな彼にも哀れみの目を向けていた。彼は小さくすすり泣くみさきをなだめながら、小さく声を発する。「……翔司くん。キミのしてしまった事は非常に許しがたい事だ。いくらキミが誠心誠意謝罪したとしても、その罪が消えることはないだろう。一生、な」

翔司も自分の罪を認めているのか、先ほどから何も言わずに全員の言葉を受け止めている。

「……だけどね、冬は必ず春になる。止まない雨はないんだ。……今すべき事、わかるだろう？ わからないのなら、キミはそれまでだ。救いようがない。そのまま消えるんだね」

「……」  
口から滴る血を舐める事もせず、無言で立ち上がって店をあとにする翔司。

店内に流れる音は、勇気ある一人の少女のすすり泣くか細い声のみだ。

……だが、彼は数分もしないうちに戻ってくる事になる。

それというのも、店の前には彼の探しているはずの音遠本人が立っていたからだ。

「ね、音遠ちゃん……」

「ここにいたんだね、やつぱり。……血が出るよ、大丈夫？」

「あ、これはオレが悪いんだから大丈夫。それよりさ、中入る？」

「うん」

翔司は音遠を連れて店内に戻る。

一気に視線はこちらに向けられるが、誰も立ち上がるうとはしなかった。カウンター席に座り、マスターと相對する。

「いらつしゃいませ。何にする？」

「いらない……」

「……そう。それじゃ、ごゆっくり」

空気を読んだマスターは、そそくさとその場を去ってゆく。

カウンターには、二人が残される形になった。

「あ……あのさ……音遠ちゃん……」  
「うみゆ？」

「さっき……ごめん。いきなりあんな事しちゃって……。それで、泣かしちゃって……」

「……もういいよ……」  
「もういい、って？」

「もう……気にしなくていいって事だよ。私も……泣いちゃったりしてゴメンって言いたかったんだよ？ それなのにいきなりどっか行っちゃうんだもん……」

「そこも……謝らなきゃなんねー事だ。本当に悪かった！ この通りだ、許してくれっ！」

「……じゃあ……、私の言う事を聞いてくれたら、許してあげる」

「ああ、もちろん！ ……何でも言つてよ、何してほしい？」

「……目をつぶって、しばらく動かないで……」  
「え？ それでいいの？」

言われるがまま、目を閉じる翔司。

その様子を遠くから見ている圭輔たち。

そして、一挙手一投足の行方が気になる音遠。

彼女はゆっくりと立ち上がると、翔司の後ろに回りこみ、背中から抱きついた。

(……えっ……！?)

(うおおお！？ マジかよ！?)

「目、開けていいよ……」

「う、うん……。えっと、音遠ちゃん？」

「なあに？」

「そ……その……。これで許してくれるって……」

「うん。それはこれから。私の言う事を聞いてくれれば、許してあげる」

「わかった。……それは何？」

音遠の方に振り向く事もせず彼女の言葉に聞き入る翔司。

……そして、ついに彼女の口が開かれる。

「わ……私と……。つ……つき……付き合っ……欲しいの……。  
あう……」

「……っ!？」

(何い!？ そう来るか!?)

予想もしなかった、突然の告白。

この場にいる誰がこの展開を予想していただろうか。

翔司は慌てて、後ろの音遠の方に向き直る。

「そ……それってどういう……」

「私……。お兄ちゃんがいなくなってから……ずっとさみしかったの……。待てなかったの……。それで、みんなに迷惑いっぱいっばいかけちゃって……」

どうやら彼女も、自分の行為が他人にどれだけの迷惑をかけていたかに気づいてはいたようだ。

「そんな自分が許せなくて、悲しくて……だから自分を傷つけた。

自分への戒めと、寂しさを紛らわすため……。そして、みんなに気にかけて欲しかったために……」

それでもなお、過激とも思える行動を続けた理由も明かされた。

それは兄を想う自分への戒め、悲しみの回避、さらには周囲の人間への理解。

「でも、必要以上にみんなに心配かけるばかりで……。それから夜、こっそりお兄ちゃんのお部屋で……今度は自分を慰めてた。でも涙は止まらなかったの……。くすん……」

「音遠ちゃん……」

「私は……お兄ちゃんのぬくもりが欲しかった。もうそれは叶わぬ夢だけど……。マスターに説得されるうちに、少しずつお兄ちゃんと決別できたの……」

(ふむ。ということとは……僕の説得は、強ち無駄ではなかったという事か)

「そんな私に、翔司くんはいつも優しくしてくれたよね。ううん、その前からずっと……。高校のときからそうだったよね」

「あ、ああ……。オレは確かに、高校の時から……」

「でもその頃の私は……お兄ちゃんしか見えてなかったの。翔司くんの優しさとか、私に向けてくれた気持ちをわかってあげられなかった……」

「気づいては……くれてたんだね」

「うん……。でも、あの頃はお兄ちゃんが……。ごめんね……。ごめんね……。私なんかを好きになってくれたのに、ずっと冷たくしちゃって……」

再び兄である灯夜を思い出したか、はらはらと涙をこぼす音遠。

自分の肩が彼女の涙で濡れていくのを感じた翔司は、力強く言い切った。

「……もう……いいんだよ……」

「う……?」

「オレ、ずっとあいつの二番煎じでしかなかった。いや、それでもおこがましいかもな。あいつは勉強も運動も両方できちまうし……。そのくせオレにすっげーいろいろしてくれた」

「……お兄ちゃんは、翔司くんと一緒にいる時が一番輝いてたよ」

「そっ……。か。だけどオレは、音遠ちゃんを想う気持ちだけは負けないと思った。好きになるだけなら自由だからな」

「うん……。だから私も、お兄ちゃんの事を好きになったの」

「で、結局言いたい事も言えないまま卒業してっただけ。でも正月に逢えて、マジビビった。圭輔がここに連れてきてくれなかったら、こうして再会できなかったと思う」

「私もそう思うの……」

（ケーツ！ 今更オレをヨイショしたって何も出ねーぞ!?!）

「ずつとね、あなたの気持ちには気づいてた。でも……。あの頃は……お兄ちゃんとずつと一緒になれると思ったから。お兄ちゃんも私を離さないって約束してくれたし」

この辺りに、灯夜と音遠の意識の違いが生じている。

兄の灯夜はあくまでも『兄妹』として一緒にいるというつもりでそう宣言していたのだが、音遠は『恋人』として一緒にいてくれると思っていたのだ。

「だけど、お兄ちゃんが留学して、その間にいろんな人に言われていくうちに……他の人が向けてくれる気持ちにようやく気づけるようになれた」

「そこで、オレの気持ちに気づいてくれたんだね……」

「うん。だから……私を好きでいてくれる翔司くんの気持ちに、真っ直ぐに向き合えるようになったの。でも私……、それをどう表現していいかわかんなくて……」

「……そんなの、わかんなくていいんだ」

「ふえ？」

「わかんなくたって、その場の雰囲気と自然とできるようになってるもんさ」

「……」

「それに……まだまだ先は長いんだ。わかんなければ、わかるまで突き詰めていけばいいだけの話だ」

「う、うん……」

「だからさ音遠ちゃん。これからは二人で手を取り合って、その答えと一緒に見つけに行こう！ な？ いいだろ？」

「……うんっ！！ 嬉しいの、嬉しいの〜！ きゃう〜」

翔司も、自分の気持ちを真っ直ぐに音遠に向ける。

二年越しの念願が、ようやく成就した瞬間だ。

その直後、勢いよく翔司に抱きつく音遠。

翔司もそんな彼女を強く、しかし優しく抱きしめる。

「……だっこして」

「え？ 今してるじゃんか」

「違うの〜！ ほら、よくあるでしょ？ ドラマとかで……」

「ああ、あれのことか。お姫様抱っこ」

「うん！ それそれ！」

「了解っ！ ……んしょ」

翔司は抱きしめた音遠を持ち上げ、お姫様抱っここの体勢になる。小柄な女の子である音遠だが、運動が習慣になっっていない翔司にとってはかなりの負荷を感じているようだ。

「……ちゅーして……」

「……キス？」

「このままで……。今なら心の準備できてるから……」

「いいの？ ……本当に」

「うん。お願いします……」

そのままうつとりと瞳を閉じる音遠。

翔司は一呼吸置いたあと、彼女のみずみずしい唇を包み込む。

（うわっ！ やっちまいやがった！ 携帯どこだ……）

（ご心配なく。私が一部始終を動画に収めておりますので）

（マジ！？ ナイスだ優香ちゃん！ あとで見せてくれ！）

（当然でしょう。こういうシーンは滅多に拝めませんので、皆で楽しまないと。……もう少し続けますわね。ここからが山場でしょうから）

（なんか優香ちゃん、キャラ変わったなあ……）

（……ああもう、手ブレはどうにかならないものかしら）

ギャラリーがいることも忘れ、ただ一心に互いの唇を重ね合わせる二人。

口の中で唾液が混ざり合い、舌が触れ合う。

心臓の鼓動は、止まらない。

（にやう……。私……。幸せだう……）

（オレ……。超サイコーだ……。もう絶対、離さねえ！）

5分後、どちらからともなく口を離れた。

そして、互いに顔を見合った後、音遠が小さく微笑んだ。



「えへへ。ちゅー、しちゃったね」

「そうだね……。オレ、すげー幸せ」

「私も」。翔司くん大好きなの……。……」

再び、翔司にしがみつくように抱きつく音遠。

そんな彼女の頭を優しく撫でてやりながら、翔司はつぶやく。

「ずっと……。一緒に歩いて行こうね。オレ、離さないし、離れない。絶対。ダメなオレだけどさ、それは約束できる。あとは……。誰よりも音遠ちゃんを愛するって事も」

「うん！ 私も……。おんなじなの……。ぎゅっ……。っ」

さらに深く、絆を深める音遠。

翔司もそんな彼女の背中に手を回し、抱きしめる。

高校時代から続く翔司の二年越しの想いと、音遠の兄に対する決別が生み出したこの繋がりには、新たな道へのスタートとなることだろう。

「お〜い暑いぜマスター！ 暖房止めてよ！」

「はいはい。むしろ冷房つける？」

「それよりもさ、かき氷ちよーだい！」

「あら、でしたら私もいただこうかしら。味はシンプルに、練乳で」

「お姉様がそうするならわたしも〜！」

「しようじさんと、ねおんのおねーちゃん、らぶらぶですー！ うらやましいです。ゆいのうは、いつです？」

「ぶっ！？ ゆ、結納だあ！？ クリスちゃん、なんでそーゆー言葉は知ってるんだよ……。ま、まあ、それはさておいてだな、おめでとう！ お二人さん！」

「圭輔……」

「さつきは……。ごめんね。痛かったでしょ？」

「ああ、すっごくね」

「どうする？ 今来てない子たちも呼ぶ？ どうせさつき閉店にしちゃったから、あとは僕の目の届く範囲なら何したっていいし」

「あ、だからさつき外に出てたんだ……。マスターがそれでいいつてんならパーッとやろうぜ！ 二人の門出を祝ってな！！」

「圭輔……。お前ってやつは……」

「いいんだよ。さつきも言ったけど、オレたち友達だろ？ 友達だからああいうことも言う。みさきみたいな事も、たまにはする」  
「……………」

「だけど、それらを乗り越えてこそ、本当の友情が生まれるんじゃないのか？ 違うか？ 逆に、そういうのがない関係なんて薄っぺらいだけじゃないのか？」

「全くその通りだ。……それじゃ、さつきし損ねた握手」

「ん。これでオレらも、また絆を強めたってわけだな」

翔司が差し出した手を、圭輔は何のためらいもなく受け取る。

一時は壊れてしまったかと思われた友情は、壊れることなくここに厳然と残っていたのだ。

程なくして、今ここにいなかったメンバーも合流し、貸切となったHexagramは大盛り上がりを見せていた。

この一角は、さまざまな紆余曲折の果てになんとか一つになった翔司と音遠を祝福する場となるのだった。

## 終章：Celebrate

音遠と付き合うようになった翔司は、しばしばカフェの中で勉強をするようになっていた。

彼女が大学に行っている間も一緒にいたいというのがその理由で、私立牧田海浜大学……通称牧浜大学への入学を考えているようだ。

幸い、牧浜大学は3月に後期募集があるので、願書などを書いた上で受験に備える事は可能だった。

だが、一人で進めていくことについてに限界を感じた翔司は、カフェの仲間達に頼み回っている。

「というわけなんだ。頼むっ！ オレに勉強を教えてください！」

「もちろん協力するの。みさきちゃんにも手伝ってほしいの。」

「音遠ちゃんに頼まれちゃー、断るわけにいかないじゃん！」

「本当か！？ ありがてえっ！」

「まーねン。でもカン違いするんじゃないわよ！？ アタシはねえ、音遠ちゃんのために仕方なくやるんだからね！ そこんとこ理解するよっに！」

「へいへい。そういうことにします」

「……でもさ、アタシらだけで大丈夫かね？ おんなじガッコ行ってるの他にもいるから、みんなで協力したほうがいんじゃない？」

「そうだね。絵実梨さんとか芽衣ちゃんとかでしょ？」

「そそ。……そーいや、ちょうど5人よね。だったら曜日ごとに担当者変えて、それぞれ得意なものを教えていくみたいな形式取るってのどう？」

「わあ〜！ それ賛成！ じゃーさじゃーさ、みんなに連絡しよーよ！」

「あ、その辺はアタシやつとくから、音遠ちゃんは翔司とごゆる〜っくりね。そんじゃーね！」

みさきはそう言つと、そそくさと店を出て行ってしまった。

残された二人は、自然と寄り添っていた。

「でもビックリしちゃったう。いきなり大学受けるーなんて。やりたい事、見つかったの？」

「いんや、まだ。ただ……やっぱ音遠ちゃんと一緒にいたいって気持ちが一番先行してるだけ。んでもね、自分のやりたい事を大学で探すつてもアリかと思うんだ」

「アリというか、みんなそうだと思うよ？ 私だってそうだもん」

「まあ、オレも音遠ちゃんと付き合う以上はフラフラしてちゃいらんねーからな。自分のやりたい事を模索してる間はなんつーか、成長できてると思うし」

「翔司くん……。私、応援するからね。がんばってね」

音遠は小さく彼にキスをする。

翔司の決意は、固かった。

数日後、『翔司を絶対に合格させる隊』と称する五人組が結成されることになった。

メンバーは音遠、みさき、絵実梨、周一、芽衣の5人で、全員同じ大学に通っている。

「えっと、周一ちゃんと芽衣ちゃんとは初対面だっけか？」

「まあな。よろしくな、翔司。お前の事は圭輔からいろいろ聞いているよ。いろいろあつたんだな……お前も」

「ボクもよろしくね、翔司くん！」

「じゃー聞いて。来週……つっても明日からだけど、アタシら5人がアタシの勉強に付き合っただけ。今から曜日ごとの担当を言うからね。よく聞きなさいよ」

「おっ、おっよー！」

翔司はそう言いながらメモ帳を取り出し、みさきの言葉に耳を傾ける。

「まず月曜がアタシの国語。主に古典を担当するわ。ああ、うちの文学部の入試に漢文は出ないから安心しなさいな」

「漢文は出ない……。つと。よし、いいぞ」

「火曜が芽衣ちゃんの英語ね。リーディングかな？ やるとしたら、リーディングつつつても試験に発音みたいなさういうのは出ないから、文法とかさういうのよね？」

「うんっ！ ボク、張り切っちゃうからね！」

「芽衣ちゃんはそんなに張り切んなくてもいいの！」

「むにい……」

「で、水曜がシュウの国語。現国をお願いしたから。めんどくさがらずにちゃんとやってあげなさいよ？ 唯一の男なんだから」

「はいよ……。あーめんどくせえ」

「ホントに大丈夫なのかしら……。まあいいわ。木曜が絵実梨ちゃんの英語。ライティングやってもらうわ。絵実梨ちゃん、しっかりね！」

「まかせて。私、英語は得意だから」

「うん……。で、金曜が音遠ちゃんの国語。漢字とか文法とかさういうのね」

「う、うん。私もちゃんと準備しておかなきゃ……」

「あと、土日は自習よ。わかんない所あったら聞きにいらっしやい。できるだけ空けておくから。あと一ヶ月、時間はないわよ！？」

「ああ！ わかっているさ、もとから厳しいのは承知の上だ」

「頼もしいわね。んじゃ、今日はパーツと遊んじゃいましょ！ 士気を高めてからやった方が効率いいんだからね」

翌日から、いよいよ翔司の勉強の日々が幕を開けた。この期間中は、担当教員を自分の部屋に招いての勉強だった。

そのため幾度となく脱線をしてしまったものの、それでもそれぞれの特色を生かした勉強方法を展開し、彼の学力は見違えるほどに伸びていった。

費用を考えれば、下手に予備校に通うよりも効果的であったらう。

こんな調子で迎えた受験日当日。

会場には『翔司を絶対に合格させる隊』の5人も来ており、直前まで彼を励まし続けた。

「ここまで来たら、もう頼れるのは自分だけよ！ 悔いなんて残しちゃダメだかんね！」

「ま、せいぜい頑張ることだな」

「翔司くんなら大丈夫だよっ！ 自分を信じてね！」

「早く終わらせるのもいいけど、ちゃんと見直しするんだよ？」

「翔司くん……。私、信じてる」

「みんな……。今までありがとう。絶対に満足いく結果を残してみせるよ！」

そのままゆつくりと背を向け、会場に向けて歩き始める翔司。

5人は、その様子を最後まで見守っていた。

そして数日後、翔司は大慌てでカフェのドアを開ける。

その手に、大きな封筒を携えて。

「はあ……はあ……はあ……」

「いらっしやい。どうかした？」

「み……みんなは？」

「みんな？ そっち」

マスターの指差す方には、やはりいつものメンバーがたむろしていた。

翔司は流れる汗を拭おうともせず、仲間たちの元に近づいてゆく。

そして……。

「み……みんな！ 聞いてくれ！ つーか見てくれ！」

「お、翔司？ どうした？」

「……まさか！？」

「そう。……そのまさかだ……！」

翔司は後ろ手に持っていた封筒を頭上に掲げる。

それはまさしく、大学の合格通知が入った封筒であった。

入学手続きに必要な書類等は家に残し、合格通知書やパンフレットののみを入れて持ってきたのだ。

直後、仲間たちから温かな言葉が投げかけられる。

「うおおお〜！！ すごい！ すごいぞ翔司！ やったなコンチクショ〜！」

「さすがでっす翔司さん！ 愛の力は、大学合格まで引き寄せちゃうんでっすね！ 有言実行に、男の中の男を垣間見たでっす！ オレっち……アンタを尊敬しまっす！」

「よかったな、おめでとう！ 学校でも姉貴と仲良くやってくれよな」

「本当に……おめでとうございます。やはり貴方は、やればできる殿方でしたね」

「翔司さんすっごお〜い！ おめでとうございます！」

「おめでとーなのです！ くすだまはどこです？」

「やったね！ おねーちゃんも喜んでるよっ！」

全員からの祝福が終わると、最後にマスターが翔司の肩を抱きながらゆっくりと言葉を發した。

「僕からも言わせて欲しい。……本当によくやった。これからの人生は、キミのものだ。誰のものでもない、キミ自身のオリジナルだ。どんな風に色づけしようとする自由だよ」

「オレ自身の……オリジナル……か。はは、なんかいきなりそう言われても実感が湧かないよ」

「それはこれからイヤでもわかるよ。そしてそれがわかる頃……きつとキミはここから巣立っているだろう。だが僕はいつでも、ここ Hexagramで待っているよ。みんなの帰りを、ね」

「ま……マスター！ それに……みんな！ ありがとう！ オレ……すげー嬉しくて……。うっ、ぐっ……！」

こみ上げてくる熱いものを抑える事もせず、翔司は感情に任せて泣きじゃくる。

声を上げる事はなかったが、流れるものは止まらない。

そんな中、静かにドアを開ける音が響き渡る。

「現れたのは、音遠だった。」

「翔司くん……！」

「音遠ちゃん……。オレ、やったよ。合格した。4月からおんなじ学校に通えるよ。」

「うん……。うん……。私……。嬉しすぎてなんて言ったらいいか……。」

「オレも……。わかんないや。でも、それでもわかる事はあるよ。」

「なあに……？」

「オレが、ここに居ること。みんなが居ること。そして……。オレには音遠ちゃんがいること。これだけは未来永劫、どこに行っても変わらない……。よな？」

「……。うん！ 変わらない！ ずっと……。ずっとみんな一緒！ そして……。私と翔司くんもずっと一緒！！……。だ〜い好き！！」  
カフェの中心で、抱き合った二人。

そしてすぐさま、誰からともなく始まった拍手に包まれる。

新たなスタートラインに立った二人を祝福するかのようなその拍手は、いつまでも鳴り止む事はなかった。

どこかの場所のどこかの時代、今日も彼らは生きている。

そして何かを、いつも探し求めている。それは、誰もが持つてる

『Precious Melody』。

形を変えて、みんなのもとへ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1474o/>

---

Precious Melody -2nd Stories-

2011年1月11日23時11分発行